

日蓮大聖人御書全集

おんこうききがき

御講聞書

新版
1120
ゝ
1181

おんこうききがき

御講聞書

こうあん がんねん さんがつ じゅうくにち

れんれん

おん こう

どう さんねん ごがつ

弘安元年三月十九日より連々の御講、同三年五月

にじゅうはちにち いた

二十八日に至るなり。よつて、これを記し畢わんぬ。

にこう

しる

日向これを記す。

ほけきよう

もう

いっさいしゅじようかいじようぶつどう

ようほう

およそ法華經と申すは、「一切衆生皆成仏道」の要法

だいかくせそん

せつじみしこ

せつじ

いた

なり。されば、大覺世尊は「説時未至故（説時のいまだ至ら

ゆえ

と

たま

と

じsつ

待

たま

ざるが故に」と説かせ給いて、説くべき時節をまたせ給い

れい

ほととぎす

はる

送

にわとり

あかつき

ま

な

き。例せば、郭公の春をおくり鶏鳥の暁を待つて鳴くが

すなわ とき ま ゆえ

ねはんぎよう

ごときなり。これ則ち時を待つが故なり。されば、涅槃經

い とき し ゆえ だいほつし な と

に云わく「時を知るをもつての故に、大法師と名づく」と説

いま まつぽう なんみようほうれんげきよう しちじ ひろ

かれたり。今、末法は、南無妙法蓮華經の七字を弘めて、

りしよう とくやく とき だいもく よじ まじ

利生・得益あるべき時なり。されば、この題目には余事を交

ひがごと みようほう だいまんだら み たも ところ

えば僻事なるべし。この妙法の大曼荼羅を身に持ち、心に

ねん くち とな たてまつ とき いちぶ

念じ、口に唱え奉るべき時なり。これによつて、一部

にじゅうはつぽん ちようじよう なんみようほうれんげきようじよほんだいいち だい

二十八品の頂上に「南無妙法蓮華經序品第一」と題した

り。

みようほうれんげきようじよほんだいいち こと

一、「妙法蓮華經序品第一」の事

けんしでん

い

いつさいきよう

そうよう

い

みようほう

「玄師伝に云わく『一切経の総要とは、謂わく妙法

れんげきよう

ごじ

い

いちぎよういつさいきよう

蓮華経の五字なり』。また云わく『一行一切行にして、

さんまい

しゅ

い

さんまい

すなわ

つねにこの三昧を修す』。云うところの『三昧』とは、即ち

ほつけ

うそう

むそう

にぎよう

どうり

ほけきよう

法華の有相・無相の二行なり。この道理をもつて法華経を

どくじゅ

ぎようじゃ

すなわ

ほうぐ

いっしんさんがん

うんぬん

読誦せん行者は、即ち法具の一心三観なり」云々。

しゃく

いつさいきよう

い

ちか

けごん

あごん

この釈に「一切経」と云うは、近くは華嚴・阿含・

ほうどう

はんにやとう

とお

だいつうぶつ

このかた

しよきよう

ほんもん

方等・般若等なり。遠くは大通仏より已來の諸経なり。本門

まごころ

じゅりようほん

のぞ

ほか

いつさいきよう

そうよう

の意は、寿量品を除いてその外の一切経なり。「総要」

てん

にちがつ

じ

だいおう

ひと

たましい

がんもく

とは、天には日月、地には大王、人には神・眼目のごと

ところ

しゃく

すなわ

みようほうれんげきよう

くなりという意をもつて釈せり。これ即ち妙法蓮華經

しよう

いちぎよう

みようほう

いちぎよう

いつさいぎよう

おさ

の枝葉なり。「一行」とは、妙法の一行に一切行を納め

ほうぐ

だいもく

ごじ

ばんぼう

ぐそく

たり。「法具」とは、題目の五字に万法を具足すること

なり。

さんぜじつぼう

しよぶつ

じようぎようぼさつとう

しかるあいだ、三世十方の諸仏も、上行菩薩等も、

だいぼんてんのう

たいしゃく

しおう

じゅうらせつによ

てんしやうだいじん

はちまんだいぼさつ

大梵天王・帝釈・四王・十羅刹女、天照太神・八幡大菩薩・

さんのうにじゅういちしや

ほかにほんこくじゅう

しやうじん

だいじんとう

きよう

山王二十一社その外日本国中の小神・大神等、この經の

ぎようじや

しゅこ

ほけきよう

だいご

まき

ふんみよう

と

行者を守護すべしと法華經の第五の卷に分明に説かれた

かげ

み

おと

ひび

ほけきようにじゅうはつぽん

かげ

り。影と身と、音と響きとのごとし。法華經二十八品は、影

のごとく、響ひびきのごとし。題目だいもくの五字ごじは、体たいのごとく、音おとの

ごとくなり。題目だいもくを唱となえ奉たてまつる音こえは、十方世界じつぽうせかいにとずかずと

いう処ところなし。我われらが小音しょうおんなれども、題目だいもくの大音だいおんに入れて唱い

え奉たてまつるあいだ、一大三千界いちだいさんぜんかいにいたらざる処ところなし。譬たとえば、

小音しょうおんなれども貝ばいに入れて吹いく時ふ、遠ときく響とおくがごとく、手ての音おと

はわずかなれども鼓つづみを打うつに遠とおく響ひびくがごとし。一念三千いちねんさんぜん

の大事だいじの法門ほうもんこれなり。かかるめでたき御経おんきょうにてわたらせ

給たまえるを、謗そしる人何ひとぞ無間むけんに墮だ在ざいせざらん。法然ほうねん・弘法等こうぼうとうの

大悪知識だいあくちしきこれなり云々うんぬん。

いち みようほう

一、妙法

みようほう

にじ

いっさいしゅじょう

しきしん

にほう

いちだい

「妙法」の二字は、一切衆生の色心の二法なり。一代

せつきよう

なか

ほう

じ

うえ

みよう

じ

お

きよう

説教の中に「法」の字の上に「妙」の字を置きたる経は

いっきよう

ねはんぎよう

だいもく

だいねはんぎよう

い

だい

一経もなし。涅槃経の題目にも「大涅槃経」と云つて、「大」

じ

みよう

じ

しやくせんだい

い

の字あれども、「妙」の字なし。ただし、釈籤第一に云わ

だい

みよう

い

く『大』は、ただこれ『妙』なるのみ」と云えり。しか

だい

みよう

ふどう

おな

だい

れども、「大」と「妙」とは不同なり。同じ「大」なれど

けこんぎよう

だいほうこうぶつけこんぎよう

い

だいこう

だい

も、華嚴経の「大方広仏華嚴経」と云える題号の「大」と、

ねはんぎよう

だい

てんちうんदै

けこんぎよう

だい

むとくどう

涅槃経の「大」と、天地雲泥なり。華嚴経の「大」は無得道

の「大」なり。だい涅槃經の「大」は法華と同じく醍醐味の「大」ねはんぎよう

なり。だいしかれども、「しかも涅槃なお劣る」と云う時は、ねはん

ほけきよう法華經には劣れり。おとこのことは、ねはんぎよう涅槃經に分明に「法華經

に劣る」と説かれたり。おと涅槃經に云わく「法華の中の八千の

声聞の記別を受くることを得て大果実を成ずるがごとし。しようもん きべつ う

秋收冬蔵して、さらに所作無きがごとし」云々。この文、しゅうしゅうとうぞう しよさな うんぬん もん

分明に我と法華經に劣れりと説かせ給えり云々。ふんみよう われ ほけきよう おと と たま うんぬん

一、蓮華いち れんげ

「蓮華」とは、本因本果なり。この本因本果というは、れんげ ほんいんほんが ほんいんほんが

いちねんさんぜん

一念三千なり。本有の因、本有の果なり。今始めたる因果に

ほんぬ いん

ほんぬ か

いまはじ

いんが

ごひやくじんてん ほうもん

あらざるなり。五百塵点の法門とは、このことを説かれた

ほんいん いん

げしゆ だいもく

ほんが か

り。本因の因というは、下種の題目なり。本果の果とは、

じようぶつ

いん

しんじんりようのう

きよう

成仏なり。因というは、信心領納のことなり。この経を

たも たてまつ

とき

ほんいん

ほんいん

じようぶつ

い

持ち奉る時を、本因とす。その本因のまま成仏なりと云

ほんが

い

にちれん

でしだんな

かんよう

ほんが

うを、本果とは云うなり。日蓮が弟子檀那の肝要は、本果よ

ほんいん

しゅう

ほんいん

ほんが あ

り本因を宗とするなり。本因なくしては、本果有るべから

ほんいん

え

いん

みようじそく

くらい

ほんが

ず。よって、本因は、慧の因にして名字即の位なり。本果

か

くきようそく

くらい

くきようそく

くしきほんがく

いみよう

は、果にして究竟即の位なり。究竟即とは、九識本覚の異名

くしきほんぽう

みやこ

ほつけ

ぎようじゃ

じゅうしよ

じんりきほん

なり。九識本法の都とは、法華の行者の住所なり。神力品

い

にやくせんごくこうや

さんごくこうや

とう

と

に云わく「若山谷曠野（もしは山谷曠野にても）」等と説け

そくぜ どうじよう すなわ

どうじよう

み

り。「即是道場（即ちこれ道場なり）」と見えたり。あに、

ほつけ

ぎようじゃ

じゅうしよ

しいうじよ

とくどう

てんぽうりん

にゆうねはん

そぶつ

法華の行者の住所は、生処・得道・転法輪・入涅槃の諸仏

ししよ

どうじよう

うんぬん

の四処の道場にあらずや云々。

いち

ほんいんほんが

こと

一、本因本果の事

ほうかい

じようじゅうふめつ

ていたらく

い

法界ことごとく常住不滅の為体を云うなり。されば、

みようらくだいし

しゃく

とき

ぐけつ

い

まさ

し

妙楽大師このことを釈する時、弘決に云わく「当に知るべ

しんど

いちねん

さんぜん

ゆえ

じようどう

とき

ほんり

し、身土は一念の三千なり。故に、成道の時、この本理に

かな いっしんいちねんほうかい あまね うんぬん しやく ふんみよう ほんいん

称つて、一身一念法界に遍し」云々。この釈、分明に本因

ほんが しやく しん いっさいしゅじよう ど

本果を釈したり。「身」というは、一切衆生なり。「土」

いっさいしゅじよう じゅうしよ いちねん

というは、この一切衆生の住处なり。「一念」とは、この

しゅじよう ねんねん さごう ゆえ じようどう とき ほんり かな

衆生の念々の作業なり。「故に、成道の時、この本理に称

ほんいんほんが じようどう ほんり ほんいんほんが おな

う」とは、本因本果の成道なり。「本理」と本因本果とは同

ほうかい ごだい せん ほけきよう

じことなり。「法界」とは、五大なり。詮ずるところ、法華経

たも たてまつ ぎようじゃ にやくさいぶつぜん けんげけしよう ぶつぜん

を持ち奉る行者は、「若在仏前、蓮華化生（もし仏前に

あ れんげ けしよう しょうしほんり ほんり

在らば、蓮華に化生せん）なれば、「称此本理（この本理に

かな じようどう ほんり かな みようほうれんげきよう ほんり

称う）の成道なり。「本理に称う」とは、妙法蓮華経の本理

かな

ほけきよう

ほんり

かな

きよう

に称うということなり。法華經の本理に称うとは、この經

たも

たてまつ

い

にやくうのうじ

そくじぶつしん

よ

を持ち奉るを云うなり。「若有能持 則持仏身（もし能く

たも

すなわ

ぶつしん

たも

持つことあらば、則ち仏身を持つ」とは、これなり。

いち

にぜんむとくどう

こと

一、爾前無得道の事

ほうもん

れんげ

にじ

お

ゆえ

この法門は、「蓮華」の二字より起これり。その故は、

れんげ

にじ

い

ゆえ

さんぜ

しよぶつ

「蓮華」の二字をもつて云うなり。その故は、三世の諸仏の

じようどう

とな

れんげ

にじ

い

ごんきよう

成道を唱うるは「蓮華」の二字より出でたり。権教にお

れんげ

さたな

あ

い

うみようむじつ

いて「蓮華」の沙汰無し。もし有りと云うとも、有名無実の

れんげ

さんぜ

しよぶつ

ほんじ

げしゆ

さ

け

「蓮華」なるべし。三世の諸仏の本時の下種を指して「華」

な げしゆ け じようぶつ れん と
と名づけ、この下種の「華」によりて成仏の「蓮」を取る。

みようほうれんげすなわ

げしゆ

げしゆすなわ

なんみようほうれんげきよう

妙法蓮華即ち下種なり。下種即ち南無妙法蓮華經なり。

け ほんいん れん ほんが

け

ほんいん

ふしんほうぼう

「華」は本因、「蓮」は本果なれば、「華」の本因を不信謗法

ひと

ぐそく

きよう

い

ひとしん

の人あに具足せんや。經に云わく「もし人信ぜずして、こ

きよう

きぼう

すなわ

いっさいせけん

ぶつしゆ

だん

うんぬん

の經を毀謗せば、則ち一切世間の仏種を断ぜん」云々。

れんげ

まよ

ゆえ

じっかいぐそくな

じっかいぐそく

この「蓮華」に迷うが故に、十界具足無し。十界具足せざ

いちねんさんぜんあとかたな

いっさい

ほうもん

れんげ

にじ

れば、一念三千跡形無きなり。一切の法門は、「蓮華」の二字

お

いちだいせつきよう

むとくどう

い

れんげ

より起これり。一代説教において無得道と云うも、「蓮華」

にじ

お

ふか

あん

うんぬん

の二字より起これり。深くこれを案ずべし云々。

いち じよほん こと

一、「序品」の事

きようしゆしやくそん ほけきよう と たま

このことは、教主釈尊、法華經を説き給わんとて、

ずいそう あらわ い いま まっぼう い

まず瑞相の顯れたることを云うなり。今、末法に入つて

なんみようほうれんげきよう あらわ たも ずいそう かれ ひやくせんまんばい

南無妙法蓮華經の顯れ給うべき瑞相は、彼には百千万倍

すぐ ゆえ あめ りゆう だいしやう れんげ いけ

勝るべきなり。その故は、雨は竜の大小により、蓮華は池

せんじん したが いろふどう うんぬん

の浅深に随つて、その色不同なるがごとくなるべし云々。

いち ほん い こと

一、「品」と云う事

ほん しゃく い ぎるいどう い ほけきよう

「品」とは、釈に云わく「義類同」と云えり。この法華經

さんぶつよ あ たま じようはん たま さんぶつ しゃか

は三仏寄り合い給いて定判し給えり。「三仏」とは、釈迦・

たほう ふんじん

さんぶつ ひようじよう

多宝・分身これなり。この三仏、評定してのたまわく

いっさいしゅじようかいじようぶつどう

ほけきよう かぎ あ

かい

『一切衆生皆成仏道』は、法華經に限って有り」と。皆

ぜしんじつ みな

しんじつ

しやうみよう ぜつそうぼんでん

じようしやう

是真実（皆これ真実なり）の証明、「舌相梵天」の誠証、

ようとうせつしんじつ

かなら

まさ

しんじつ

と

きんげん

「要説真実（要ず当に真実を説くべし）」の金言、これ

ぎるいどう

だい

ほん

じ

てんじく

ばっこ

らを義類同して題したる「品」の字なり。天竺には「跋渠」

い

ほん

い

しやか たほう

ふんじん

さんぶつ

と云う。ここには「品」と云えり。釈迦・多宝・分身の三仏

おんくち

さ

あ

どうおん

じようばん

たま

われ

の御口をもつて指し合わせ、同音に定判し給える我ら

しゅじよう

じようぶつ

たと

とり

たまご

うち

たまご

突

とき

衆生の成仏なり。譬えば、鳥の卵の内より卵をつつく時、

はは

おな

開

おな

ところ

母また同じくつつきあくるに、同じき所をつつきあくるが

ごとし。すなわこれ即ち念慮ねんりよの感応かんのうするが故なり。ゆえ今、法華經いま ほけきようの

じようぶつ

成仏もかくのごとくなり。さんぜしよぶつ どうおんどうじ さだ たま三世諸仏の同音同時に定め給え

じようぶつ

ゆえ

きよう

い

じゅうぶつくしよう

によじゅうぶつく

る成仏なり。ゆえ故に、經に云わく「從仏口生」「如從仏口」

とううんぬん

等云々。

によぜがもん

われき

こと

一、「如是我聞（かくのごときを我聞きき）」の事

おほ

によ

しゆじよう

によ

ほとけ

によ

仰せに云わく、「如」というは、「衆生の如と仏の如と、

いちによ

にによな

くかい

ぶっかい

一如にして二如無し」なり。しかりといえども、九界と仏界

わ

ぜ

い

によ

によ

ふい

と分かれたるを「是」と云うなり。「如」とは、『如』は不異

な

すなわ

くう

ぎ

しやく

すこ

異

に名づく。即ち空の義なり」と釈して、少しもことなら

ざるを云うなり。い詮ずるところ、せん法華經の意は、ほけきよう煩惱即ぼんのうそく

ぼだい しょうじそくねはん しょうぶつふに めいごいったい

菩提・生死即涅槃・生仏不二・迷悟一体といえり。これを

によ「如」とは云うなり。いされば、「如」は実相、「是」は諸法な

により。また「如」は心法、「是」は色法、「如」は寂、「是」

しょうは照なり。「如」は一念、「是」は三千なり。今經の心は、

い文々句々、一念三千の法門なり。総じて「如是我聞」の四字

もんもんくく いちねんさんぜん ほうもん しょう によ ぜ がもん しじ

ほか こんきよう たいまつた な によ みよう おな

より外は今經の体全く無きなり。「如」と妙とは同じき

ことなり、「是」と法とはまた同じきことなり。法華經と

しやくそん われ みつ まつた ふどうな によ がとう むい わ

釈尊と我らとの三つ全く不同無く「如我等無異（我がご

ひと

こと

によ

い

とく等しくして異なることなし」なるを、「如」と云うな

ほとけ

さと

ぼんぷ

まよ

ぜ

い

り。仏は悟り、凡夫は迷いなりというを、「是」とは云う

なり。

がもん

が

あなん

もん

みみ

「我聞」というは、「我」は阿難なり。「聞」とは、「耳の

しゅ

しやく

もん

みようじそく

によぜ

にじ

主」と釈せり。「聞」とは、名字即なり。「如是」の二字は、

みようほう

あなん

はじ

りようぜんいちえ

ちようしゅ

どうじ

妙法なり。阿難を始めとして靈山一会の聴衆、同時に

みようほうれんげきよう

ごじ

ちようもん

われ

き

い

妙法蓮華經の五字を聴聞せり。よつて、我も聞くと云え

そうでん

てん

によ

ぜ

われき

り。されば、相伝の点には「如は是なりきと我聞く」とい

せん

まつぼうとうこん

なんみようほうれんげきよう

われ

き

えり。詮ずるところ、末法当今には南無妙法蓮華經を我も聞

（一）ころう

く^がと心得^{しんによほつしよう}べきなり。「我」は、真如法性の我^がなり。天台大師^{てんだいだいし}

どうもんしゆ

はん

おな

き しゆ

どう

は「同聞衆」と判ぜり。同じことを聞く衆というなり。「同」

みようほうれんげきよう

もん

そくしんじようぶつ

ほけきよう

とは、妙法蓮華経なり。「聞」とは、即身成仏は法華経に

かぎ

き

うんぬん

限ると聞くことなり云々。

いち

によぜ

にじ

一、「如是」の二字

によぜ

にじ

やつきよう

もと

しゃく

とき

もんぐ

いち

い

「如是」の二字を約教の下に釈する時、文句の一に云

いちじ

よつ

や

と

じ

お

わく「また一時に四つの箭を接つて地に堕ちしめざるも、

はや

しよう

どんろ

むち

はべつ

か

いまだあえて捷しと称せず。鈍驢に策うち、跛鼈を駆るも、

ひと

え

よつ

うんぬん

き

なおし一つをも得ず。いかにいわんや四つをや」云々。記の

いち い だいきよう い

一に云わく「大経に云わく、迦葉菩薩問うて云わく『いか

かしようぼさつと

い

ちしや ねんねん めつ かん

んが智者は念々の滅を觀ず』。仏言わく『譬えば、四人皆

ほとけのたま

たと

しじんみな

しやじゆつ よ

いつしよ あつ

おのおのいっぽう

い

ねんごろ

射術を善くす。一処に聚まつて、各一方を射るに念言す

われ

よつ

や

い

お

らく、我らの四つの箭はともに射ればともに堕ちんと。ま

ひとあ

ねん

お

およ

われよ

た人有つて念ずらく、そのいまだ堕ちざるに及んで、我能く

いちじ て

せつしゆ

ほとけのたま

一時に手をもつて接取せんというがごとし』。仏言わく

しょうしつき

ひと

はや

ひぎようき

『捷疾鬼は、またこの人よりも速し。かくのごとく飛行鬼・

してんのう

にちがつじん

けんしつてん

てんでん

や

はや

むじよう

四天王・日月神・堅疾天は展転して箭よりも疾し。無常は

す

これに過ぎたり』と」。

ほんまつ こころ

たし

きよう

によぜ

しやく

この本末の意は、他師この経の「如是」について釈

もう

ほけきよう

り

ふか

かな

を設くといえども、さらに法華経の理に深く叶わざるなり。

いち に

ぎり っ

いんねん

一・二だにも義理を尽くさざるなり。いわんや因縁をや。

やつきよう

かんじん

よつ

は

たま

いかにいわんや約教・観心の四つをやと破し給えり。

せん

ほけきよう

そくしつとんじよう

もと

われ

詮ずるところ、法華経は速疾頓成をもつて本とす。我

しゆじよう

むじよう

しようしつき

ら衆生の無常のはやきことは捷疾鬼よりもはやし。ここを

い いき い いき ま

もつて、出ずる息は入る息を待たず。

きよう

によぜ

にぜん

しよきよう

によぜ

すぐ

この経の「如是」は爾前の諸経の「如是」に勝れて

ちようはち

によぜ

ちようはちだいご

によぜ

そくしつとんじよう

ゆえ

超八の如是なり。超八醍醐の如是とは、速疾頓成の故な

みようらくだいしい

ちようはち

によぜ

り。ここをもつて、妙楽大師云わく「もし超人の如是にあ

きよう しよもん

うんぬん

らずんば、いずくんぞこの経の所聞となさん」云々。

いち ぎしやくつせん こと

一、「耆闍崛山」の事

おお い ぎしやくつせん

りようじゆせん

りよう

仰せに云わく、「耆闍崛山」とは、「霊鷲山」なり。「霊」

さんぜ しよぶつ しんぼう

かなら

やま ぶつぼう

とど たも

とは、三世の諸仏の心法なり。必ずこの山に仏法を留め給

じゆ とり

やま みなみ あ

しだりん

う。「鷲」とは、鳥なり。この山の南に当たつて尸陀林と

はやし しびと す

ところ

わし

しかばね

と く

いう林あり。死人を捨つる所なり。鷲、この屍を取り食

やま す

りようじゆせん

い

らつて、この山に住むなり。さて「霊鷲山」とは云うなり。

せん

いま きよう こころ

めいご いったい

だん

りよう

詮ずるところ、今の経の心は迷悟一体と談ず。「霊」

ほけきよう　さんぜ　しよぶつ　しんぽう　さと
というは、法華經なり。三世の諸仏の心法にして悟りなり。

じゅ　ちくしよう　まよ　めいごふに　ひら
「驚」というは、畜生にして迷いなり。迷悟不二と開く

ちゆうどうそくほつしよう　やま　ぎしやくつせんちゆう　ぎしやくつせん　なか
中道即法性の山なり。「耆闍崛山中（耆闍崛山の中）」と

めいごふに　さんたいいったい　ちゆうどうだいいちぎくう　ないしろう
いうは、迷悟不二、三諦一諦、中道第一義空の内証なり。

ほけきよう　ぎよう　にちれん　でしだんなとう　じゆうしよ
されば、法華經を行ずる日蓮が弟子檀那等の住所は、い

さんや　りようじゆせん　ぎようじや　しやか
かなる山野なりとも、「靈鷲山」なり。行者、あに「釈迦

によらい　にほんこく　ぎしやくつせん　にちれんとう　たぐ
如来」にあらずや。日本国は「耆闍崛山」、日蓮等の類いは

しやかによらい　そう　いちじょうなんみようほうれんげきよう
「釈迦如来」なるべし。総じて、一乘南無妙法蓮華經を

しゆぎよう　ところ　ところ　じようじやつこう　みやこ
修行せん所は、いかなる所なりとも、常寂光の都

りようじゆせん

「靈鷲山」なるべし。

ぎしやくつせんちゆう

ぼんのう

やま

ぶつばさつとう

この「耆闍崛山中」とは、煩惱の山なり。仏菩薩等は、

ぼだい

か

ぼんのう

やま

なか

ほけきよう

さんぜ

しよぶつと

菩提の果なり。煩惱の山の中にして、法華經を三世の諸仏説

たま

しよぶつ

ほつしよう

えじ

しゆじよう

むみよう

えじ

き給えり。諸仏は法性の依地、衆生は無明の依地なり。

やま

じゆりようほん

ほんぬ

りようぜん

と

ほんぬ

この山を寿量品にしては本有の靈山と説かれたり。本有

りようぜん

しやばせかい

なか

にほんこく

ほけきよう

の靈山とは、この娑婆世界なり。中にも日本国なり。法華經

ほんこくどみよう

しやばせかい

ほんもんじゆりようほん

みぞう

の本国土妙は、娑婆世界なり。本門寿量品の未曾有の

だいまんだらこんりゆう

ざいしよ

うんぬん

ゆがろん

い

とうほう

大曼荼羅建立の在所なり云々。瑜伽論に云わく「東方に

しようこくあ

なか

だいじよう

しゆしよう

あ

だいじよう

小国有り。その中に、ただ大乘の種姓のみ有り」。「大乘

しゆしやう

ほけきやう

ほけきやう

げしゆ

じやうぶつ

の種姓」とは、法華経なり。法華経を下種として成仏す

なんみやうほうれんげきやう

しやうこく

べしということなり。いわゆる南無妙法蓮華経なり。「小国」

にほんこく

うんぬん

とは日本国なり云々。

いち

よだいびくしゆ

だいびくしゆ

こと

一、「与大比丘衆（大比丘衆と）」の事

おお

い

もんぐ

いち

い

しやくろん

あ

だい

仰せに云わく、文句の一に云わく「釈論に明かすに『大

た い

しやう い

ないげ

きやうしよ

とは、また多と言ひ、また勝と言ひ。あまねく内外の経書

し

ゆえ

た い

すういちまんにせん

いた

ゆえ

た

を知るが故に、多と言ひ。また数一万二千に至るが故に、多

い

いま

あ

だいでうあ

ゆえ

だいでうあ

ゆえ

と言ひ。』今、明かすに、大道有るが故に、大用有るが故に、

だい

いち

ゆえ

ゆえ

だい

い

しやう

どうすぐ

大知有るが故に、故に『大』と言ひ。『勝』とは、道勝れ、

ゆうすぐ

ちすぐ

ゆえ

しよう

い

た

どうおお

用勝れ、知勝るるが故に『勝』と言う。『多』とは、道多く、

ゆうおお

ちおお

ゆえ

た

い

い

ごんよう

用多く、知多きが故に『多』と言う。また云わく「含容し

いっしんいっさいしん

ゆえ

た

な

て、一心一切心なり。故に『多』と名づくるなり」。

き

いち

い

いっしんいっさいしん

い

しん

きよう

記の一に云わく『一心一切心』と言うは、心・境と

こころ

おのおのいっさい

おさ

いっさい

さんぜん

い

もに心にして、各一切を摂む。一切は三千を出でざるが

ゆえ

しかん

だいご

もん

えんしん

故なり。つぶさには止観の第五の文のごとし。もし円心に

さんぜん

おさ

ゆえ

さんぜん

そうべつ

あらずんば、三千を摂めず。故に、三千は総別ことごとく

くう

け

ちゆう

いちもんすで

た

みな

じゆん

空・仮・中なり。一文既にしかり。他は皆これに準ぜよ」。

ほんまつ

こころ

しん

きよう

ぎ

いちねんさんぜん

しやく

この本末の意は、心・境の義の一念三千を釈するな

しかん だいご もん そ いっしん じつぼうかい ぐ ないし
り。止観の第五の文とは、「夫れ、一心に十法界を具す乃至

ふかしぎさきよう

もん さ

しん きよう

ぎ いちねんさんぜん

不可思議境となす」の文を指すなり。心・境の義の一念三千

よだいびくしゆ

だい

じ

しゃく

い

とは、この「与大比丘衆」の「大」の字より釈し出だせり。

だいたしよう

さんじ

さんたい

さんがん

えんどん

ぎようじゃ

きねん

「大多勝」の三字は、三諦・三観なり。円頓の行者の起念

とうたい

さんたい

さんがん

だいたしよう

しゃく

そう

の当体は、三諦・三観にして「大多勝」なり。この釈に「総」

いっしん

べつ

さんぜん

いちもん

というは、一心のことなり。「別」とは、三千なり。「一文」

だい

いちじ

とは、「大」の一字なり。

いま

まつぼう

い

ほけきよう

ぎようじゃ

にちれんとう

たぐ

今、末法に入つては、法華經の行者、日蓮等の類い、

まさ

だいたしよう

しゆぎよう

ほけきよう

ぎようじゃ

しゃかによらい

正しく「大多勝」の修行なり。法華經の行者をば、釈迦如来

はじ たてまつ

だいにん

うやま たてまつ

を始め 奉り、ことごとく大人となして 敬い 奉るなり。

まこと

だいまんだら

どうぐ

びくしゅ

ほんもん

じ

いちねん

誠にもつて大曼荼羅の同共の比丘衆なり。本門の事の一念

さんぜん

なんみようほうれんげきよう

だいたしよう

びくしゅ

もんもんくく

三千・南無妙法蓮華經の「大多勝」の比丘衆なり。文々句々

ろくまんくせんさんびやくはちじゅうしじ

じ

だいたしよう

にんぼういったい

六万九千三百八十四字の字ごとに「大多勝」なり。人法一体

そくしんじようぶつ

にして、即身成仏なり。

しゃく

い

だい

くう

ぎ

た

されば、釈に云わく「『大』はこれ空の義、『多』はこ

け

ぎ

しよう

ちゆう

ぎ

いちにん

うえ

だいたしよう

れ仮の義、『勝』はこれ中の義なり。一人の上にも「大多勝」

さんぎ

ふんみよう

ぐそく

だい

しゃくもん

た

ほんもん

の三義、分明に具足す。「大」とは迹門、「多」とは本門、

しよう

だいもく

ほけきよう

ほんぞん

だいたしよう

だいまんだら

「勝」とは題目なり。法華經の本尊は、「大多勝」の大曼荼羅

よだいびくしゆ

にかいはちばん ぞうしゆ

なり。これあに「与大比丘衆」にあらずや。二界八番の雜衆、

ほつけ えざ だいまんだら

ほけきよう ぎようじや

ことごとく法華の会座の大曼荼羅なり。法華經の行者は、

にほう じよう す みようほう しん

だい

二法の情を捨ててただ妙法と信ずるを、「大」というなり。

だいもく いっしん いっさいしん ごんよう

た い

この題目の一心に一切心を含容するを、「多」と云うなり。

しよきよう しよにん すぐ

ゆえ しょう

い いっさいしん

諸經・諸人に勝れたるが故に、「勝」と云うなり。一切心

ほうかい っ いっしん

ほけきよう しんじん

しんじんすなわ

に法界を尽くす。一心とは、法華經の信心なり。信心即ち

いちねんさんぜん うんぬん

一念三千なり云々。

いち に じ せそん とき せそん こと

一、「爾時世尊（その時、世尊は）」の事

おお い せそん しやかによらい せん

仰せに云わく、「世尊」とは、釈迦如来なり。詮ずると

ころ、世尊せそんとは、孝養こうようの人を云いうなり。その故ゆえは、不孝ふこうの人

をば世尊せそんとは云いわず。教主きようしゅ釈尊しやくそんこそ世尊せそんの本もとにては御坐おわ

しまし候そうらえ。父浄飯王ちちじようぼんおう・母摩耶夫人ははまやぶにんを成道じようどうせしめ給たまえり。

されば、今經こんきようの座ざには父母御坐ふぼおわしまさざれば、方便土ほうべんどへ

法華經ほけきようをば送おくらせ給たまいたり。「彼の土かどきに聞きくことを得えん」と

は、これなり。ただし、法華經ほけきようの心こころは「十方じつぽう仏土ぶつどちゆう中

唯一乘法ゆいいういちじようほう（十方じつぽうの仏土ぶつどの中なかには、ただ一乗いちじようの法ほうのみ有あり）」

なり。忉利天とうりてんには母摩耶夫人ははまやぶにん生しょうじ給たまえり。忉利天とうりてんに即そくした

る寂光土じやつこうどなり。方便土ほうべんどに即そくしたる寂光土じやつこうどなり。「四土しどは一念いちねん

みなじようじゃつこう

ほけきよう

せつしよ

にして皆常寂光なり」なれば、いずれも法華經の説処な

こくうえ　とき

せつほつけ

ほつけ

と

り。虚空会の時の「説法華（法華を説きたもう）」に、あに

とうりてん

じゃつこうど

せつほつけ

ほうべんど

忉利天もるべきや。寂光土の「説法華」に、あに方便土も

ほけきよう

せつしよ

どうもんしゅ

にんしゅ

るべきや。いずれも法華經の説処なれば、同聞衆の人数た

うんぬん

り云々。

いち　じようぼんおう

まやぶにん

じようぶつ

しようもん

こと

一、淨飯王・摩耶夫人の成仏の証文の事

おお　い

ほうべんぼん

い

がしぎどうじよう

かんじゅやく

仰せに云わく、方便品に云わく「我始坐道場　觀樹亦

きようぎよう

われ

はじ

どうじよう

ぎ

じゅ

かん

きようぎよう

經行（我は始め道場に坐し、樹を觀じまた經行す）」

もん

じゅりようほん

い

ねんがじつじようぶついらい

の文これなり。また寿量品に云わく「然我実成仏已来（し

われ じつ じょうぶつ

このかた もん

きょうしゅ

かるに、我は実に成仏してより已来」の文これなり。教主

しやくそん じょうどう とき じょうぼん まや とくどう

ほんじやくにもん

釈尊の成道の時、浄飯も摩耶も得道するなり。本迹二門

とくどう もん

うんぬん

もん にちれん こしん だいじ

の得道の文これなり云々。この文、日蓮が己心の大事なり。

がし

がじつ

もん よ よ

あん

「我始」と「我実」との文、能く能くこれを案ずべし。そ

ゆえ

にぜんきよう

こころ

ふ しかくべつ

だんどう

の故は、爾前経の心は父子各別の談道なり。しかるあいだ、

じょうぶつ

な

いま

きよう

とき

ふ し

てんしょう

さだ

ふ しいつたい

成仏これ無し。今の経の時、父子の天性を定め、父子一体

だん

ふ ぼ

じょうぶつ

すなわ

こ

じょうぶつ

こ

じょうぶつ

と談ぜり。父母の成仏は、即ち子の成仏なり。子の成仏

すなわ

ふ ぼ

じょうぶつ

しやくそん

が し ぎ どう じょう

とき

は、即ち父母の成仏なり。釈尊の「我始坐道場」の時、

じょうぼんおう

ま や ぶにん

どうじ

じょうどう

しやくそん

が じつ じょうぶつ

浄飯王・摩耶夫人も同時に成道なり。釈尊の「我実成仏」

とき じょうぼんおう ま やぶにんどうじ し ほんとも どうじ じょうどう
の時、浄飯王・摩耶夫人同時なり。始・本共に同時の成道
なり。

ほうもん

てんだい

でんぎようとう

のぞ

し

ひといちにん

この法門は、天台・伝教等を除いて、知る人一人もこ

あ

まつぼう

い

にちれんとう

たぐ

かた

ひ

れ有るべからず。末法に入つて日蓮等の類い、堅く秘すべ

ほうもん

たと

れんげ

はなみ

あいはな

き法門なり。譬えば、蓮華の華菓の相離れざるがごとくな

ほけきよう

ぎようじや

なんによ

せそん

り。しかれば、法華經の行者は男女ことごとく世尊にあら

やくおうほん

い

おいつさいしゅじようちゆう

やくいだいいち

いつさい

ずや。薬王品に云わく「於一切衆生中、亦為第一（一切

しゅじよう

なか

だいいち

もん

すなわ

せ

衆生の中において、またこれ第一なり」文。これ即ち世

そん

きようもん

ぜしんぶっし

まこと

ぶっし

尊の經文にあらずや。「是真仏子（これ真の仏子）」なれ

ほうおう みこ せそんたいいち
ば、法王の御子にして世尊第一にあらずや。

いち ほうべんぼん こと
一、「方便品」の事

みようほうれんげきよう ごじ
妙法蓮華經の五字とは、名・体・宗・用・教の五重

げんぎ しかん じつしよう しゃく じつしよう
玄義なり。されば、止觀に十章を釈せり。この十章は、

すなわ みようほうれんげきよう のうしゃく しゃくみよう みようげんぎ
即ち妙法蓮華經の能釈なり。それとは、釈名は名玄義

なり。体相・摂法の二つは体玄義なり。偏円の一つは教玄
なり。たいそう しょうほう ふた たいげんぎ へんえん ひと きようげん

義なり。方便・正觀・果報の三つは宗玄義なり。起教の
ぎ ほうべん しょうがん かほう みつ しゅうげんぎ ききよう

一つは用玄義なり。始めの大意の章と終わりの旨歸との二
ひと ゆうげんぎ はじ たいい しょう お しき ふた

つをばこれを除く。この意は、止觀一部の所詮は、大意と
のぞ こころ しかんいちぶ しょせん たいい

つをばこれを除く。この意は、止觀一部の所詮は、大意と

しき おき むみようそくみよう たいい ゆえ むみよう

旨歸とに納まれり。無明即明の大意なるが故なり。無明と

そくみよう ふんべつ しき いま みようほうれんげきよう ごじゆう

も即明とも分別せざるが旨歸なり。今、妙法蓮華經の五重

げんぎ しゆぎよう たてまつ ぼんのうそくぼだい しょうじそくねはん かいご

玄義を修行し奉れば、煩惱即菩提・生死即涅槃の開悟を

う たいい しき ほつけ しんじん

得るなり。大意と旨歸とは、法華の信心のことなるべし。

いしんとくにゆう しん い え ひこちぶん おの

「以信得入（信をもつて入ることを得たり）」「非己智分（己

ちぶん

が智分にあらず）」とは、これなり。

われ しゆじよう しきしん にほう みようほう にじ むし

我ら衆生の色心の二法は、妙法の二字なり。「無始の

しきしん もと りしょう みようきよう みようち かいかく

色心は、本よりこれ理性にして、妙境・妙智なり」と開覺

たいい い たい しきほう とく い しんぼう とく

するを、大意とは云うなり。大は色法の徳、意は心法の徳な

り。たい じ かたち くん いま にちれんとう たぐ大の字は形に訓ぜり。今、日蓮等の類い、

なんみようほうれんげきよう とな たてまつ なんによ きせんとう しきしん ほんぬ南無妙法蓮華經と唱え奉る男女・貴賤等の色心は、本有の

みようきよう みようち ふ ぼ か ば く にくしん ほか べつ さんじゆうにそう妙境・妙智なり。父母果縛の肉身の外に、別に三十二相

はちじつしゆこう そうごう な そくしんじようぶつ八十種好の相好これ無し。即身成仏これなり。しかるあい

たい いちじ ほうかい おさ ゆえ ほけきようだ、大の一字に法界をことごとく収むるが故に、法華經を

だいじよう い いっさい ぶつ ぼさつ しょうしゆ にん ちく じごくとう大乘と云うなり。一切の仏・菩薩・聖衆・人・畜・地獄等

しゆじよう ちえ ぐそく たも ゆえ ぶつ い だいじようの衆生の智慧を具足し給うが故に、仏意と云うなり。大乘

ぶつ い おな すなわ みようほうれんげきよう ぐとくも仏意も同じことなり。これ即ち妙法蓮華經の具徳なり。

くかい しゆじよう こころ ほとけ こころ いっさいきようされば、九界の衆生の意をもつて仏の意とす。一切經

こころ

ほけきよう

こころ

お いちぶつじよう ふんべつ せつ さん

の心をもつて法華經の意とす。「於一仏乗分別説三

いちぶつじよう

ふんべつ

さん と

（一仏乗において分別して三を説きたもう）とは、これ

なり。

ほけきよう

ぼう

たてまつ

さんぜ

しよぶつ

かかるめでたき法華經を謗じ奉ること、三世の諸仏

おんした

き

みようほうれんげきよう

ぐ

の御舌を切るにあらずや。しかるに、この妙法蓮華經の具

とく

ほとけ

ちえ

計

徳をば、仏の智慧にてもはかりがたく、いかにいわんや

ぼさつ

ちりき

およ

だいしよう

とうちゆう

菩薩の智力に及ぶべけんや。これによつて、大聖の塔中の

げ

そうでん

い

いつけ

ほんい

いちこん

ほん

偈の相伝に云わく「二家の本意はただ一言のみをもつて本

うんぬん

いちこん

じやくしようふに

いちこん

となす」云々。この「一言」とは、寂照不二の一言なり。

ほんまつくきようとう

いちごん

い

しんじつ

ぎ

あるいは「本末究竟等」の一言とも云うなり。真実の義に

なんみようほうれんげきよう

いちごん

ほん

ほんぷ

まつ

は南無妙法蓮華經の一言なり。「本」とは凡夫なり、「末」

ほとけ

くきよう

しょうぶついちによ

しょうぶついちによ

によ

とは仏なり。「究竟」とは、生仏一如なり。生仏一如の如

たい

なんみようほうれんげきよう

うんぬん

の体は、いわゆる南無妙法蓮華經これなり云々。

いち ぶつしよじようじゆ

だいいちけうなんげしほう

ゆいぶつよぶつ

ほとけ

じようじゆ

一、「仏所成就、第一希有難解之法。唯仏与仏（仏の成就

だいいちけうなんげ

ほう

ほとけ

ほとけ

したまえるところは、第一希有難解の法なり。ただ仏と仏

こと

とのみ」の事

おお

い

ぶつ

しゃくそん

おんこと

じようじゆ

仰せに云わく、「仏」とは、釈尊の御事なり。「成就」

ほけきよう

だいいち

にぜん

ふだいいち

たい

けう

とは、法華經なり。「第一」は爾前の不第一に對し、「希有」

は爾前の不希有にぜん ふけう たいに対し、「難解之法」は爾前の不難解なんげしほうに対し

たり。この「仏」と申すは、諸法実相ぶつ もうなれば、十界の衆生じつかい しよほうじつそうを

「仏」とは云うなり。十界の衆生の語言音声ぶつ い じつかい しゆじよう ごこんおんじようは、「成就」

にして法華經なり。三世の諸仏ほけきよう さんぜ しよぶつ しゆつせ ほんかい みようほうの出世の本懷の妙法にして、

優曇華の妙文うどんげ みようもんなれば、「第一希有だいいちけう」なり。九界の智慧の及ば

ざれば、「難解法」なり。「成就」とは、我ら衆生の煩惱なんげほう じようじゆ われ しゆじよう ぼんのうそく即

菩提・生死即涅槃ぼだい しようじそくねはんのことなり。權教の意は終に不成仏ごんきよう こころ つい ふじようぶつな

れば、成就にはあらず。迹門には二乗成仏じようじゆ しやくもん にじようじようぶつあらわ顕れたり。

これ即ち成就なり。これを「仏所成就」すなわ じようじゆ ぶつしよじようじゆ ととは説かれたり。

されば、「唯仏」ゆいぶつとは釈迦、しゃか「与仏」よぶつとは多宝たほうなり。

ゆげん

よぶつ

い

涌現なければ、「与仏」とは云いがたし。しかりといえども、

つい しゅつげん ゆえ よぶつ たほう

せん

終には出現あるべき故に、「与仏」を多宝というなり。詮ず

にちれんとう

たぐ

こころ

ゆいぶつ

しゃくそん

よぶつ

るところ、日蓮等の類いの心は、「唯仏」は釈尊、「与仏」

にちれんとう

たぐ

ゆえ

ゆいぶつ

ゆい

は日蓮等の類いのことなるべし。その故は、「唯仏」の「唯」

かさ

ひゆほん

ゆいがいちにん

われいちにん

と

を、重ねて譬喩品には「唯我一人（ただ我一人のみ）」と説

よぶつ

にじ

かさ

ほうべんぼん

まつ

いた

にやくぐ

けり。「与仏」の二字を、重ねて方便品の末に至つて「若遇

よぶつ

よぶつ

あ

と

しゃく

ふか

えんり

余仏（もし余仏に遇わば）」と説けり。釈には「深く円理を

さと

な

ほとけ

しゃく

すなわ

覚る。これを名づけて仏となす」と釈せり。これ即ち、

よぶつ

い

ほけきよう

ぎようじや

なんによ

ゆいが

「与仏」と云うは、法華經の行者の男女のことなり。「唯我

いちにん

しやくそん

くみ

ほとけ

にぶつ 寄

あ

一人」の釈尊に与したてまつる仏なり。この二仏より合つ

ないのうくじん

よ くじん

て、「乃能究尽（いまし能く究尽したまえり）」するところ

しよほうじつそう

ほつたい

じゆうによぜ

じっかい

の諸法実相の法体なり。されば、十如是というは、十界な

じっかいすなわ

じゆうによぜ

じゆうによぜ

すなわ

ほけきよう

いみよう

り。十界即ち十如是なり。十如是は、即ち法華經の異名な

うんぬん

り云々。

いち

じゆうによぜ

こと

一、十如是の事

おお

い

じゆうによぜ

ほけきよう

がんもく

いつさいきよう

仰せに云わく、この十如是は、法華經の眼目、一切經

そつよう

じゆうによぜ

かいかく

しよほう

の総要たり。されば、この十如是を開覚しぬれば、諸法に

めいごな

じつそう

ぜんじょうな

おいて迷悟無く、実相において染浄無し。これによつて

てんだいだいし

しかん じつしよう

じゅうによぜ

しやくしゆつ

天台大師は、止観の十章もこの十如是より釈出せり。し

じゅうによぜ す

ほうもん

な

かるあいだ、十如是に過ぎたる法門さらにもつてこれ無し。

かしようさず

い

じゅうだいしよう

まった

ここをもつて、和尚授けて云わく「十大章はこれ全く

じゅうによぜ

たいい

さと

とき

しようによぜ

こころ

十如是なり。もし大意を覚る時は、性如是の意をもつて、

しも

げんによ

ず

ふんべつ

じゅうによぜ

じゅうだいしよう

なら

下の玄如の図を分別すべし」。十如是を十大章に習うこと

しようによぜ

たいい

そうによぜ

しやくみよう

たいによぜ

たいそう

は、性如是は大意なり。相如是は釈名、体如是は体相、

りきによぜ

しようほう

さによぜ

へんえん

えんによぜ

ほうべん

いんによぜ

力如是は摂法、作如是は偏円、縁如是は方便、因如是は

しようがん

か

ほうによぜ

か

ほう

ほんまつくきようによぜ

しき

正観、果・報如是は果・報、本末究竟如是は旨帰なり。こ

なか ききよう しよう
の中に起教の章は、「化他・利物は果の上の化用なり」と云

うなり云々。
うんぬん

いち じしようむじようどう だいじようびようどうほう みずか むじようどう だいじようびようどう

一、「自証無上道 大乘平等法（自ら無上道・大乘平等

ほう しよう こと

の法を証す」の事

おお い まつぼうとうこん だいじようびようどう ほう しよう

仰せに云わく、末法当今において大乘平等の法を証

にちれんとう たぐ かぎ きようもん

せること、日蓮等の類いに限れり。されば、この経文は、

きようしゆ だいかくせそん ほけきよう ごくり しよう ばんばん しゆつせ たま

教主・大覚世尊、法華経の極理を証して、番々に出世し給

と せん じしよう

いて説きたもうなり。詮ずるところ、この「自証」という

さんじゆうじようどう とき さ ゆえ きようしゆしやくそん

は、三十成道の時を指すなり。その故は、教主釈尊は

じゅうくしゅつけ

さんじゅうじょうどう

じしやうむじやうどう

十九出家、三十成道なり。しかるあいだ、「自証無上道」

とう

等。

せん

ほん

こころ

じっかいかいじょう

むね

あ

詮ずるところ、この品の心は十界皆成の旨を明かせ

じしやう

じっかい

しよほうじつそう

いちぶつ

り。しかれば、「自証」というは、十界を諸法実相の一仏ぞ

と

じごく

がき

むじやう

だいじやう

と説かれたり。地獄も餓鬼も、ことごとく無上の大乗の

みようほう

しやうとく

じ

じっかい

さ

妙法を証得したるなり。「自」は十界を指したり。ほしい

しやう

ごんきやう

ふびやうどう

きやう

ままに証すということなり。権教は不平等の経なり、

ほけきやう

びやうどう

きやう

いま

にちれんとう

たぐ

しんじつ

じしやう

法華経は平等の経なり。今、日蓮等の類いは、真実、「自証

むじやうどう

だいじやう

びやうどうほう

ぎやうじや

無上道 大乘平等法」の行者なり。いわゆる、

なんみようほうれんげきよう　だいじようびようどうほう　こうせんるふ　とき　うんぬん
南無妙法蓮華經の大乗平等法の広宣流布の時なり云々。

いち　がし　ぎどうじよう　かんじゆやくきようぎよう　われ　はじ　どうじよう　ざ　じゆ
一、「我始坐道場　觀樹亦經行（我は始め道場に坐し、樹

かん　きようぎよう　こと
を觀じまた經行す」の事

おお　い　もん　きようしゆしやくそん　さんじゆうじようどう　とき
仰せに云わく、この文は教主釈尊、三十成道の時を

と　たま　かんじゆ　じゆ　じゆうにいんねん
説き給えり。「觀樹」の「樹」というは十二因縁のとなり。

せん　じゆうにいんねん　かん　きようぎよう　と　たま
詮ずるところ、十二因縁を觀じて經行すと説き給えり。

じゆうにいんねん　ほうかい　いみよう　ほけきよう　いみよう　ゆえ
十二因縁は法界の異名なり。また法華經の異名なり。その故

じゆもく　しようけか　すなわ　しようじゆういめつ　しそう
は、樹木は枝葉花菓あり。これ即ち生住異滅の四相なり。

だいかくせそん　じゆうにいんねん　るてん　かん　きようぎよう　たま　せん
大覺世尊、十二因縁の流轉を觀じ、經行し給えり。詮ず

まつぼうとうこん

いつさいしゆじよう

ほけきよう

ぼう

るてん

るところ、末法当今も、一切衆生の法華經を謗じて流轉す

かん

にほんこく

にちれんきようぎよう

なんみようほうれんげきよう

べきを觀じて、日本国を日蓮經行して南無妙法蓮華經と

ぐつう

ほつけ

ぎようじや

弘通すること、またまたかくのごとくなり。法華の行者は

どうじよう

ざ

ひと

うんぬん

ことごとく道場に坐したる人なり云々。

いち

こんがきむい

いまわれ

よろこ

おそな

こと

一、「今我喜無畏（今我は喜んで畏れ無し）」の事

おお

い

きようもん

ごんきよう

と

お

たま

仰せに云わく、この經文は權教を説き畢わらせ給い

ほけきよう

と

たも

とき

よろこ

畏

て法華經を説かせ給う時なれば、「喜んでおそれなし」と觀

たま

ゆえ

にぜん

あいだ

いつさいしゆじよう

おそ

たま

じ給えり。その故は、爾前の間は一切衆生を畏れ給えり。

ほけきよう

と

むな

おぼ

「もし法華經を説かずして、空しくやあらんずらん」と思し

めして、おそ ふか あ もん畏れ深く有りという文なり。さて、今は畏るべき

ことなく、じせつきた と おそ よろこ たま時節来つて説くあいだ、「畏れなし」と喜び給え

り。いま にちれんとう たぐ今、日蓮等の類いもかくのごとし。にちれん しょうねんさんじゅうに日蓮も生年三十二

までは畏れありき。おそ「もしや、この南無妙法蓮華経を弘めず

してあらんずらん」と畏れありき。おそ いま すなわ おそ な今は即ちこの畏れ無し。

すで まっぼう どうじ なんみようほうれんげきよう しちじ にほんこく ひろ既に、末法の当時、南無妙法蓮華経の七字を日本国に弘む

るあいだ畏れなし。おそ つい いちえんぶだい こうせん る ふ終には一閻浮提に広宣流布せんこと

いちじよう うんぬん一定なるべし云々。

いち がもんぜほうおん ぎもうかいいじよ われ ほうおん き ぎもう一、「我聞是法音 疑網皆已除（我はこの法音を聞いて、疑網

は皆すでに除こりぬ」の事 みな のぞ こと

仰せに云わく、「法音」とは、南無妙法蓮華經なり。「疑網」 い ほうおん なんみようほうれんげきよう ぎもう

とは、最後の品の無明を云うなり。この經を持ち奉れば、 さいごほん むみよう い きよう たも たてまつ

ことごとく除くと説かれたり。この文は、舍利弗が三重の のぞ と もん しやりほつ さんじゅう

無明、一時に俱尽することを領解せるなり。今、日本国の むみよう いちじ くじん りようげ いま にほんこく

一切衆生、法華經の法音を聞くといいども、いまだ能く信 いっさいしゅじよう ほけきよう ほうおん き よ しん

ぜず。あに疑網皆すでに除かんや。除かずんば、「入阿鼻獄 ぎもうみな のぞ のぞ にゅうあびごく

(阿鼻獄に入る)」は疑いなきなり。「疑」の字は、元品の あびごく い うたが ぎ じ がんぽん

無明のことなり。この疑いを断つを、信とは云うなり。釈 むみよう うたが た しん い しゃく

に云いわく「疑うたがいなきを信しんと曰いう」と云いえり。身子しんじはこの疑うたが

いなき故ゆえに、華光けこう仏ぶつと成なれり。

いま にちれんとう たぐ だいもく ほうおん しんじゆ ゆえ ぎもう

今、日蓮等の類いは、題目の法音を信受する故に、疑網

な によがとうむい わ ひと こと

さらに無し。「如我等無異（我がごとく等しくして異なるこ

しやくそん どうとう ほとけ

となし）」とて、釈尊と同等の仏にやすやすとならんこと

うたが ぎもう しきしん にほう あ わくしよう

疑ぎいなきなり。「疑網」というは、色心の二法に有る惑障

しんぼう もう しきほう あ きよう

なり。「疑」は心法にあり、「網」は色法に有り。この経を

たも たてまつ しん しきしん にほう ぼんのうとも のぞ

持ち奉り信ずれば、色心の二法の煩惱共にことごとく除

かい い じ しんじそんじや

くということなり。この「皆已」の「已」の字は、身子尊者、

こうかいさんけんいち

さ

い

いま りようげ もんだん

広開三顯一を指して「已」とは云うなり。今は領解の文段な

しんじ みようほう じつそう り ちようもん

しんえだいかんき こころ

り。身子、妙法の実相の理を聴聞して、「心懷大歡喜（心

だいかんき いだ

せん

しやりほつそんじやほど

に大歡喜を懷く）せしなり。詮ずるところ、舍利弗尊者程

ちしや ほけきよう きた けこうぶつ

ぎもう だんじよ

の智者、法華經へ来つて華光仏となり、疑網を断除せり。

まつぼうとうじ ごんにん ほうぼう ひとびと

きよう

いかにいわんや、末法当時の権人、謗法の人々、この經に

あ じようぶつ うんぬん

値わずんば、成仏あらんや云々。

いち いほんがんこ せつさんじようほう ほんがん ゆえ

さんじよう ほう

一、「以本願故、説三乘法（本願をもつての故に、三乗の法

と こと

を説く）の事

おお い きようもん しんじそんじや

じようどう くに

仰せに云わく、この經文は、身子尊者は、成道の国・

りくせかい さんじよう ほう あくせ

離垢世界にて、三乗の法は悪世にはあらず、しかりといえ

しんじほんがん ゆえ と い

ほんがん

しんじ

ども身子本願の故に説くと云えり。その本願というは、身子、

ぼさつ ぎよう た こつげん ばらもん まなこ こ と

菩薩の行を立てしに、乞眼の婆羅門に眼を乞い取られて、

とき ぼさつ ぎよう たいてん

ぼさつ ぎよう ひやつこう た

その時、菩薩の行を退転したり。この菩薩の行を百劫立

ろくじつこう いましじつこう 足

とき こつげん

てけるに、六十劫なして今四十劫たらざりき。この時、乞眼

まなこ 抉 取

とき ぼさつ ぎよう たい

に眼をくじりとられて、その時、菩薩の行を退して、

じようぶつ ひ さんじよう ほう ひら

ねが がん た

「成仏する日に、三乗の法を開かんと願う」の願を立て

じようほん じようど ぜん ひら もち さんじよう

たるなり。「上品の浄土は漸を開くを須いず」なれば、三乗

ほう と いほんがん

の法を説くことはさらにもつてあるまじけれども、「以本願

こ ゆえ さんじよう ほう と ぎよう ぜんたらぶつ
故」の故にて、三乗の法を説くなり。この行は禅多羅仏の

みもと た しんじ ろくじゅうたい

所にして立つるなり。このことは「身子が六住退」とて、

おお きた じゅうじゅう ぎせい あ こころえがた

大いなる沙汰なり。重々の義勢これ有り。たやすく心得難

じぜん おそ ほつ こころ

きことなり。あるいは「地前を怖れしめんと欲す」の意、

ごんじや たい うんぬん せん ろくじゅうたい

あるいは「権者の退」云々。詮ずるところ、「六住退」と

ろつこん ろつきよう ぼさつ ぎよう と

いは、六根・六境に菩薩の行を取られたりということ

なり。

おも まつぼうとうこん ほけきよう しゆぎよう

これをもつてこれを思うに、末法当今、法華經を修行

かなら しんじ たいてん せん

せんには、必ず身子が退転のごとくなるべし。詮ずるところ

しんじ まなこ と

ぼさつ ちえ ぎよう と

ろ、身子が眼を取らるるは、菩薩の智慧の行を取らるる

いま にちれんとう たぐ なんみようほうれんげきよう まなこ たも たてまつ

なり。今、日蓮等の類い、南無妙法蓮華經の眼を持ち奉

ほうぼう しょうにん しょうげ まなこ 抉 と

るに、謗法の諸人に障礙せらるる、あに眼をくじり取らる

せん か こつげん ばらもん まなこ こ

るにあらずや。詮ずるところ、彼の乞眼の婆羅門、眼を乞

しんじ ぼさつ ぎよう たいてん

いしは、身子が菩薩の行を退転せしめんがために、これを

こ 踏 躪 す まった ぼさつ くよう かた もと

乞いてふみにじりて捨てたり。全く菩薩の供養の方を本と

まなこ こ たいてん

して眼をば乞わざりしなり。ただ退転せしめんがためなり。

しんじ いちねん ぼさつ ぎよう た あ

身子は、一念に菩薩の行を立てて、かかることに値えり。

きようこう ぼさつ ぎよう た にじよう ぎよう た

「向後は菩薩の行をば立つべからず。二乗の行を立つべ

し」と云つて後悔せし、その故に、成仏の日、三乗の法を

説くなり。詮ずるところ、乞眼の婆羅門の責めを堪えざる

が故なり。法華經の行者、三類の強敵を堪忍して、妙法の

信心を捨つべからざるなり。信心をもつて眼とせり云々。

一、「有大長者（大長者有り）」の事

仰せに云わく、この長者において、天台大師、三つの

長者を釈し給えり。一には世間の長者、二には出世の

長者、三には觀心の長者これなり。この中に出世・觀心の

長者をもつて、この品の長者とせり。長者とは釈迦如来

のことなり。かんじん ちようじゃ とき いっさいしゅじよう 観心の長者の時は一切衆生なり。せん 詮ずると

ころ、法華經の行者は男女共に長者なり。文句の五に委しほけきよう ぎようじゃ なんによとも ちようじゃ もんぐ ご くわ

く釈せり。しやく まつぽうとうこん ちようじゃ もう にちれんとう たぐ 末法当今の長者と申すは、日蓮等の類い、

なんみようほうれんげきよう とな たてまつ もの 南無妙法蓮華經と唱え奉る者なり。

されば、三つの長者を釈する時、みつ ちようじゃ しやく とき もんぐ ご い 文句の五に云わく

「二に位号を標するに、三つとなす。に いごう ひよう みつ いち せけん ちようじゃ 一には世間の長者、

二には出世の長者、三には観心の長者なり。に しゅつせ ちようじゃ さん かんじん ちようじゃ よ じつとく そな 世に十徳を備

う。いち しょうたつと に くらいたか さん おお と 一には姓貴し。二には位高し。三には大いに富む。

四には威猛し。し いたけ ご ちふか ろく としお しち ぎようきよ 五には智深し。六には年耆ゆ。七には行淨

し。八には礼備う。九には上歎ず。十には下歸す」云々。
はち らいそな く かみたん じゅう しもき うんぬん

また云わく「出世の長者は、仏は三世の真如實際の中
い しゅつせ ちようじゃ ほとけ さんぜ しんによじつさい なか

より生ず。功成り、道著れて、十号極まり無し。法財・
しょう くな どうあらわ じゅうごうきわ な ほうざい

万徳、ことごとく皆つぶさに満ぜり。十力雄猛にして、魔
まんとく みな まん じゅうりきゆうみよう ま

を降し、外を制す。一心の三智、通達せずということなし。
くだ げ せい いっしん さんち つうだつ

早く正覚を成じて久遠なること、かくのごとし。三業は智
はや しょうがく じよう くおん さんごう ち

に随つて、運動して失無し。仏の威儀を具えて、心の
したが うんどう とがな ほとけ いぎ そな こころ おお

いなること海のごとし。十方の種覚、共に称誉するところ
うみ じつぼう しゅかく とも しょうよ

なり。七種の方便しかも来つて依止す。これを、出世の仏・
しちしゆ ほうべん きた えじ しゅつせ ほとけ

だいちようじゃ な さん かんじん かんじん ち じつそう い

大長者と名づく。三に観心とは、観心の智は実相より出ず。

しょう ぶつけ しゅしょうしんしょう さんわくお

生じて仏家にあり。種性真正なり。三惑起こらず。いま

しん おこ によらい ころも き じやくめつにん

だ真を発さずといえども、これ如来の衣を着れば寂滅忍

しょう さんたい いっさい くどく ごんぞう しょうがん え あいけん

と称す。三諦に一切の功德を含蔵す。正観の慧もて愛見を

ごうぶく ちゅうどうなら て ごんじつ あき ひさ

降伏す。中道双べ照らして、権実ならびに明らかなり。久

ぜんこん っ よ かん しゅ かん しちほうべん

しく善根を積んで、能くこの観を修す。この観は、七方便の

かみ い かん しんしょう かん じようじよう な

上に出でたり。この観は心性を観ずれば上定と名づく。

すなわ さんごうかな えん へ きよう たい いぎとがな よ

則ち三業過無し。縁に歴て境に対するに威儀失無し。能く

かん じんしんげ そう しょうぶつ みなかんぎ

かくのごとく観ぜば、これ深信解の相なり。諸仏は皆歡喜し

じほう もの たんみ

てんりゅう

しぶ

くぎよう

くよう

て持法の者を歎美したもう。天竜・四部は恭敬・供養す。

しも もん い

ぶつしじゅうぜじ

そくぜぶつじゅうよう

きようぎようきゅうざが

下の文に云わく『仏子住是地

即是仏受用

経行及坐臥

ぶつし

じ じゅう

すなわ

ほとけ

じゅうよう

（仏子この地に住せば、即ちこれをば仏は受用したもう。

きようぎよう

ざが

すで

ひと しょう

経行しおよび坐臥したまわん』。既にこの人を称して

ほとけ

かんじん

ちようじや

な

仏となす。あに観心の長者と名づけざらんや」。

しゃく

ふんみよう

かんじん

ちようじや

じつとく

ぐそく

しゃく

この釈、分明に観心の長者に十徳を具足すと釈せ

いんしょう

もん

ふんべつくだくほん

そくぜぶつじゅうよう

り。いわゆる引証の文に、分別功德品の「即是仏受用」の

もん ひ

きようもん

ぶつしじゅうしじ

し

じ

文を引けり。経文には「仏子住此地」とあり。「此」の字を

ぜ じ

きようぎようにやくざが

にやく

ぎゅう

「是」の字にうつせり。「経行若坐臥」の「若」を「及」

の字にかえたり。また法師品の文を引けり。詮ずるところ、

ぶつし

ほけきよう

ぎようじゃ

しじ

じっそう

だいち

「仏子」とは法華經の行者なり。「此地」とは実相の大地な

きようぎようにやくぎが

ほけきよう

ぎようじゃ

しいぎ

しよさ

り。「經行若坐臥」とは、法華經の行者の四威儀の所作

ふま

ほとけ

ふま

われしゆじよう

ふ

の振る舞い、ことごとく仏の振る舞いなり。我ら衆生の振

まとうたい

ほとけ

振舞

とうたい

る舞いの当体、仏のふるまいなり。この当体のふるまいこ

ちようじゃ

かんじん

ちようじゃ

われ

ほんぷ

そ長者なれ。よつて、觀心の長者は我ら凡夫なり。しか

まつぼうとうこん

ほけきよう

ぎようじゃ

ほか

かんじん

ちようじゃな

るに、末法当今の法華經の行者より外に觀心の長者無き

いまにちれんとう

たぐ

なんみようほうれんげきよう

とな

たてまつ

もの

なり。今、日蓮等の類い、南無妙法蓮華經と唱え奉る者、

むじようほうじゆ

ふぐじとく

むじよう

ほうじゆ

もと

おの

「無上宝聚 不求自得（無上の宝聚は、求めざるに自ずか

え

ちようじゃ

きしようしにんいぶつ

すで

ら得たり」の長者にあらずや。「既称此人為仏（既にこの

ひと しょう

ほとけ

ろくじ

こころ

とど

あん

人を称して仏となす」の六字に心を留めて案ずべきな

うんぬん

り云々。

いち たうでんたく

おお でんたくあ

こと

一、「多有田宅（多く田宅有り）」の事

おお

い

でんたく

ちようじゃ

ざいほう

せん

仰せに云わく、「田宅」とは、長者の財宝なり。詮ず

でん

いのち

たく

み

もんぐ

るところ、「田」というは命なり、「宅」とは身なり。文句の

ご でんたく

しんみよう しゃく

でん

こめ

こめ いのち

五に、「田宅」をば身命と釈せり。「田」は米なり。米は命

継

たく

み

宿

いえ

しんみよう

ふた

をつぐ。「宅」は身をやどす。これは家なり。身命の二つ

あんのん

ほか

ざいほう

な

ほうもん

やく

を安穩にするより外に財宝は無きなり。法門に約すれば、

でん

じよう

たく

え

じよう

でんじ

「田」は定、「宅」は慧なり。よつて、定は田地のごとし。

え ばんぼう

われ

いっしん

でんじ

しよほう

ばんぼう

お

慧は万法のごとし。我らが一心の田地より諸法の万法は起

ほつけいちぶ

ほうすん

し

しゃく

はちねん

これり。「法華一部、方寸もて知るべし」と釈して、八年の

ほけきよう

いっしん

さんぜん

ひら

せん

でん

法華経も一心が三千と開きたるなり。詮ずるところ、「田」

じよう

みよう

とく

たく

え

とく

ほう

とく

は定なれば妙の徳、「宅」は慧の徳なれば法の徳。また

ほんじやくりようもん

しかん

にほう

きようしゆしゃくそん

ほんじやくりようもん

本迹両門なり、止観の二法なり。教主釈尊、本迹両門

でんたく

いっさいしゆじよう

たす

たま

の「田宅」をもつて一切衆生を助け給えり。

でんたく

われ

しゆじよう

しきしん

にほう

ほけきよう

あ

「田宅」は我ら衆生の色心の二法なり。法華経に値い

たてまつ

なんみようほうれんげきよう

とな

たてまつ

とき

ぼんのうそくぼだい

しやうじ

奉つて南無妙法蓮華経と唱え奉る時、煩惱即菩提・生死

そくねはん たいだつ

たうでんたく

ちようじや

即涅槃と体達するなり。あに「多有田宅」の長者にあらず

たう

こころ

しんぼう

ぐそく

しんじゆ

しきほう

や。「多有」という心は、心法に具足する心数なり。色法に

ぐそく

しよさ

たうでんたく

もん

いちねんさんぜん

具足する所作なり。しかれば、「多有田宅」の文は、一念三千

ほうもん

ゆえ

いちねん

じよう

さんぜん

え

すで

の法門なり。その故は、一念は定なり、三千は慧なり。既

しやく

い

でんたく

べつぴ

でん

よ

いのち

やしな

に釈に云わく『田宅』は別譬なり。『田』は能く命を養

ぜんじよう

はんにや

たす

たと

たく

み

す

う。禅定の般若を資くるに譬う。『宅』は身を栖ますべし。

じつきよう

ち

しよたく

たと

うんぬん

しやく

ふんみよう

実境の智の所託となるに譬う」云々。この釈、分明なり。

でんたく

しんみよう

しんみよう

すなわ

なんみようほうれんげきよう

「田宅」は身命なり。身命は即ち南無妙法蓮華経なり。

だいもく

たも

たてまつ

もの

たうでんたく

ちようじや

この題目を持ち奉る者は、あに「多有田宅」の長者にあ

らずや。いま まつぼう い今、末法に入つて、日蓮等の類い、にちれんとう たぐ たうでんたく「多有田宅」の

ほんしゅ

によせつしゆぎよう

せつ

しゆぎよう

ぎようじや

本主として「如説修行（説のごとく修行す）」の行者な

うんぬん

り云々。

いち

とういちだいしや

とういち

だいしや

こと

一、「等一大車（等一大車）」の事

おお

い

だいしや

じきしどうじよう

ただ

仰せに云わく、この「大車」とは、「直至道場（直ち

どうじよう

いた

だいびやくごしや

そしつによふう

はや

に道場に至る）」の大白牛車にして、「其疾如風（その疾き

かぜ

せん

なんみようほうれんげきよう

こと風のごとし）」なり。詮ずるところ、南無妙法蓮華經を、

とういちだいしや

い

とう

しよほうじつそう

「等一大車」と云うなり。「等」というは、「諸法実相」な

いち

ゆい いういちじようほう

いちじよう

ほう

あ

り。「二」とは、「唯有一乘法（ただ一乗の法のみ有り）」

なり。だい「大」とは、だいじよう大乘なり。しや「車」とは、いちねんさんぜん一念三千なり。

よつて、しやく釈には「等」の字を「子等し」「車等し」と釈せ

り。こひと「子等し」の「等」と「如我等無異（我がごとく等しく

して異なることなし）」の「等」とは同じなり。「車等し」

の「等」は、びようどうだいえ「平等大慧」の「等」なり。今、いま日蓮等の類い、

なんみようほうれんげきよう南無妙法蓮華經と唱え奉る者は、とな男女・貴賤共に「無上

宝聚 不求自得（無上の宝聚は、ふぐじとく求めざるに自ずから得た

り）」の金言を持つ者なり。きんげん智者・愚者をきらわず、ともに

即身成仏なり云々。そくしんじようぶつ

疏の五に云わく「二には等しき子、二には等しき車な

こひと

ゆえ

すなわ

こころひと

いつさいしゆじようひと

り。子等しきをもつての故に、則ち心等し。一切衆生等

ぶつしようあ

たと

ぶつしようおな

ゆえ

ひと

こ

しく仏性有るに譬う。仏性同じきが故に等しくこれ子な

だいに

しゃひと

ほうひと

ゆえ

ぶつぼう

り。第二に『車等し』とは、法等しきをもつての故に、仏法

いつさいほう

みなまかえん

たと

まかえん

にあらざることなし。一切法は皆摩訶衍なるに譬う。摩訶衍

おな

ゆえ

ひと

だいしゃ

かくし

おのおの

同じきが故に、等しくこれ大車なり。しかして『各賜（各

たま

い

おのおの

ほんじゆう

したい

ろくど

むりよう

しよほう

賜う）』と言うは、各、本習の四諦・六度・無量の諸法に

したが

おのおのくじゆう

しんじつ

かいじ

くじゆうおな

随う。各旧習において真実を開示す。旧習同じからず。

ゆえ

おのおの

い

みな

まかえん

ゆえ

だいしゃ

い

故に『各』と言う。皆、摩訶衍なり。故に『大車』と言う」

うんぬん

云々。

いち ごしやこうこう

くるま こうこう

こと

一、「其車高広（その車は高広なり）」の事

おお い

しや

なんみようほうれんげきよう

すなわ

仰せに云わく、この「車」は、南無妙法蓮華経なり。即

われ しゅじよう

ほつけいちぶ そうたい

こうこう

ち我ら衆生の体なり。法華一部の総体なり。「高広」とは

ぶつちけん

しや ほうべんぼん とき

しよぶつちえ

仏知見なり。されば、この車を方便品の時は「諸仏智慧」

と

ちえ

じんじんむりよう

しようたん

たん ことば

と説けり。その智慧を「甚深無量」と称歎せり。歎の言に

じんじんむりよう

ごしや

と

こうこう

は「甚深無量」とほめたり。ここには「其車」と説いて「高広」

もんぐ

ご

ごしやこうこう

とほめたり。されば、文句の五に云わく『其車高広』より

しも

によらい

ちけん

じんのん

たと

よこ

ほうかい

へんさい

下は、如来の知見の深遠なることに譬う。横に法界の辺際に

あまね たて さんたい げんてい てつ ゆえ こうこう い
周く、豎に三諦の源底に徹す。故に『高広』と言うなり。

せん
詮ずるところ、この「如来」とは一切衆生のことなり。
いっさいしゅじょう

すで しよほうじつそう ほとけ ゆえ ちけん しきしん にほう

既に諸法実相の仏なるが故なり。「知見」とは、色心の二法

なり。「知」は心法、「見」は色法なり。色心二法を「高広」
ち しんぽう けん しきほう しきしん にほう

と云えり。「高広」即ち本迹二門なり。これ即ち
い こうこう すなわ ほんじやくにもん すなわ

なんみようほうれんげきよう うんぬん
南無妙法蓮華経なり云々。

いち ぜく こたく ぞくういちにん く ふ いえ いちにん ぞく
一、「是朽故宅 属于一人（この朽ち故りたる宅は、一人に属

す）」の事
こと

仰せに云わく、この文をば、文句の五に云わく「失火の
おほ い もん もんぐ ご い しっか

よし あ 由を明かす。この「宅」とは、さんがい かたく三界の火宅なり。「火」と云

うは、煩惱の火なり。この「火」と「宅」とをば「属于一人」
ぼんのう か

とて、釈迦一仏の御利益なり。弥陀・薬師・大日等の諸仏の
しやかいちぶつ ごりやく みだ やくし だいにちとう しょぶつ

救護にあらず、教主釈尊一仏の御化導なり。「唯我一人
くご きようしゆしやくそんいちぶつ ごけどう ゆいがいちにん

能為救護（ただ我一人のみ、能く救護をなす）」とは、これ
のういくご われいちにん よ くご

なり。この「属于一人」の文を、重ねて五の卷の提婆品に説
ぞくういちにん もん かさ ご まき だいばほん と

いて云わく「観三千大千世界、乃至無有如芥子許、非是菩薩
い かんさんぜんだいせんせかい ないしむうによけしこ ひぜぼさつ

捨身命処。為衆生故（三千大千世界を觀るに、乃至芥子の
しやしんみようしよ いしゆじようこ さんぜんだいせんせかい み ないしけし

ごときばかりも、これ菩薩の身命を捨てたもうところにあ
ぼさつ しんみよう す

しゅじょう

ゆえ

らざることあることなし。衆生のための故なり」。

みようらくだいし

ぞくういちにん

きようもん しやく

とき き

妙楽大師、この「属于一人」の経文を釈する時、記

ご い

ちようじゃ

き

いつしきいつこう

いつしきみな

の五に云わく「ことごとく長者に帰す。一色一香、一切皆

はん

すで

ちようじゃ

き

しやく

しかなり」と判ぜり。既に「ことごとく長者に帰す」と釈

ほうかい

あ

いつしきしゅじょう

う

くのう

しやくそん

して、法界に有りとある一切衆生の受くる苦悩をば、釈尊

いちにん

ちようじゃ

き

しやく

いつしきいつこう

いつしきみな

一人の長者に帰すと釈せり。「一色一香、一切皆しかなり」

ほうかい

せんそうばんぼく

ひ けらくよう

てい

みなむじよう

とは、法界の千草万木・飛花落葉の体たらく、これ皆無常

せんめつ

かたち

み

ぶつどう

き

ぞくういちにん

りやく

遷滅の質と見て仏道に帰するも、「属于一人」の利益なり。

りやく

ほんげん

なんみようほうれんげきよう

ないしろう

ひ

い

この利益の本源は南無妙法蓮華経の内証に引き入れしめ

んがためなり。

詮せんずるところ、末法まつぽうに入いつて「属ぞく于一う人」の利益りやくは、日蓮にちれん

が身みに当あたりたり。日本国にほんこくの一切衆生いつさいしゆじようの受くる苦惱くのおうは、こ

とごとく日蓮一人にちれんいちにんが「属ぞく于一う人」なり。教主きようしゆしやくそん釈尊しやくそんは「唯我ゆいが

一人いちにん能のう為いく救護ご」、日蓮一人にちれんいちにん、能のう為いく救護ごなり云々。うんぬん

文句もんぐの五ごに云いわく『是ぜ朽故宅こたく 属ぞく于一う人』より下、第二しも だいに

に一偈いちげ有あつて、失火しつかの由よしを明あかす。三界さんがいはこれ仏ほとけの化応けおうの

処ところなり。発心ほつしんしてより已来このかた、度脱どだつせんと誓願せいがんす。故ゆえに『属ぞく于

一人いちにん』と云いう。この釈しやくに「発心ほつしんしてより已来このかた、度脱どだつせん

と誓願す」の文、あに日蓮が身にあらずや云々。
せいがん もん にちれん み うんぬん

一、「諸鬼神等 揚声大叫（諸の鬼神等は、声を揚げて大
いち しよきしんとう ようしようだいきよう もろもろ きしんとう こえ あ おお

いに叫ぶ）」の事
さけ こと

仰せに云わく、「諸鬼神等」というは、親類・部類等を、
おお い しよきしんとう しんるい ぶるいとう

「鬼神」と云うなり。我ら衆生、死したる時、妻子眷属あ
きじん い われ しゆじよう し とき さいしけんぞく

つまりて悲歎するを「揚声大叫」とは云うなり。文句の五
ひたん よくじようだいきよう い もんぐ ご

に云わく「『諸鬼神等』より下、第四に一行半は、焼かる
い しよきしんとう しも だいし いちぎようはん や

る相を明かす。あるいは云わく、親属を『鬼神』となし、哭泣
そう あ い しんぞく きじん こつきゆう

を『揚声』となす」。
ようじよう

いち じようしほうじよう じきしどうじよう ほうじよう じよう

一、「乗此宝乗 直至道場（この宝乗に乗じて、直ちに

どうじよう いた こと

道場に至る）」の事

おお い きようもん われ しゅじよう ぼんのうそくぼだい

仰せに云わく、この経文は我ら衆生の煩惱即菩提・

しょうじそくねはん あ ゆえ もんぐ ご い

生死即涅槃を明かせり。その故は、文句の五に云わく「こ

いんか ゆえ じきし い しやく こころ

の因易わることなきが故に、『直至』と云う。この釈の心

にぜん こころ ぼんのう す しょうじ いと べつ ぼだい ねはん

は、爾前の心は煩惱を捨てて生死を厭いて別に菩提・涅槃

もと ほけきよう こころ ぼんのうそくぼだい しょうじそくねはん い

を求めたり、法華經の意は煩惱即菩提・生死即涅槃と云え

じき そく おな せん にちれんとう

り。「直」と「即」とは同じことなり。詮ずるところ、日蓮等

たぐ なんみようほうれんげきよう とな たてまつ もの じゅうしよ すなわ

の類い、南無妙法蓮華經と唱え奉る者の住处は即ち

じやつ(じ)うど

ま(ま)ろ

ほう(ほう)じよう

じよう

寂光土なりと心得べきなり。しかれば、この宝乗に乗じ

みようかくご(ご)つか

くらい

いた

じきしどう(どう)じよう

い

てたちまちに妙覚極果の位に至るを、「直至道場」とは云

じきし

もん

ま(ま)ろ

しじゅう(じゅう)にい

きわ

うなり。「直至」という文の意は、四十二位をここにて極め

じき

いち(いち)じ

じごく(ごく)そく(そく)じやつ(じやつ)こう(こう)

がき(き)そく(そく)じやつ(じやつ)こう(こう)ど

たり。この「直」の一字は、地獄即寂光・餓鬼即寂光土な

ほけき(けき)よう

ぎよう(ぎよう)じや

じゅう(じゅう)しよ

さん(さん)ごく(ごく)こう(こう)や

じきし

り。法華經の行者の住処は、山谷曠野なりとも、「直至

どう(どう)じよう

どう(どう)じよう

くき(くき)よう

じやつ(じやつ)こう

道場」なり。「道場」とは、究竟の寂光なり。

じよう(じよう)しほう(ほう)じよう

かみ

じよう

ほつけ

ぎよう(ぎよう)じや

よつて、「乗此宝乗」の上の「乗」は法華の行者、

ほん

ま(ま)ろ

ちゅう(ちゅう)こん

しだい(だい)しやう(しやう)もん

そう

いっさい

この品の意にては中根の四大声聞なり。総じては一切

しゅ(しゅ)じよう

いま

まつ(まつ)ぼう

い

にち(にち)れん(れん)とう

たぐ

衆生のことなり。今、末法に入つては、日蓮等の類いなり。

ほうじよう

じよう

じ

だいびやくごしや

みようほうれんげきよう

「宝乗」の「乗」の字は、大白牛車の妙法蓮華経なり。

かみ

じよう

のうじよう

しも

じよう

しよじよう

しかれば、上の「乗」は能乗、下の「乗」は所乗なり。

ほうじよう

れんげ

しやか

たほうとう

しよぶつ

ほうじよう

「宝乗」は蓮華なり。釈迦・多宝等の諸仏も、この「宝乗」

じよう

たま

だいばほん

かさ

と

とき

にやくざいぶつぜん

に乗じ給えり。これを提婆品に重ねて説く時、「若在仏前、

れんげけししよう

ぶつぜん

あ

れんげ

けししよう

い

蓮華化生（もし仏前に在らば、蓮華に化生せん」と云えり。

しやか

たほう

にぶつ

われ

こしん

こしん

ほけきよう

釈迦・多宝の二仏は、我らが己心なり。この己心の法華経に

あ

たてまつ

じようぶつ

あらわ

しやか

たほう

にぶつ

値い奉って成仏するを顕さんとして、釈迦・多宝の二仏

びようぎ

じようしほうじよう

じきしどうじよう

あらわ

たま

並座して、「乗此宝乗 直至道場」を顕し給えり。

じよう

くるま

くるま

れんげ

れんげ

この「乗」とは車なり。車は蓮華なり。この蓮華の

うえ みようほう われ しょうじ にほう にぶつ じきし し

上の妙法は、我らが生死の二法、二仏なり。「直至」の「至」

は、ここよりかしこへいたるの「至」にはあらず。住処即

じやつこう 至 し ほうじよう ほう

寂光というを、「至」とは云うなり。この「宝乗」の「宝」

しつぽう だいしゃ しつぽうすなわ ずじよう しちけつ しちけつすなわ まつぽう

は、七宝の大車なり。七宝即ち頭上の七穴、七穴即ち末法

ようほう なんみようほうれんげきよう だいもく ごじ われ

の要法・南無妙法蓮華經これなり。この題目の五字、我ら

しゅじよう さんず かわ ふね ぐれんじごく

衆生のためには、三途の河にては船となり、紅蓮地獄にて

さむ 除 しょうねつじごく りようふう しで やま

は寒さをのぞき、焦熱地獄にては涼風となり、死出の山に

れんげ かつ とき みず う とき じき

ては蓮華となり、渴せる時は水となり、飢えたる時は食と

はだか とき ころも め こ けんぞく

なり、裸なる時は衣となり、妻となり、子となり、眷属と

なり、家となり、無窮の応用を施して一切衆生を利益し給

い え む ぐ おうよう ほどこ

い っ さい し ゅ じ ょ う り や く た も

う。「直至道場」とは、これなり。よつて、この身取りも直

じ き し どう じ ょ う

じ き し どう じ ょ う

い

じ き

さず寂光土に居するを、「直至道場」とは云うなり。「直」

じ こころ と じ

あ ん

う ん ぬ ん

の字、心を留めてこれを案ずべし云々。

い ち に や く に ん ふ し ん

き ば う し き ょ う

そ く だ ん い っ さい

せ け ん ぶ っ し ゅ

ひ と し ん

一、「若人不信 毀謗此經 則断一切 世間仏種（もし人信

き ょう

き ば う

す な わ

い っ さい せ け ん

ぶ っ し ゅ

だ ん

ぜずして、この経を毀謗せば、則ち一切世間の仏種を断ぜ

こ と

ん」の事

お お

い

き ょう も ん

こ こ ろ

し ょ う ぜ ん

じ ょ う ぶ つ

し ん

仰せに云わく、この経文の意は、小善の成仏を信ぜ

い っ さい せ け ん

ぶ っ し ゅ

だ ん

も ん ぐ

ご

ずんば、一切世間の仏種を断ずということなり。文句の五に

い こんきよう しようぜん じようぶつ あ えんいん と

云わく「今経は小善の成仏を明かす。これは縁因を取つ

ぶつしゆ しようぜん じようぶつ しん すなわ いっさい

て仏種となす。もし小善の成仏を信ぜずんば、即ち一切

せけん ぶつしゆ だん もん にぜんきよう こころ しようぜん じようぶつ

世間の仏種を断ずるなり」文。爾前経の心は、小善の成仏

あ ほけきよう こころ いちげ いっこう しようぜん

を明かさざるなり。法華経の意は、一華・一香の小善も

ほけきよう き だいぜん ほうかい じゆうまん だいぜん

法華経に帰すれば大善となる。たとい法界に充滿せる大善

きよう あ ぜんこん たと

なりとも、この経に値わすんば善根とはならず。譬えば、

しよが みず たいかい い しお あじ もと

諸河の水、大海に入りぬれば鹹の味となる。入らざれば本の

みず ほうかい ぜんこん ほけきよう きにゆう ぜんこん

水なり。法界の善根も、法華経へ帰入せざれば善根とはな

らざるなり。

されば、釈しやくに云いわく『断だん一切いつさい仏種ぶつしゆ（一切だんの仏種ぶつしゆを断だんず）』

じようみよう

ぼんのう

によらい

たね

とは、浄名じようみょうには煩惱ぼんのうをもつて如来にょらいの種たねとなす。これは

きようかいしろう

と

しやく

こころ

じようみようきよう

こころ

境界性きようかいしろうを取るなり」。この釈しやくの意こころは、浄名經じようみょうきようの意こころな

われ

しゆじよう

いちにちいちや

な

ざいごう

はちおくしせん

らば、我われら衆生しゆじようの一日一夜いちにちいちやに作なすところの罪業ざいごう、八億四千はちおくしせん

ねんりよ

お

よきよう

こころ

みなさんず

ごういん

と

の念慮ねんりよを起おこす。余經よきようの意こころは、皆三途みなさんずの業因ごういんと説とくなり。

ほけきよう

こころ

ごういんすなわ

ほとけ

あ

法華經ほけきようの意こころは、この業因ごういん即すなわち仏ほとけぞと明あかせり。されば、

ぼんのう

によらい

しゆし

い

ぎ

「煩惱ぼんのうをもつて如来にょらいの種子しゆしとす」と云いうは、この義ぎなり。

じようみようきよう

もん

まさ

もん

にぜん

あ

ぎ

ほつけ

この浄名經じようみょうきようの文もんは、正まさしく「文もんは爾前にぜんに在あるも、義ぎは法華ほつけ

あ

こころ

きようかいしろう

まつししやく

に在あり」の意こころなり。この「境界性きようかいしろう」というは、末師まつし釈しやくす

とき

よ

ぼんのう

しよう

きようかいしよう

な

はん

る時、「能く煩惱を生ずるを、『境界性』と名づく」と判

われ しゆじよう

げんにとう

ろっこん

もうしゆう

お

ぜり。我ら衆生の眼耳等の六根に妄執を起こすなり。こ

きようかいしよう

い

ごんきよう

こころ

ねんりよ

す

れを「境界性」と云うなり。権教の意は、この念慮を捨

と

ほけきよう

こころ

きようかいしよう

ほか

さんいん

てよと説けり。法華經の心は、この「境界性」の外に三因

ぶつしよう

しゆし

すなわ

さんじんえんまん

ぶつか

じよう

仏性の種子なし、これ則ち三身円満の仏果を成すべき

しゆしよう

と

しゆしよう

ごんきよう

しん

ひと

種性なりと説けり。この種性を、権教を信ずる人はこれ

し

きよう

ぼう

ゆえ

ぼんぷそくごく

ぎ

し

を知らず、この経を謗するが故に、凡夫即極の義をも知ら

ゆえ

いつさいせけん

ぶつしゆ

だん

ろくどう

しゆじよう

ず。故に一切世間の仏種を断ずるなり。されば、六道の衆生

さんいんぶつしよう

ぐそく

つい

さんじんえんまん

そうよう

あらわ

も三因仏性を具足して終に三身円満の尊容を顕すべきと

きよう ぼう

ゆえ

ろくどう

ぶつしゆ

だん

ころに、この経を謗ずるが故に、六道の仏種をも断ずるな

みようらくだいしい

きよう

ろくどう

ぶつ

り。されば、妙楽大師云わく「この経はあまねく六道の仏

しゆ ひら

きよう ぼう

ぎ だん あ

種を開く。もしこの経を謗せば、義、断に当たるなり」。

せん

にちれん こころ

いっさい

ことば じっかい

詮ずるところ、日蓮が意は、「二切」の言は十界をさ

きよう ぼう

じっかい ぶつしゆ だん

す。この経を謗ずるは、十界の仏種を断ずるなり。されば、

ひぼう

に じ だいろん い

くち そし

ひ い

「誹謗」の二字を大論に云わく「口に謗るを『誹』」と言い、

こころ そむ

ぼう い

しきしんさんごう

へ

ほけきよう

心に背くを『謗』と云う」。よつて、色心三業に経て法華経

ぼう たてまつ

ひと

にゆうあびごく

あびごく

い

うたが

を謗じ奉る人は「入阿鼻獄（阿鼻獄に入る）」、疑いな

こうぼう

じかく ちしよう

ぜんどう

ほうねん

だるまとう

きなり。いわゆる弘法・慈覚・智証・善導・法然・達磨等の

だいほうぼう もの いま にちれんとう たぐ なんみようほうれんげきよう とな
大謗法の者なり。今、日蓮等の類い、南無妙法蓮華經と唱え
たてまつ さんぜ しよぶつ ぶつしゆ つ もの うんぬん

奉るは、あに三世の諸仏の仏種を継ぐ者にあらずや云々。

いち しやあくちしき しんこんぜんう あくちしき す ぜんう しんこん

一、「捨悪知識 親近善友（悪知識を捨てて、善友に親近す）」

の事 こと

おお い あくちしき ざいせ ぜんしやう

仰せに云わく、「悪知識」とは、在世にては善星・

くぎやり だいばとう ぜんう かしやう しやりほつ あなん

瞿伽利・提婆等これなり。「善友」とは、迦葉・舍利弗・阿難・

もくれんとう まつぼうとうこん あくちしき

目連等これなり。末法当今において、「悪知識」というは、

ほうねん こうぼう じかく ちしやうとう ごんにん ほうぼう ひとびと ぜんちしき

法然・弘法・慈覚・智証等の権人・謗法の人々なり。「善知識」

もう にちれんとう たぐ

と申すは、日蓮等の類いのことなり。

そう

ちしき

じゅうじゅう

あ

げご

ちしき

総じて、「知識」において重々これ有り。外護の知識、

どうぎよう

ちしき

じつそう

ちしき

せん

じつそう

同行の知識、実相の知識これなり。詮ずるところ、実相の

ちしき

なんみようほうれんげきよう

ちしき

知識とは、いわゆる南無妙法蓮華經これなり。「知識」とは、

かたち

こころ

い

すなわ

しきしん

にほう

形をしり、心をしるを云うなり。これ即ち色心の二法な

ほうぼう

しきしん

す

ほけきよう

みようきよう

みようち

しきしん

あらわ

り。謗法の色心を捨てて、法華經の妙境・妙智の色心を顕

あくう

ほうぼう

ひとびと

ぜんう

にちれんとう

すべきなり。「悪友」は謗法の人々なり。「善友」は日蓮等の

たぐ

類いなり。

いち

むじようほうじゆ

ふぐじとく

むじよう

ほうじゆ

もと

おの

一、「無上宝聚 不求自得（無上の宝聚は、求めざるに自ず

え

こと

から得たり）」の事

おほ い

むじようほうじゆ

いち

しやくそん

仰せに云わく、この「無上宝聚」において、一には、釈尊

いんぎようかとか

まんぎようまんぜん

こつずい

ほうじゆ

い

に

の因行果徳の万行万善の骨髓を宝聚と云うなり。二には、

みようほうれんげきよう

ふぐ

ちゆうこん

しだいしようもん

妙法蓮華經のことなり。「不求」とは、中根の四大声聞は

ほうじゆ

にんうんじざい

え

しじつがし

がじつご

かくのごとき宝聚を任運自在に得たり。「此実我子、我実其

ぶ

じつ

わ

こ

われ

じつ

ちち

ゆえ

父（これは実に我が子、我は実にその父なり）」の故なり。

そう

いっさいしゆじよう

じとく

じ

総じては一切衆生のことなり。「自得」というは、「自」は

じっかい

じがとくぶつらい

われ

ほとけ

え

十界のことなり。これは「自我得仏来（我は仏を得てより

このかた

じ

おな

とく

おな

来）」の「自」と同じことなり。「得」もまた同じことな

まっぼう

い

じとく

にちれんとう

たぐ

じ

り。末法に入つては、「自得」とは日蓮等の類いなり。「自」

ほけきよう　ぎようじや

とく

だいもく

とく

いちじ

とは法華經の行者、「得」とは題目なり。「得」の一字には

してい　ふか

よ

とく

ぎ　ふく

ふく

師弟を含みたり。「与」と「得」との義を含めり。「不求」

ぶつぼう　い

しゆぎよう　かくどう　しんろう

しやかによらい

とは、仏法に入るには修行・覺道の辛勞あり。釈迦如来は

しやば　おうらい

はっせんべん

ごしんろう

もと　たも

「娑婆に往来すること八千反」の御辛勞にして求め給う

くどく

いま　しやかむにぶつ　な　たま

ほけきよう

功德なり。さて、今の釈迦牟尼仏と成り給えり。法華經の

ぎようじや　もと

くどく　じゆとく

じとく

行者は求めずしてこの功德を受得せり。よつて、「自得」

と

じ　じ　いちねん

とく

さんぜん

とは説かれたり。この「自」の字は一念なり、「得」は三千な

じ　さんぜん

とく

いちねん

じ

じ

り。また「自」は三千、「得」は一念なり。また「自」は自な

とく

た

そう

じとく

に　じ

ほうかい

つ

り、「得」は他なり。総じて「自得」の二字に法界を尽くせ

せん

り。詮ずるところ、この妙法蓮華經を「自」より得たり。

みようほうれんげきよう

じ

え

じ

しゃくそん

しゃくそん

すなわ

われ

いっしん

いっしん

「自」とは、釈尊なり。釈尊は、即ち我が一心なり。一心

しやか

じゆとく

たてまつ

なんみようほうれんげきよう

にちれん

しやうねん

の釈迦より受得し奉る南無妙法蓮華經なり。日蓮も生年

さんじゆうに

じとく

たてまつ

だいもく

うんぬん

三十二にして自得し奉る題目なり云々。

いち

やくそうゆほん

こと

一、「藥草喩品」の事

おほ

い

やく

ぜこうろうやく

よ

ろうやく

仰せに云わく、「藥」とは「是好良藥（この好き良藥）」

なんみようほうれんげきよう

みようほう

ちようじよう

くさ

の南無妙法蓮華經なり。妙法を頂上にいたただきたる草な

くすり

そう

ちゆうこん

しやうもん

れば、藥にあらずということなし。「草」は中根の声聞な

そう

いっさいしゆじよう

たと

かわらけ

くすり

れども、総じては一切衆生なり。譬えば、土器に藥をか

けたるがごとし。我ら衆生、父母果縛の肉身に

なんみようほうれんげきようくすり 煩悩即菩提・生死即涅槃

南無妙法蓮華經の薬をかけたり。

うんぬんぶん おし 煩悩即菩提・生死即涅槃

はこれなり云々。この分を教うるを「喻」とは申すなり。釈

いぎようくん に云わく『「喻」とは、曉訓なり』。提婆、竜女の畜生、

にんげんてんたい らかん ぼさつとう 人間も、天帝、羅漢、菩薩等も、ことごとく「薬草」の仏に

あらずということなし。末法当今の法華の行者の日蓮等の

たぐやくそう 類いは、「薬草」にして、日本国の一切衆生の「薬王」な

うんぬんにほんこく いっさいしゆじよう り云々。

いちげんせあんのん ごしやうぜんしよ 一、「現世安穩、後生善処（現世安穩にして、後に善処に生

げんせあんのんげんせあんのん 一、「現世安穩、後生善処（現世安穩にして、後に善処に生

のちぜんしよ 後に善処に生

しょうしょう 後に善処に生

しょうしょう 後に善処に生

しょうしょう 後に善処に生

しょうしょう 後に善処に生

しょうしょう 後に善処に生

ず」の事こと

仰せに云わく、詮ずるところ、この妙法蓮華經を聴聞おほいせん

たてまつ

げんせあんのん

ごしようぜんしよ

い

すで

し奉るを、「現世安穩」とも、「後生善処」とも云えり。既

かみ

もんぜほうい

ほう

き

お

と

もん

に上に「聞是法已（この法を聞き已わる）」と説けり。「聞」

みようじそく

ぼんぷ

みようほう

き

たてまつ

は名字即の凡夫なり。妙法を聞き奉るところにて

そくしんじようぶつ

き

よ

たも

すなわ

ぶつ

即身成仏と聞くなり。「もし能く持つことあらば、即ち仏

しん たも

き

ゆえ

たも

たてまつ

たも

たてまつ

身を持つ」とは、これなり。聞く故に持ち奉る、持ち奉

ゆえ

さんるい

きうてききた

きた

げんせあんのん

きもん

るが故に三類の強敵来る。来るをもつて「現世安穩」の記文

あらわ

ほっけ

ぎようじや

うたが

ほっけ

顕れたり。法華の行者なること疑いなきなり。法華の

ぎようじや

だいな

あ

み

だいな

あ

行者はかかる大難に値うべしと見えたり。大難に値うをも

ごしようぜんしよ

じようぶつ

けつじよう

げんせ

って、「後生善処」の成仏は決定せり。これあに現世にし

あんのん

て安穩なるにあらずや。

ごしようぜんしよ

だいばほん

ふんみよう

と

せん

「後生善処」は、提婆品に分明に説けり。詮ずるところ

げんぜあんのん

ほけきよう

しん

たてまつ

さんず

はちなん

ろ、「現世安穩」とは、法華経を信じ奉れば三途・八難の

く

ぜんあく

じようげ

にん

みな

きようしゆしやくそん

どうとう

苦をはなれ、善悪・上下の人までも、皆、教主釈尊と同等

ぶつか

え

じしんほんかく

によらい

あらわ

じしん

とうたい

の仏果を得て、自身本覚の如来なりと顕す。自身の当体、

みようほうれんげきよう

やくそく

げんぜあんのん

ひら

妙法蓮華経の薬草なれば、「現世安穩」なり。ここを開く

ごしようぜんしよ

い

みようほうれんげきよう

みようほう

を「後生善処」と云うなり。妙法蓮華経というは妙法の

やくそう

せん

げんぜあんのん

しきほう

ごしようぜんしよ

薬草なり。詮ずるところ、「現世安穩」は色法、「後生善処」

しんぼう

じっかい

しきしん

みようほう

かいかく

げんぜあんのん

は心法なり。十界の色心、妙法と開覚するを「現世安穩、

ごしようぜんしよ

い

せん

ほけきよう

ひろ

後生善処」とは云うなり。詮ずるところ、法華経を弘むるを

げんぜあんのん

ごしようぜんしよ

もう

うんぬん

もつて「現世安穩、後生善処」と申すなり云々。

いち

かいしつとうおいつさいち

いっさいち

いた

こと

一、「皆悉到於一切智地（みな一切智地に到らしむ）」の事

おほ

い

いっさいち

ほけきよう

たと

仰せに云わく、「一切智地」というは法華経なり。譬え

さんぜんだいせんせかい

とち

そうもく

にんちくとう

みなだいち

そな

ば、三千大千世界の土地・草木・人畜等、皆大地に備りた

はちまんほうぞう

じゅうにぶきよう

ほつけ

きにゆう

るがごとく、八万法蔵・十二部経ことごとく法華に帰入せ

かいしつ

に

ぜんにん

あくにん

まよ

さと

しむるなり。「皆悉」の二字をば、善人も悪人も、迷いも悟

いつさいしゅじょう　あくごう　ぜんごう　ほか　やくし　だいにち　みだ

りも、一切衆生の悪業も善業も、その外、薬師・大日・弥陀

じぞう　かんのん　よこ　じつぼう　たて　さんぜ　あ　しよぶつ

ならびに地藏・観音、横に十方、豎に三世、有りとある諸仏

ぐとく　もろもろ　ぼさつ　ぎやうとく　そう　じつかい　しゅじやう　ぜんあく

の具徳、諸の菩薩の行徳、総じて十界の衆生の善悪の

ごうさとう　かいしつ　と　ほけきやう　きにゆう

業作等を「皆悉」と説けり。これを法華經に帰入せしむる

いつさいち　じ　ほけきやう

を、「二切智地」の法華經と申すなり。

もんぐ　しち　い　かいしつとう　おいつさいち　じ

されば、文句の七に云わく『皆悉到於一切智地』とは、

じ　じつそう　くきやう　に　ゆえ　いち　な

『地』とは実相なり、究竟して二にあらず、故に『一』と名

しやうこうはく　ゆえ　な　さい

づくるなり。その性広博なり。故に名づけて『切』となす。

じやく　つね　しやう　ゆえ　な　ち　むじゆう

寂にして常に照なり。故に名づけて『智』となす。無住の

ほん いっさい ほう た ゆえ な じ
本より一切の法を立つ。故に名づけて『地』となす。これ

えんぎよう じつせつ と あ みなしゆじよう
えんぎよう じつせつ と

円教の実説なり。およそ説くところ有れば、皆衆生をし

ち じ いた うんぬん
てこの『智地』に到らしむ」云々。

しゃく いっさい ち じ し じ くわ はん いち
この釈は「一切智地」の四字を委しく判ぜり。「一」

くきよう い さい こうはく しゃく ち じやく
をば究竟と云い、「切」をば広博と釈し、「智」をば「寂に

つね しょう い じ むじゆう ほん はん
して常に照なり」と云い、「地」をば「無住の本」と判ぜ

り。しかるに、「およそ説くところ有れば」は約教を指し、

みなしゆじよう きえん おさ じつかい しゆじよう さ
「皆衆生をして」は機縁を納むるなり。十界の衆生を指し

せつ い と あ さ くきよう
て「切」と云い、「およそ説くところ有れば」を指して「究竟

して二にあら^にず、故に『一』と名づくるなり』と云え^{ゆえ}り。『一』

とは、三千大千世界・十方法界を云うなり。その上^{かみ}に人畜等^{にんちくとう}

あるは、「地^じ」なり。

記^きの七に云わ^{しち}く『切^い』を衆^{しゆ}と訓^{くん}ず」文^{もん}。よつて、「一切^{いっさい}」

の二字^{にじ}に法界^{ほうかい}を尽^つくせり。諸法^{しよほう}は「切^{さい}」なり。実相^{じつそう}は「一^{いち}」

なり。詮^{せん}ずるところ、法界実相^{ほうかいじつそう}の妙体^{みようたい}、照而常寂^{しようにじようじやく}の一理^{いちり}

にして、十界三千^{じっかいさんぜん}、一法性^{いちほつしやう}にあら^{さんぜん}ずとい^{しよほう}うこと^{ここ}とな^{ほんぶん}し。これ

を「一^{いち}」と説^とくなり。さて、三千^{さんぜん}の諸法^{しよほう}の己^こ々に本分^{ほんぶん}なれ

ば、「切^{さい}」の義^ぎなり。しからば、「一^{いち}」は妙^{みよう}、「切^{さい}」は法^{ほう}な

みようほう にじ いっさい にじ いっさい むじゅうほん みよう

り。妙法の二字、「二切」の二字なり。「無住の本」は妙の

とく いっさい ほう た ほう とく

徳、「二切の法を立つ」は法の徳なり。

いっさいちじ なんみようほうれんげきよう いっさいちじ

「一切智地」とは南無妙法蓮華經これなり。「一切智地」、

すなわ いちねんさんぜん いま まつぼう い いっさいちじ ぐつう

即ち一念三千なり。今、末法に入つて「一切智地」を弘通

にちれんとう たぐ いち

するは、日蓮等の類いこれなり。しかるに、「一」とは一念

さい さんぜん いっしん まつ さくら お

なり、「切」とは三千なり。一心より松よ桜よと起こるは、

さい しんぼう やく ぎ しきほう しゆそく

「切」なり。これは心法に約する義なり。色法にては、手足

とう せつ いっしん いち せん しきしん

等は「切」なり。一身なるは「一」なり。詮ずるところ、色心

にほう いっさいちじ なんみようほうれんげきよう うんぬん

の二法、「一切智地」にして南無妙法蓮華經なり云々。

いち いっさいちじ しじ
一、「二切智地」の四字

この「二切智地」の四字に、ほけきよういちぶはちかんもんくく法華經一部八卷文々句々を

おき収めたり。いっさいちじこの「二切智地」とは、「三諦、一諦、三にあら

いちず、一にあらず」なり。さんち やく三智に約すれば空智なり。くうちさては三諦

い がたとは云い難し。さんたいしかりといえども、三諦一諦の中の空智な

さんたいり。さんさんくかされば、三諦において三三九箇の三諦有り。さんたいあまず空諦に

さんたいて三諦を云う時は、とき空諦と呼び出だすは仮諦、くうたい空諦なるは

くうたい空諦なり。ふに不二するは中道なり。ちゆうどう三諦同じく、さんたいおなかくのごと

こころく心得べきなり。

せん

いつさいちじ

くしきほつしょう

こころう

詮ずるところ、この「一切智地」をば、九識法性と心得

くしきほつしょう

めいごふに

ぼんしよういちによ

くう

べきなり。九識法性をば、迷悟不二・凡聖一如なれば、空

い

むふんべつちこう

くう

い

くしきほつしょう

と云うなり。無分別智光を空と云うなり。この九識法性と

ところ

ほうかい

さ

ほうかい

じっかい

じっかい

は、いかなる処の法界を指すや。法界とは十界なり。十界

そくしよほう

しよほう

とうたい

ほんぬ

みようほうれんげきよう

即諸法なり。この諸法の当体、本有の妙法蓮華経なり。こ

じゅう

まよ

しゅじよう

いちぶつげん

ふんべつせつさん

ふんべつ

の重に迷う衆生のために、一仏現じて「分別説三（分別し

さん

と

くしきほんぼう

みやこ

た

い

て三を説きたもう」するは、九識本法の都を立ち出ずる

つい

もと

くしき

いんにゆう

ほけきよう

なり。さて、終に本の九識に引入する、それを法華経とは

い

いつさいちじ

いつさいちじ

われ

云うなり。「一切智地」とは、これなり。「一切智地」は我ら

しゅじよう

しんぽう

しんぽうすなわ

みようほう

いつさいちじ

衆生の心法なり。心法即ち妙法なり。「一切智地」とは、

うんぬん

これなり云々。

いち こんきようしよう

こと

一、「根茎枝葉」の事

おお

い

もん

しゃく

しん

かい

じよう

え

仰せに云わく、この文をば、釈には「信・戒・定・慧」

うんぬん

しゃく

こころ

そうもく

こんきようしよう

云々。この釈の心は、草木はこの「根茎枝葉」をもつて

ぞうちよう

い

ぶつぽう

しゅぎよう

増長と云うなり。仏法を修行するも、またかくのごとし。

せん

われ

しゅじよう

ほけきよう

しん

たてまつ

ね

詮ずるところ、我ら衆生、法華経を信じ奉るは、根をつ

ほけきよう

もん

ぜみようじかい

けたるがごとし。法華経の文のごとく「是名持戒（これを

かい

たも

な

かいたい

ほん

しょうじきしゃほうべん

たん

戒を持つと名づく）の戒体を本として、「正直捨方便 但

せつむじようどう

しょうじき

ほうべん

す

むじようどう

と

説無上道（正直に方便を捨てて、ただ無上道を説くのみ）

かい

ほけきよう

もんそう

ほつけざんまい

のごとくなるは戒なり、法華經の文相にまかせて法華三昧

しゆ

じよう

だいもく

とな

たてまつ

え

を修するは定なり、題目を唱え奉るは慧なり。いわゆる、

ほうかい

しょうじゅういめつ

しん ここ

ほんぶん

かい

さんぜ

法界ことごとく生住異滅するは信、己々の本分は戒、三世

ふかい

じよう

おのおの

とくぎ

あらわ

え

不改なるは定なり、各々の徳義を顕したるは慧なり。こ

すなわ

ほうかいびようどう

こんきようしよう

すなわ

しんによじつそう

れ即ち法界平等の「根茎枝葉」なり。これ即ち真如実相

ふ ま

かい

じよう

え

さんがく

みようほうれんげきよう

の振る舞いなり。いわゆる戒・定・慧の三学は妙法蓮華經

しん

こん

い

しゃく

い

さんがく

なり。これを信ずるを「根」と云うなり。釈に云わく「三学

つた

な

みようほう

い

うんぬん

をとともに伝うるを、名づけて妙法と曰う」云々。

いち こんきようしよう こと

一、「根茎枝葉」の事

おほ い われ いっしん

仰せに云わく、これは我らが一身なり。「根」とは心法

きよう われ こうべ あし いた

なり、「茎」とは我らが頭より足に至るまでなり、「枝」

しゆそく よう け よつ こんきようしよう

とは手足なり、「葉」とは毛なり。この四つを「根茎枝葉」

と ほうかいさんぜん よつ ぐそく

と説けり。法界三千、この四つを具足せずということなし。

すなわ しん かい じよう え たい じつそういちり

これ即ち「信・戒・定・慧」の体にして、実相一理の

なんみようほうれんげきよう たい ほつけふしん にな こんきようしよう

南無妙法蓮華經の体なり。法華不信の人は「根茎枝葉」あ

ぞうちよう こころしゆじよう こころ しゆじよう

りて増長あるべからず。「枯槁衆生（枯槁の衆生）」なる

うんぬん

べし云々。

いち ここうしゅじょう ここう しゅじょう こと

一、「枯槁衆生（枯槁の衆生）」の事

おほ い ほけきょう たも たてまつ もの ここうしゅじょう

仰せに云わく、法華經を持ち奉る者は「枯槁衆生」

すで ほけきょう しゅし じゅじ たてまつ ゆえ

にあらざるなり。既に法華經の種子を受持し奉るが故な

ほうぼうふしん ひと げしゅな ゆえ ここうしゅじょう

り。謗法不信の人は下種無きが故に、「枯槁衆生」なり。

みようらくだいしい よきよう たね

されば、妙楽大師云わく「余教をもつて種となさず」。

いち どうほうう ひと ほう あめ ふ ひと のり あめふ

一、「等雨法雨（等しく法の雨を雨らす）（等しき法の雨雨る）」

こと

の事

おほ い どう びようどう ぜんにん あくにん

仰せに云わく、「等」とは、平等のことなり。善人・悪人、

にじよう せんだい しょうけん じゃけんとう もの みようほう あめ お

二乗・闡提、正見・邪見等の者にも、妙法の雨を惜しま

びようどう

雨

ほう

あめ

ふ

ず平等にふらすということなり。されば、「法の雨を雨ら

とき

だいかくせそん雨

手 な

す」という時は、大覚世尊ふらしてに成りたまえり。さて

のり あめ

とき

もと

じつそうびようどう

ほうう

「法の雨ふりて」とよむ時は、本より実相平等の法雨は、

じようじゆうほんぬ

あめ

いまはじ

常住本の雨なれば、今始めてふるべきにあらず。され

しよほうじつそう

ひ ゆほん

とき

ふうげつ

たと

みようらくだいし

ば、諸法実相を、譬喩品の時は風月に譬えたり。妙楽大師

なん

かく

なん

あらわ

しゃく

じようじゆう

じつそう

は「何ぞ隠れ、何ぞ顕れん」と釈せり。常住なり。実相

ほうう

さんぜじようどう

おんけん

な

せん

の法雨は三世常恒にして、隠顕さらに無きなり。詮ずると

とう

じ

とき

しゃかによらい

びようどう

ころ、「等」の字は、「ひとしく」とよむ時は、釈迦如来の平等

じひ

とき

びようどうだいえ

の慈悲なり。さて、「ひとしき」とよむ時は、平等大慧の

みようほうれんげきよう

ひと

ほう

あめ

のうぐ

妙法蓮華經なり。「等しく法の雨をふらす」とは、能弘に

ひと

のり

あめ

よ

とき

しよぐ

ほう

ついたり。「等しき法の雨ふりたり」と読む時は、所弘の法

せん

ほう

じっかい

しよほう

あめ

なり。詮ずるところ、「法」というは、十界の諸法なり。「雨」

じっかい

ごんごおんじよう

ふ

ま

じざい

とは、十界の言語音声の振る舞いなり。「ふる」とは、自在

じごく

どうねんみようか

ないしぶっかい

かみ

しよき

おんじよう

にして、地獄は洞燃猛火、乃至仏界の上の所作・音声を、

とううほうう

と

「等雨法雨」とは説けり。

とううほうう

ほったい

なんみようほうれんげきよう

いま

この「等雨法雨」の法体は、南無妙法蓮華經なり。今、

まっぼう

い

にちれんとう

たぐ

ぐつう

だいもく

とううほうう

末法に入つて日蓮等の類いの弘通する題目は、「等雨法雨」

ほったい

ほうう

じごく

しゆじよう

がき

ちくしよとう

の法体なり。この「法雨」、地獄の衆生・餓鬼・畜生等に

いた

どうじ

ほうう

にほんこく

いつさいしゅじよう

至るまで、同時にふりたる「法雨」なり。日本国の一切衆生

ふぞく

たも

ほうう

だいもく

ごじ

のために付嘱し給う「法雨」は、題目の五字なり。いわゆ

にちれんこんりゆう

ごほんぞん

なんみようほうれんげきよう

うんぬん

る、日蓮建立の御本尊、南無妙法蓮華經これなり云々。

ほうべんぼん

ほんまつくきようとう

い

ひゆほん

とういちだいしや

方便品には「本末究竟等」と云えり。譬喩品には「等一大車

とういち

だいしや

い

とう

じ

かさ

と

（等一大車）と云えり。この「等」の字を重ねて説かれ

によがとうむい

わ

ひと

こと

たり。あるいは「如我等無異（我がごとく等しくして異な

い

とう

じ

ほうとうほん

によ

ることなし」と云えり。この「等」の字は、宝塔品の「如

ぜ
によぜ

おな

せん

是、如是（かくのごとし、かくのごとし）と同じなり。詮ず

とう

なんみようほうれんげきよう

ほう

あめ

るところ、「等」とは、南無妙法蓮華經なり。「法の雨をふ

らす」とは、今身より仏身に至るまで持つや否やと云う受持
の言語なり云々。
の言 語 な り 云 々 。
ごんご うんぬん

一、「等雨法雨（等しく法の雨を雨らす）（等しき法の雨雨る）」
いち どううほうう ひと ほう あめ ふ ひと のり あめふ

の事

仰せに云わく、この時は、妙法実相の法雨は十界三千、
おほ い とき みようほうじつそう ほうう じっかいさんぜん

下は地獄、上は非想非非想まで、横に十方、豎に三世に亘つ
しも じごく かみ ひそうひひそう よこ じっぽう たて さんぜ わた

て妙法の功德ふるを、「等」とは云うなり。さて「雨る」
みようほう くどく 雨 どう い ふ

とは、一切衆生の色心、妙法蓮華經と三世常住にふる
いっさいしゆじょう しきしん みようほうれんげきやう さんぜじようじゅう

なり云々。
うんぬん

いちぎ

い

みようほう

あめ

くしきほんぽう

ほつたい

一義に云わく、この妙法の雨は、九識本法の法体なり。

いちぶつげんぜん

と い

みようほう

しかるに、一仏現前して説き出だすところの妙法なれば、

ほう

あめ

い

ゆえ

「法の雨をふらす」と云うなり。その故は、「ふらす」とい

かみ

しも

い

じゅうかこういん

ぎ

うは、上より下へふるを云うなり。よつて、従果向因の義な

ほとけ

やく

だいじゅう

ぶつか

くかい

ほつたい

り。仏に約すれば、第十の仏果より九界へふらす。法体に

ところ

ところ

しんによ

いちり

しきぶん

ては、ふる処もふらす処も真如の一理なり。識分にては、

はつしき

くだ

いま

にちれんとう

たぐ

八識へふり下りたるなり。しかれば、今、日蓮等の類い、

なんみようほうれんげきよう

にほんこく

いつさいしゆじよう

ちようじよう

南無妙法蓮華經を日本国の一切衆生の頂上にふらすを、

ほう

あめ

い

うんぬん

「法の雨をふらす」と云うなり云々。

いち によじよう けこく らい こつ ぐ だいおう ぜん う くに きた

一、「如從飢国来 忽遇大王膳（飢えたる国より来つて、た

だいおう ぜん あ こと

ちまちに大王の膳に遇うがごとし）」の事

おお い もん ちゆうこん しだいしようもん ほつけ きた

仰せに云わく、この文は中根の四大声聞、法華に來れ

たと 飢 くに きた だいおう 供 あ

ること、譬えばうえたる国より来つて大王のそなえに値う

かんき い もん

がごとくの歡喜なりと云えり。しかれば、この文のごとく

ほつけいぜん ひと がきかい しゆじよう すで けこく らい

ならば、法華已前の人は餓鬼界の衆生なり。既に「飢国来」

と だいおう ぜん だいごみ ちゆうこん しようもん ほつけ

と説けり。「大王膳」とは、醍醐味なり。中根の声聞、法華

きた いちじよう だいご ほうみ え ほうおう くらい

に來つて、一乗醍醐の法味を得て、たちまちに法王の位に

そな こと じ にぜん う えどう き たい こと

備わりたり。「忽」の字は、爾前の迂廻道の機に對して「忽」

い

と云うなり。速疾頓成の義を、「忽」と云うなり。たとい、

そくしつとんじよう

ぎ

こつ

い

げゆう はつそう とな

しよけ

ぶつどう すす

外用の八相を唱うることにあるも、所化をして仏道に進まし

せん

まつぼう

い

ほうぼう

めんがためなり。詮ずるところ、末法に入つては、謗法の

ひとびと

がきかい

しゆじよう

きよう

あ

たてまつ

人々は餓鬼界の衆生なり。この経に値い奉り、

なんみようほうれんげきよう

あ

たてまつ

だいおうぜん

南無妙法蓮華経に値い奉ることは、しかしながら「大王膳」

たり。

こつぐ

ぐ

じ

かんよう

しやく

い

じようぶつ

「忽遇」の「遇」の字、肝要たり。釈に云わく「成仏の

かた

きよう

あ

い

難きにはあらず。この経に値うをかたしとす」と云えり。

ふきようほん

い

ぶぐじようふきよう

じようふきよう

あ

うんぬん

不軽品に云わく「復遇常不軽（また常不軽に遇う）」云々。

ごんのうほん

い

しょうちぶつぽう

う

ぶつぽう

あ

うんぬん

嚴王品に云わく「生値仏法（生まれて仏法に値えり）」云々。

だいおうぜん

あ

もつと

なんみようほうれんげきよう しん

「大王膳」に値いたり。最ももつて、南無妙法蓮華經を信

じゆ たてまつ

受し奉るべきなり。

きようもん

ほつけ

ほか

いっさいしゆじよう

この經文のごとくならば、法華より外の一切衆生は、

こうき

ひと

がきどう

しゆじよう

じゆうらせつによ

いかに高貴の人なりとも、餓鬼道の衆生なり。十羅刹女は

がきかい らせつ

ほけきよう

じゆじ

たてまつ

ゆえ

がき

餓鬼界の羅刹なれども、法華經を受持し奉るが故に、餓鬼

そく

いちねんさんぜん

ほつけ

きた

がき

に即する一念三千なり。法華へ来らずんば、いずれも餓鬼・

ききん

くる

せん

かなら

ちゆうこん

しやうもん

飢饉の苦しみなるべし。詮ずるところ、必ず、中根の声聞、

りようげ

ことば

わ

み

がき

るい

がき

ほうかい

じき

領解の言に我が身を餓鬼に類することは、餓鬼は法界に食

しよく

え

しよほうじつそう

いちみ

ありといえども食することを得ざるなり。諸法実相の一味

だいご

みようほうあ

つい

かいかく

た

の醍醐の妙法有れども、終に開覚に能えざるあいだ、

しんじゅうよねん

じき

飢

うんぬん

四十余年、食にうえたり云々。

いちぎ

い

じよほん

ほうべん

しよほうじつそう

かんろあらわ

一義に云わく、序品・方便より諸法実相の甘露顕れて

なんみようほうれんげきよう

こうりやくにじゅう

ひせつだん

さと

南無妙法蓮華経あれども、広略二重の譬説段まで悟らざれ

がき

まんまん

しよくじ

せん

ば、餓鬼の満々とある食事をくらわざるがごとし。詮ずる

にほんこく

いつさいしゆじよう

がきかい

しゆじよう

だいおうぜん

ところ、日本国の一切衆生は餓鬼界の衆生なり。「大王膳」

なんみようほうれんげきよう

ぐ

じ

にんぼう

とは、いわゆる南無妙法蓮華経これなり。「遇」の字には人法

おき

まつ

によけしゆきようじき

う

おし

ま

を納めたり。よつて、末に「如飢須教食（飢えて教えを須

しよく

つて食するがごとし」と云えり。

飢

うえたるとも大王のお

ま

だいご

しよく

い

いま

しえを待つて醍醐を食するがごとしと云えり。今、

なんみようほうれんげきようあ

こんじん

ぶっしん

いた

じゆじ

南無妙法蓮華經有れども、今身より仏身に至るまでの受持

じようぶつ

あ

きよう

に

をうけずんば、成仏はこれ有るべからず。「教」とは、「爾

ぜんむとくどう ほつけじようぶつ

おし

前無得道、法華成仏」のとなり。この教えをうけずんば、

ほけきよう

どくじゆ

だいおう

くらい

のぼ

法華經を讀誦すとも大王の位に登ること、これあるべから

だいご

だいまく

ごじ

うんぬん

ず。醍醐は題目の五字なり云々。

いち

だいとうちしやうぶつ

じつこうぎどうじよう

ぶつぼうふげんぜん

ふとくじようぶつどう

一、「大通智勝仏 十劫坐道場 仏法不現前 不得成仏道

だいとうちしやうぶつ

じつこうどうじよう

ぎ

ぶつぼう

まえ

げん

（大通智勝仏は、十劫道場に坐したまえども、仏法は前に現

ぜず。仏道を成ずることを得たまわす」の事ぶつどう じよう え こと

仰せに云わく、この經文は一切衆生の本法流転を説おほ い きようもん いっさいしゆじよう ほんぽうるてん と

かれたり。されば、釈にも出世以前と判ぜり。これは、しやく しゆつせいぜん はん

だいふうぶつしゆつせ たま じっしようこう あいだ いっきよう と たま

大通仏出世し給えども、十小劫の間、一經も説き給わず

きようもん ぶつぼう ふげんせん ゆえ ふとくじようぶつ

という經文なり。よつて、「仏法不現前」の故に、「不得成仏」

い しやく み しゆつせいぜん とき

と云えり。されども、釈を見るに出世以前という時は、こ

きようもん ほんぼう じゆう と

の經文はいかなることぞ。これは本法の重を説かれたり。

いちぶつしゆつせ るてんもん いちぶつ しゆつせな とき ほんぽう

一仏出世すれば、流転門となる。一仏も出世無き時は、本法

ふしぎ たい めい こ しょう ぶつ じようぶつ

不思議の体なり。迷・悟もなく、生・仏もなく、成仏も

ふじようぶつ

ふとくじようぶつどう

い

なく不成仏もなきなり。よつて、「不得成仏道」と云えり。

ほんぼう

もう

みず

ひ

そもそも本法と申すは、水があつくなり、火がつめたくな

るてんもん

みず

ひ

らば流転門なるべし、水はいつもつめたく火はいつもあつ

じごく

かえん

がき

けかち

ほか

ばんぼうここ

く、地獄はいつも火焰、餓鬼はいつも飢渴、その外、万法己々

とうい

とうい

ほんぼう

たい

い

おも

の当位は当位のままなるを本法の体と云うなり。この重を

と

あらわ

きようもん

説き顕したる経文なり。

ほんぼう

じゆう

ほけきよう

ごんきよう

るてん

この本法の重は法華経なり、権教は流転なり。この

るてん

しゅじよう

ほんぼう

じゆう

ひ

い

ほとけ

しゅつせ

流転の衆生を本法の重に引き入れんとての仏の出世な

ほんぼう

きよう

せん

り。その本法というは、この経なり。詮ずるところ、この

きようもん ほんぼう

だいつうちしようぶつ

われ しゆじよう しき

経文の本法とは、「大通智勝仏」というは、我ら衆生の色

しん じつこう

じつかい ぎどうじよう

心なり。「十劫」というは、十界なり。「坐道場」というは、

じつかい じゆうしよ

どうじよう

じゃつこうど

十界の住処そのまま道場なり。道場なれば、寂光土なり。

ほうかい じゃつこうど

じつかい しゆじよう

しよほうじつそう ほとけ

法界は寂光土にして十界の衆生ことごとく諸法実相の仏

いちぶつげん

まよ しゆじような

と

なれば、一仏現すべきにあらず。迷いの衆生無ければ、説

ほう な

ぶつぼう ふげんぜん い

ふとく

くべき法も無し。よつて、「仏法不現前」と云えり。「不得

じようぶつどう

しかく ほんがく じようぶつ

ほんぼう

成仏道」とは、始覚・本覚の成仏ということもなし。本法

ふしぎ たい

ばんぼうほんぬ

しゃく

不思議の体にして万法本有なり。これによつて、釈には

しゆつせいぜん はん

出世以前と判ぜり。

しかれば、その本法の体とは、詮せんずるところ、

なんみようほうれんげきよう

ほんぼう ないしよう ひ い

南無妙法蓮華経なり。この本法の内証に引き入れんがため

ほとけ しじゅうよねんゆういん つい だいごじ ほんぼう と

に、仏は四十余年誘引し、終に第五時の本法を説きたまえ

いま まつぼう い じようぎようしよでん ほんぼう なんみようほうれんげきよう

り。今、末法に入つて、上行所伝の本法の南無妙法蓮華経

ひろ たてまつ にちれん せけん しゅつせ さんじゅうにさい

を弘め奉る日蓮、世間に出世すといえども、三十二歳ま

だいもく とな い ぶつぼう ぶんぜん

ではこの題目を唱え出ださざるは、「仏法不現前」なり。こ

みようほうれんげきよう ひろ つい ほんぼう ないしよう ひ い

の妙法蓮華経を弘めて、終には本法の内証に引き入るる

にちれん だいつうちしやうぶつ にほんこく いっさい

なり。日蓮、あに「大通智勝仏」にあらずや。日本国の一切

しゅじよう じつこうざどうじよう じつこうどうじよう ざ じっかい

衆生こそ「十劫坐道場（十劫道場に坐す）」とて、十界そ

ほんぼう

なんみようほうれんげきよう

ひい

せん

のまま本法の南無妙法蓮華經へ引き入るるなり。詮ずると

しんじん

い

なんみようほうれんげきよう

とな

たてまつ

ころ、信心を出だして南無妙法蓮華經と唱え奉るべきも

うんぬん

のなり云々。

いち びんにんけんししめ

ごしんだいかんぎ びんにん

たま

み

こころ

一、「貧人見此珠

其心大歡喜（貧人はこの珠を見て、その心

おお

かんぎ

こと

は大いに歡喜す」の事

おお

い

ししめ

いちじようむげ

ほうしめ

仰せに云わく、「此珠」とは、一乗無価の宝珠なり。

びんにん

げこん

しょうもん

そう

いつさいしめじよう

「貧人」とは、下根の声聞なり。総じては一切衆生なり。

せん

まつぼう

い

ししめ

なんみようほうれんげきよう

詮ずるところ、末法に入つて、「此珠」とは南無妙法蓮華經

びんにん

にほんこく

いつさいしめじよう

だいもく

とな

なり、「貧人」とは日本国の一切衆生なり。この題目を唱え

たてまつ もの

しんだいかんぎ

けんほうとう

ほうとう

み

奉る者は、「心大歡喜」せり。されば、「見宝塔（宝塔を見

けんししゆ

おな

せん

し

る」と「見此珠」とは同じきことなり。詮ずるところ、「此

しゆ

われ

しゆじよう

いっしん

いちねんさんぜん

きよう

珠」とは、我ら衆生の一心なり、一念三千なり。この経に

あ

たてまつ

とき

いちねんさんぜん

ひら

たま

み

い

値い奉る時、一念三千と開くを、「珠を見る」とは云うな

たま

ひろ

いっさいしゆじよう

しんぼう

たま

り。この「珠」は広く一切衆生の心法なり。この「珠」は

たいちゆう

ざいゆう

いっしん

さんぜんぐそく

たから

ぐそく

体中にある財用なり。一心に三千具足の財を具足せり。

たま

ほうべんぼん

しよほうじつそう

と

ひゆほん

この「珠」を、方便品にして諸法実相と説き、譬喩品にて

だいびやくごしや

さんそうにもく

ごひやくゆじゆん

ほうとう

とも

みないつしゆ

は大白牛車、三草二木、五百由旬の宝塔、共に皆一珠の

みようほうれんげきよう

ほうしゆ

きようもん

しきしん

じつそう

かんき

と

妙法蓮華經の宝珠なり。この経文、色心の実相の歡喜を説

けり。けん し しゆ「見此珠」の「見」は、けん色法なり。しきほう「其心大」と云う

は、しんぼう心法なり。しきしんとも色心共に歡喜なれば、かんき「大歡喜」と云うなり。だいかんぎ

せん詮ずるところ、「此珠」というは、し しゆ我ら衆生の心法なり。われ しゆじよう しんぼう

よつて、いちねんさんぜん一念三千の宝珠なり。ほうしゆいわゆる妙法蓮華經なり。みようほうれんげきよう

いま まつだい い今、たま あらわ末代に入つてこの珠を顕すことは、にちれんとう たぐ日蓮等の類い

なり。みぞういわゆる未曾有の大曼荼羅こそ、まさ正しく一念三千の

ほうしゆ宝珠なれ。けん「見」の字は、じ日本国の一切衆生、にほんこく いっさいしゆじよう ひろ広くは一閻浮提

しゆじようの衆生なり。ごしんだいかんぎしかりといえども、「其心大歡喜」と云う時は、い

にちれん日蓮が弟子檀那等の信者をさすなり。しんじや詮ずるところ、せん煩惱即ぼんのうそく

ぼだい しょうじそくねはん たいだつ

ごしんだいかんぎ

菩提・生死即涅槃と体達するが、「其心大歡喜」なり。され

われ しゅじょう ごひやくじんてん げしゅ たま うしな ごどう ろくどう

ば、我ら衆生、五百塵点の下種の珠を失つて、五道・六道

りんね びんにん ちか さんぜんじんてん げしゅ す び

に輪廻し、貧人となる。近くは三千塵点の下種を捨てて「備

りんしょうどう しょうどう めぐ びんにん

輪諸道（つぶさに諸道を輪る）」せり。これによつて貧人と

な いま たま しやくそん あ たてまつ みつ え もと

成る。今この珠を釈尊に値い奉つて見付け得て、本のご

と え ゆえ しんだいかんぎ まつぼうとうこん

とく取り得たり。この故に、「心大歡喜」せり。末法当今に

みょうほうれんげきょう ほうしゅ じゅじ たてまつ こしん み

おいて、妙法蓮華經の宝珠を受持し奉つて己心を見るに、

じっかいご ぐ ひゃつかいせんによ いちねんさんぜん ほうしゅ ふんみょう ぐそく

十界互具・百界千如・一念三千の宝珠を分明に具足せり。

まつぼう ようほう だいもく うんぬん

これ、しかしながら末法の要法たる題目なり云々。

いち によかんろけんかん かんろ そそ こと

一、「如甘露見灌（甘露もて灌がるるがごとし）」の事

おほ い かんろ てんじよう かんろ

仰せに云わく、「甘露」とは、天上の甘露なり。され

みようらくだいしい じつそうじようじゆう かんろ ふし

ば、妙楽大師云わく「実相常住は甘露のごとし。これ不死

くすり うんぬん しゃく こころ しょうほうじつそう ほったい かんろ

の薬なり」云々。この釈の心は、諸法実相の法体をば甘露

たと かんろ ふし くすり い せん みよう

に譬えたり。甘露は不死の薬と云えり。詮ずるところ、妙

ふし くすり こころ ふし ほうかい さ

とは不死の薬なり。この心は、不死とは法界を指すなり。

ゆえ しんらんさんぜん ばんぼう ふしぎ たん しょうじゅういめつ

その故は、森羅三千の万法を不思議と歎じたり。生住異滅

とう いとうい さんぜじようじう ふし い ほんぼう とく

の当位当位、三世常恒なるを不死と云う。本法の徳として、

みず 下 冷 上 熱 みよう い

水はくんだりつめたく、火はのぼりあつし。これを妙と云う。

すなわ ふしぎ これ即ち不思議なり。この重を不死とは云うなり。

かんろ みよう 「甘露」と妙とは同じことなり。しかれば、法界のま

さしお みようほう と ほんぽう かんろ い

まに闇いて妙法なりと説くを、本法とも甘露とも云えり。

ひ みず 消 ほんぽう ふし じっかいここ とういとうい

火は水にきゆる、本法にして不死なり。十界己々の当位当位

ふ ま じようじゅうほんぬ かんろ みようほう

の振る舞い、常住本有なるを、甘露とも、妙法とも、

ふしぎ ほんぽう しかん い せん まつぽう

不思議とも、本法とも、止観とも云えり。詮ずるところ、末法

い かんろ なんみようほうれんげきよう けんかん

に入つて「甘露」とは、南無妙法蓮華経なり。「見灌」とは、

じゅじ いちぎよう うんぬん

受持の一行なり云々。

いち にやくうあくにんいふぜんしん あくにんあ ふぜん こころ

一、「若有惡人以不善心（もし惡人有つて、不善の心をも

つて) 等の事

とお

い

あくにん

ざいせ

だいば

くぎやり

仰せに云わく、「悪人」とは、在世にては提婆・瞿伽利

とう

ふぜんしん

あくしん

ほとけ

めり

たてまつ

等なり。「不善心」とは、悪心をもつて仏を罵詈し奉る

と

めつご

あくにん

こうぼう

じかく

ちしよう

ことを説くなり。滅後には、「悪人」とは弘法・慈覚・智証・

ぜんどう

ほうねんとう

ふぜんしん

ぼうごん

ぼうごん

善導・法然等これなり。「不善心」とは、謗言なり。この謗言

か うつ

じゅうじゅうしんろんとう

せんちやくしゅうとう

ほうぼう

しよ

を書き写したる十住心論等・選択集等の謗法の書ども

まつぼう

い

ぜんにん

にちれんとう

たぐ

なり。さて、末法に入つて「善人」とは、日蓮等の類いな

ぜんしん

ほとけぐつう

しんじん

り。「善心」とは、法華弘通の信心なり。いわゆる

なんみようほうれんげきよう

うんぬん

南無妙法蓮華經これなり云々。

いち によぜ によぜ

一、「如是、如是（かくのごとし、かくのごとし）」の事

（一）

おほ い しゃく い ほつそう ぜ によ こんじよう

仰せに云わく、釈に云わく「法相の是に如し、根性の

ぜ によ ほつそう ぜ によ しょほうじつそう かさ

是に如するなり。「法相の是に如す」とは、諸法実相を重ね

によぜ と こんじよう ぜ によ くほうかい

て「如是」と説かれたり。「根性の是に如す」とは、九法界

と き ほうとも しゃかによらい しょせつ

を説かれたり。しかれば、機・法共に釈迦如来の所説のご

しんじつ しょうみよう はじ によぜ きよういち

とく真実なりと証明したまえり。始めの「如是」は教一

かいえ つぎ によぜ にんいちかいえ こんきよう こころ しょほう

開会なり、次の「如是」は人一開会なり。権教の意は、諸法

もうほう 嫌 きやくべつ ふゆう おし こんじよう

を妄法ときらいし隔別・不融の教えなり。根性において

しょうよくふどう しゆじゆ せつぼう ひと

は性欲不同なれば、種々に説法したまえり。よつて、人も

じようぶつ

こんきよう

こころ

しよほうじつそう

おんきよう

じっかい

成仏せず。今經の心は、諸法実相の御經なれば、十界

びようどう

さず

みようほう

こんじよう

ふどう

平等に授くるところの妙法なり。根性は不同なれども、

おな

によぜしよう

いつしよう

せん

いま

まつぼう

い

同じく如是性の一性なり。詮ずるところ、今、末法に入つ

ほつそう

ぜ

によ

とうちゆうそうじよう

ほんぞん

こんじよう

ての「法相の是に如す」は、塔中相承の本尊なり。「根性

ぜ

によ

じっかいおんねん

そんぞう

ほつそう

の是に如するなり」といふは、十界宛然の尊像なり。「法相」

なんみようほうれんげきよう

こんじよう

にほんこく

いつさいしゆじよう

ひろ

は南無妙法蓮華經なり。「根性」は日本国の一切衆生、広

いちえんぶだい

しゆじよう

うんぬん

くは一閻浮提の衆生なり云々。

いち

ぜしんぶつし

じゅうじゆんぜんじ

しん

ぶつし

じゆんぜん

じ

じゆう

一、「是真仏子 住淳善地（これ真の仏子、淳善の地に住

こと

す）」の事

おほ

い

まつぼうとうこん

しやかによらい

しんじつ

仰せに云わく、末法当今において、釈迦如来の真実の

みこ

ほけきよう ぎようじゃ

ゆえ

かみ もん

のう

御子というは、法華經の行者なり。その故は、上の文に「能

おらいせ

どくじしきよう

よ

らいせ

きよう

よ

たも

於来世 読持此經（能く来世において、この經を読み持た

と

らいせ

まつぼう

どく

ん」と説けり。「来世」とは、末法なり。「読」というは、

ほけきよう

によせつしゆぎよう

ぎようじゃ

こうぼう

じかく

ちしようとう

ぜんどう

法華經の如説修行の行者なり。弘法・慈覺・智証等、善導・

ほうねんとうよ

い

だいさん

れつ

けろん

ほう

しゃへいかくほう

り

法然等読んで云わく「第三の劣」「戲論の法」「捨閉閣抛」「理

どうじしよう

とう

よ

ほうぼう

さんぶつ

おんした

き

同事勝」等と読むは、謗法にして三仏の御舌を切るにあら

たも

でんぎようだいしい

ほけきよう

ずや。いかにいわんや持たんをや。伝教大師云わく「法華經

ほ

かえ

ほつけ

こころ

こころ

を讃むといえども、還つて法華の心を死す」とは、これな

り。

いま になれんとう たぐ なんみようほうれんげきよう とな たてまつ ひと

今、日蓮等の類い、南無妙法蓮華經と唱え奉る人は、

どくじしきよう にな ぜしんぶつし

「読持此經」の人なり。あに「是真仏子」にあらずや。「淳

ぜんじ じゃつこうど ぜしんぶつし し じ じつかい

善地」は寂光土にあらずや。「是真仏子」の「子」の字は十界

しゅじよう せん し じ ほけきよう ぎようじや

の衆生なり。詮ずるところ、この「子」の字は法華經の行者

かぎ しつぜごし わ こ し

に限る。「悉是吾子（ことごとくこれ吾が子なり）」の「子」

こう ふこう ふんべつ こ がとうかいじぶつし われ

は、孝・不孝を分別せざる子なり。「我等皆似仏子（我らは

みなぶつし に ちゅうこん しょうもん ぶつし に

皆仏子に似たり）」の「子」は、中根の声聞は仏子に似た

と いじおうじこ おうじ じ ゆえ

りと説かれたり。「為治狂子故（狂子を治せんがための故に）」

の「子」は、久遠の下種を忘れたれば、物にくるう子なり。
し くおん げしゅ わす もの 狂 こ

よつて、釈尊の御子にも、物にくるう子もあり、不孝の子
しやくそん みこ もの こ ふこう こ

もあり、孝養の子もあり。いわゆる、法華經の行者は眞実
こうよう こ ほけきよう ぎようじゃ しんじつ

の釈尊の御子なりと、釈迦、多宝、分身三千三百萬億那由
しやくそん みこ しゃか たほう ふんじんさんぜんさんびやくまんおくなゆ

他の世界に充滿せる諸仏の御前にして、孝・不孝の子を定
た せかい じゅうまん しょうぶつ みまえ こう ふこう こ さだ

めおきたまえり。父の業をつぐをもつて子とせり。
置 ちち わざ 繼 こ

三世の諸仏の業とは、南無妙法蓮華經これなり。法師品
さんぜ しょうぶつ わざ なんみようほうれんげきよう ほっしほん

に「行如来事（如来の事を行ず）」と説けり云々。法華經
ぎようによらいじ によらい じ ぎよう と うんぬん ほけきよう

は母なり、釈尊は父なり、我ら衆生は子なり。無量義經に
はは しょうそん ちち われ しゅじよう こ むりようぎきよう

い しょぶつこくおうぜ きようぶにんわごう ぐしやうぜ ぼさつし しょぶつ こくおう
云わく「諸仏国王是経夫人和合、共生是菩薩子（諸仏の国王

きよう ぶにん わごう とも ぼさつ こ しょう
とこの経の夫人と和合して、共にこの菩薩の子を生ず」。

ぼさつ ほけきやう ぎやうじや ほつしほん い ざいけ
「菩薩」とは、法華経の行者なり。法師品に云わく「在家・

しゆつけきやう ぼさつ どう ざいけ しゆつけ ぼさつ どう ぎやう うんぬん
出家行菩薩道（在家・出家にて菩薩の道を行ず）」云々。

いち ひくしよせん ひしんしよしき くの
一、「非口所宣、非心所測（口の宣ぶるところにあらず、心

はか こと
の測るところにあらず）」の事

おほ い ひくしよせん しきほう ひしんしよしき しんぼう
仰せに云わく、「非口所宣」は色法、「非心所測」は心法

しきしん にほう たいかい きやうけ しゆじやう
なり。色心の二法をもつて大海にして教化したる衆生を

せんしき い まつ いた こうどうしよぐんじやう
宣測するにあらずと云えり。末に至つては、「広導諸群生

ひろ もろもろ ぐんじよう みちび

と

うんぬん

（広く諸の群生を導く）と説かれたり云々。

いち ふぜんせけんほう によれんげさいすい じゅうじにゆじゆつ せけん ほう そ

一、「不染世間法 如蓮華在水 從地而涌出（世間の法に染

れんげ みず あ

じ ゆじゆつ

まらざるごと、蓮華の水に在るがごとし。地よりして涌出す」

こと

の事

おお せけんほう

まった とんよくとう ぜん

仰せに云わく、「世間法」とは、全く貪欲等に染せら

たと れんげ みず なか しょう

おでい 染

れず。譬えば、蓮華の水の中より生ずれども、淤泥にそま

れんげ じゆ ぼさつ たと

ざるがごとし。この「蓮華」というは、地涌の菩薩に譬え

じ ほつしよう だいち せん ほけきよう

たり。「地」とは、法性の大地なり。詮ずるところ、法華経

ぎようじや れんげ でいすい そ

ゆいいちだいじ

の行者は、蓮華の泥水に染まざるがごとし。ただ「唯一大事」

なんみようほうれんげきよう

ぐつう

ほん

せけんほう

の南無妙法蓮華經を弘通するを本とせり。「世間法」とは、

こくおう

だいじん

しよりよう

たま

かんい

たま

国王・大臣より所領を給わり官位を給わるとも、それには

ぜん

ほうぼう

くよう

う

ふぜんせけんほう

染せられず、謗法の供養を受けざるをもつて、「不染世間法」

い

せん

れんげ

みず

しやうちよう

とは云うなり。詮ずるところ、蓮華は水をはなれて生長せ

すい

なんみようほうれんげきよう

ほんげ

ぼさつ

ず。「水」とは、南無妙法蓮華經これなり。本化の菩薩は、

れんげ

かこくおん

このかた

ほんぼうしよじ

ぼさつ

「蓮華」のごとく、過去久遠より已来、本法所持の菩薩な

れんげさいすい

せん

すい

り。「蓮華在水」とは、これなり。詮ずるところ、この「水」

われ

ぎようじや

しんじん

れんげ

ほんいんほんが

みようほう

とは、我ら行者の信心なり。「蓮華」は、本因本果の妙法

しんじん

すい

みようほうれんげ

しやうちよう

じ

われ

なり。信心の水に妙法蓮華は生長せり。「地」とは、我ら

しゅじよう しんじ

ゆじゅつ

こうせんるふ

とき

いちえんぶだい

衆生の心地なり。「涌出」とは、広宣流布の時、一閻浮提の

いっさいしゅじよう

ほけきよう

ぎようじや

ゆじゅつ

い

一切衆生、法華經の行者となるべきを、「涌出」とは云う

うんぬん

なり云々。

いち

がんばついみらい

えんぜつりようかいげ

ねが

ほとけ

みらい

一、「願仏為未来 演説令開解（願わくは、仏は未来のた

えんぜつ

かいげ

こと

めに、演説して開解せしめたまえ」の事

おお

い

もん

みろくぼさつとう

まつぼうとうこん

仰せに云わく、この文は、弥勒菩薩等、末法当今のた

がじゅうくおんらい

きようけぜとうしゅ

われ

くおん

このかた

めに、「我従久遠来 教化是等衆（我は久遠より来、こ

しゅ きようけ

ことば

えんぜつりようかいげ

れらの衆を教化せり」の言を「演説令開解」せしめたま

しろう

たてまつ

きようもん

しろうもん

じゆりようほん

えと請じ奉る経文なり。この請文において寿量品は

あらわ

ごひやくじんてん

くおん

ほうもん

かいげ

顕れたり。五百塵点の久遠の法門これなり。「開解」とは、

きようしゆしやくそん

ごないしよう

ぶん

ねが

教主釈尊の御内証にこの分をおさえたもうを、「願わくは

ひら

おな

いちえ

だいしゆ

うたが

と

開かしめたまえ。同じく一会の大衆の疑いをも解かしめた

しよう

かいげ

ことば

じゆりようほん

まえ」と請ずるなり。この「開解」の語を、寿量品にし

によとうとうしんげ

によとう

まさ

しんげ

いまし

て「汝等当信解（汝等は当に信解すべし）」と誡めたまえ

かいげ

だいしゆ

みなほけきよう

ぎわく

り。もし開解したまわずんば、大衆は皆法華経において疑惑

しよう

み

うたが

しよう

さんあくどう

お

を生ずべしと見たまえり。疑いを生ぜば三惡道に墮つべ

すで みろくぼさつもう

とき

じゆりようほんあらわ

しと、既に弥勒菩薩申されたり。この時、寿量品顕れず

そくとうだあくどう

すなわ

まさ

あくどう

お

んば、「即当墮惡道（即ち当に惡道に墮つべし）」すべきな

じゆりようほん ほうもん たいせつ
り。寿量品の法門、大切なるはこれなり。

さいて、この「開解」の「開」において二つあり。迹門の
かいげ ふた

こころ しょうほう じつそう いちり え
意は、諸法を実相の一理と会したり。さては、諸法を実相

み じつかい みようほうじつそう いちり ひら
と開いて見れば、十界ことごとく妙法実相の一理なりと開

かいぶつちけん と ほんもん こころ じつかいほんぬ
くを、「開仏知見」と説けり。さて、本門の意は、十界本有

ひら しかく 継 と じゅう かいげ もう
と開いて始覚のきずなを解きたり。この重を「開解」と申

えんぜつ に じ しょうそん かいげ りようじ
されたり。よつて、「演説」の二字は釈尊、「開解」の両字は

だいしゆ えんぜつ じゆりようほん くおん
大衆なり。この「演説」とは、寿量品の久遠のことなり。

ついで しょうそん じゆりようほん と いっさいだいしゆ ぎわく やぶ
終に釈尊、寿量品を説かせたまいて、一切大衆の疑惑を破

うんぬん

りたまえり云々。

いち ひによろうい ち えそうだつ たと ろうい ち えそうだつ

一、「譬如良医、智慧聡達（譬えば良医の智慧聡達なるがごとし）」の事

こと

とし」の事

おお い ろうい きようしゆしやくそん ち え

仰せに云わく、「良医」とは教主釈尊、「智慧」とは

はちまんほうぞう じゅうにぶきよう そうだつ さんぜりようだつ やく

八万法蔵・十二部経なり。「聡達」とは、三世了達なり。「薬」

みようほう ろうやく じゆりようほん こころ じっかいほんぬ

とは、妙法の良薬なり。さて、寿量品の意は十界本有と

だん くすし いっさいしゆじよう

談ぜり。しかれば、この薬師とは、一切衆生のことなり。

ち え ばんほうここ じじゅうゆうほうしん ふ ま

「智慧」とは、万法己々の自受用報身の振る舞いなり。「聡

だつ じざいじざい ふ ま そうだつ い

達」とは、自在自在に振る舞うを「聡達」とは云うなり。詮

せん

まっほうとうこん

じゆりようほん

ほけきよう

ずるところ、末法当今のための寿量品なれば、法華經の

ぎようじや かみ

ちえ

なんみようほうれんげきよう

行者の上のことなり。この「智慧」とは、南無妙法蓮華經

そうだつ

ほんぬむさ さんじん

なり。「聡達」とは、本有無作の三身なりということなり。

がんぼん むみよう

だいろうやく

なんみようほうれんげきよう

ち

元品の無明の大良薬は、南無妙法蓮華經なり。「智」とは、

いっさいしゆじよう

ちから

え

いっさいしゆじよう

ごんごおんじよう

一切衆生の力なり。「慧」とは、一切衆生の言語音声な

ゆえ

げじゆ

い

がちりきによぜ

えこうしょうむりよう

わ

り。故に、偈頌に云わく「我智力如是 慧光照無量（我が

ちりよく

えこう

て

むりよう

い

智力はかくのごとし。慧光の照らすこと無量なり」と云え

うんぬん

り云々。

いち いちねんしんげ

こと

一、一念信解の事

仰せに云わく、この經文は一念三千の宝珠を納めたる

はこ おお きようもん いちねんさんぜん ほうしゅ おさ

函なり。これは現在の四信の初めの一念信解なり。

さて、滅後の五品の初めの十心具足・初随喜品も一念

さんぜん たから つ はこ ほけきよう こつずい まっぼう

三千の宝を積みたる函なり。法華經の骨髓、末法において

ほけきよう ぎようじや しゅぎよう そうみよう ふんみよう せん

法華經の行者の修行の相貌、分明なり。詮ずるところ、

しん ずいき ころおな ずいき しんじん しんじん

信と随喜とは心同じなり。随喜するは信心なり。信心する

ずいき いちねんさんぜん ほうもん しんじん ずいき はこ おさ

は随喜なり。一念三千の法門は、信心・随喜の函に納まりた

り。

また、この函とは、いわゆる南無妙法蓮華經これなり。

はこ なんみようほうれんげきよう

また、この函は、我らが一心なり。この一心は、万法の総体なり。総体は、題目の五字なり。一念三千と云うがごとく、
いっしんさんぜん
いっしんさんぜん
一心三千もあり。釈に云わく「介爾も心有らば、即ち三千
を具す」。

また、宝函とは、我らが色心の二法なり。本迹両門、
しょうじ にほう しかん にほう
生死の二法、止観の二法なり。詮ずるところ、信心の函に入
なんみようほうれんげきよう はこ うんぬん
れたる南無妙法蓮華經の函なり云々。

一、「見仏聞法、信受教誨（仏を見たてまつり法を聞いて、
きようかい しんじゆ こと
教誨を信受す）」の事

おお

い

きようもん

いちねんずいき

にん

ごじゆう

仰せに云わく、この経文は、一念随喜の人は五十の

くどく

そな

けんぶつもんぼう

くどく

ぐそく

功徳を備うべし。しかるあいだ、「見仏聞法」の功徳を具足

ごじつてんでん

ごじゆうにん

くどく

ずいきくどくほん

と

せり。この五十展転の五十人の功徳を、随喜功徳品に説か

せぜしようにう

あいだ

けんぶつもんぼう

くどく

そな

れたり。よつて、世々生々の間、「見仏聞法」の功徳を備

せん

まつぼう

い

ほとけ

み

えたり。詮ずるところ、末法に入つては、「仏を見る」と

じゆりようほん

しやくそん

ほう

き

なんみようほうれんげきよう

は寿量品の釈尊、「法を聞く」とは南無妙法蓮華経なり。

きようかい

にちれんとう

たぐ

きようけ

しよしゆうむとくどう

「教誨」とは、日蓮等の類い教化するところの諸宗無得道

きようかい

しんじゆ

ほけきよう

ぎようじや

の教誡なり。信受するは法華経の行者なり。

せん

じゆりようかいけん

まなこ

あらわ

けんぶつ

詮ずるところ、寿量開頭の眼の顕れては、この「見仏」

むさ さんじん

もんぼう

ばんぼう こと

おんじよう

しんじゆ

は無作の三身なり。「聞法」は、万法己々の音声なり。「信受

きようかい

ほんぬずいえんしんによ

ふ ま

すなわ

しきしん

教誨」は、本有随縁真如の振る舞いなり。これ即ち色心の

にほう

けん もん

しきほう

しんじゆ

しんじんりようのう

二法なり。「見」「聞」とは、色法なり。「信受」は、信心領納

しんぼう

しきしん

にほう

そな

なれば心法なり。いわゆる、色心の二法に備えたる

なんみようほうれんげきよう

うんぬん

南無妙法蓮華經これなり云々。

いち にやくぶ うにん いしつぼうまん ごふくさいた

にんあ

一、「若復有人、以七宝満○其福最多（もしまた人有つて、

しつぼう

み

ふくもつと

おお

こと

七宝をもつて満てて○その福最も多し」の事

おお

い

きようもん

しつぼう

さんぜん

仰せに云わく、この経文は、七宝をもつて三千

だいせんせかい

み

ししろう

くよう

ほけきよう

いちげ

じゆじ

大千世界に満てて四聖を供養せんは、法華經の一偈を受持

たてまつ

劣

と

てんだいだいし

しょう

し奉らんにはおとれりと説かれたり。天台大師は生・

よう じよう よう よつ

ぎ

ほけきよう

くどく

しゃく

養・成・栄の四つの義をもつて、法華經の功德を釈した

せん

まつぼう

い

だいもく

ごじすなわ

まえり。詮ずるところ、末法に入つては題目の五字即ちこ

みようほうれんげきよう

ごじ

ばんぼうのうしょう

ふぼ

れなり。この妙法蓮華經の五字は万法能生の父母なり。

しょう よう じよう よう

生・養・成・栄も、またまたかくのごときなり。よつて、

しゃく

ほう

ほん

しゃく

さんぜじつぼう

しよぶつ

釈には「法をもつて本となす」と釈せり。三世十方の諸仏

みようほうれんげきよう

ふぼ

ゆえ

ししょう

は、妙法蓮華經をもつて父母としたまえり。この故に、四聖

くよう

ほけきよう

たも

すぐ

しつぼう

せけん

を供養するよりも法華經を持つは勝れたり。七宝は世間の

ざいほう

ししょう

めつ

き

ぶつ

ぼさつ

らかん

みようほう

財宝なり。四聖は滅に帰する仏・菩薩・羅漢なり。さて、妙法

くどく　いつとくようふしつ　ひと　う　なが　う
の功德は、「一得永不失（一たび得れば永く失せず）」なれば、
く　う　くどく　ゆえ　すぐ　うんぬん
朽ち失せざる功德なり。この故に勝れたり云々。

いち　みようおんぼさつ　こと
一、「妙音菩薩」の事

おほ　い　みようおんぼさつ　じっかい　ごごんおんじよう
仰せに云わく、「妙音菩薩」とは、十界の語言音声な

おんじよう　じひ　ぼさつ　うんぬん
り。この音声ことごとく慈悲なり。菩薩とはこれなり云々。

いち　に　じむじんいぼさつ　とき　むじんいぼさつ　こと
一、「爾時無尽意菩薩（その時、無尽意菩薩）」の事

おほ　い　ぼさつ　くうけちゆう　さんたい　い
仰せに云わく、この菩薩は空仮中の三諦なり。「意」の

いちじ　いっさい　ほうもん　しようとく　い　ちゆうどう
一字には一切の法門を摂得するなり。「意」というは、中道

む　くうたい　じん　けたい
のことなり。「無」は、空諦なり。「尽」とは、仮諦なり。

なんみようほうれんげきよう

いつさいしよきよう

いわゆる「意」というは、

南無妙法蓮華經なり。

一切諸經

の意、三世の諸仏の意は、題目の五字なり。詮ずるところ、

ほつけ ぎようじゃ しんじん

法華の行者は信心をもつて「意」とせり云々。

いち かんのみみうちりき かんのみ みようち ちから こと

一、「觀音妙智力（觀音の妙智の力）」の事

おほ い みよう ふしぎ

仰せに云わく、「妙」とは不思議なり、「智」とは随縁

しんによ ちりき しんらさんぜん じじゆゆうち かんのみ

真如の智力なり。森羅三千の自受用智なり。「觀音」は、円

かん えんかん いちねんさんぜん かんのみ ほつけ いみよう

觀なり。円觀とは、一念三千なり。觀音とは、法華の異名な

かんのみ ほつけ げんもく いみよう しやく

り。「觀音と法華とは、眼目の異名なり」と釈するあいだ、

ほけきよう いみよう かん えんかん のん ぶつき

法華經の異名なり。「觀」とは円觀、「音」は仏機なり。よ

つて、「観音」の二字は人法一体なり。いわゆる一心三観・

いちねんさんぜん

うんぬん

一念三千これなり云々。

いち

じぎいしごう

じぎい

ごう

こと

一、「自在之業（自在の業）」の事

おお

い

じぎいしごう

じじゆゆうほうしん

ちりき

仰せに云わく、この「自在之業」とは、自受用報身の智力

しんらさんぜん

しよほう

さごう

指

い

しよさ

なり。森羅三千の諸法の作業をさして云うなり。その所作の

ほけきよう

こころ

ふしぎ

じぎいしごう

と

まま、法華經の意は不思議の「自在之業」なりと説けり。

じぎいしごう

もと

なんみようほうれんげきよう

うんぬん

この「自在之業」の本は南無妙法蓮華經これなり云々。

いち

みようほうれんげきようだ

らに

こと

一、「妙法蓮華經陀羅尼」の事

おお

い

みようほうれんげきようだ

らに
しようじきしや

仰せに云わく、「妙法蓮華經陀羅尼」とは、「正直捨

ほうべん たんせつむじようどう しようじき ほうべん す むじようどう と

方便 但説無上道（正直に方便を捨てて、ただ無上道を説

ごじ たい だらに ゆう みようほう ごじ

くのみ）なり。五字は体なり、陀羅尼は用なり。妙法の五字

われ しきしん だらに しきしん さよう

は、我らが色心なり。陀羅尼は、色心の作用なり。

せん だらに じゆ みようほうれんげきよう

詮ずるところ、陀羅尼とは呪なり。妙法蓮華経をもつ

ぼんのうそくぼだい しょうじそくねはん まじな にちれんとう たぐ

て煩惱即菩提・生死即涅槃と呪いたるなり。日蓮等の類い、

なんみようほうれんげきよう じゆじ じゆ い ちやく

南無妙法蓮華経を受持するをもつて、呪とは云うなり。「若

うのうじ そくじぶっしん よ たも すなわ ぶっしん

有能持 即持仏身（もし能く持つことあらば、即ち仏身を

たも 呪 しゃく い だらに しょぶつ

持つ）とまじないたるなり。釈に云わく「陀羅尼とは、諸仏

みつゝう はん せん ほつけ しゃくぶく ごんもん

の密号なり」と判ぜり。詮ずるところ、「法華の折伏は権門

の理を破す」の義、り は ぎ「悪を遮り、善を持つ」の義なり云々。あく ぜん たも ぎ うんぬん

一、「六万八千人」の事いち ろくまんはっせんになん こと

仰せに云わく、「六」とは、六根なり。おお い ろく ろっこん まん ろっこん「万」とは、六根

に具するところの煩惱なり。ぐ ぼんのう はち「八」とは、八苦の煩惱なり。はつく ぼんのう

「千」とは、八苦に具足する煩惱なり。せん はつく ぐそく ぼんのう すなわ ほけきようこれ即ち、法華經

に値い奉つて、「六万八千」の功德の法門と顯るるなり。あ たてまつ ろくまんはっせん くだく ほうもん あらわ

詮ずるところ、日蓮等の類い、南無妙法蓮華經と唱え奉るせん にちれんとう たぐ なんみようほうれんげきよう とな たてまつ

外に、「六万八千」の功德の法門これ無きなり云々。ほか ろくまんはっせん くだく ほうもん な うんぬん

一、「妙莊嚴王」の事いち みようしゅごんのう こと

おほ

い

じゃけん

すなわ

しょう

てほん

せん

仰せに云わく、「邪見は即ち正なり」の手本なり。詮

しんらさんぜん

ばんぼう

みよう

しょうごん

おう

ずるところ、森羅三千の万法、妙をもつて莊嚴したる王な

みよう

しょうたん

ことば

しょうごん

しきほう

り。「妙」とは、称歎の語なり。「莊嚴」とは、色法な

のう

しんぼう

しよほう

しきしん

ふしぎ

ほ

り、「王」とは、心法なり。諸法の色心を不思議と歎めたり。

みようしょうごんのう

ことば

さんぜん

しよほう

さんたい

ほつしょう

しかれば、「妙莊嚴王」の言、三千の諸法、三諦・法性の

とうい

せん

にちれん とう

たぐ

当位なるなり。詮ずるところ、日蓮等の類い、

なんみようほうれんげきよう

しきしん

しょうごん

しょうごん

南無妙法蓮華經をもつて色心を莊嚴したり。この莊嚴と

べつ

た

とうい そくみよう

しょうごん

は、別してかざり立てたるにはあらず、当位即妙の莊嚴な

ぼんのうそくぼだい

しやうじそくねはん

うんぬん

り。煩惱即菩提・生死即涅槃これなり云々。

いち けごん だいにち かんぎようとう ほんぷ とくどう こと
一、華嚴・大日・觀經等の凡夫の得道の事

おほ い かれ しゅ みなおのおの きようぎよう とくどう
仰せに云わく、彼らの衆、皆各々、その經々の得道に

に しんじつ ほつけ とくどう さん ご
似たれども、眞實には法華の得道なり。いわゆる三・五の

げしゅ やから きよう い しけんがしん もんがしよせつ はじ わ
下種の輩なり。經に云わく「始見我身、聞我所説（始め我

み み わ と き みようらくだいしい だつ
が身を見、我が説くところを聞く）。妙樂大師云わく「脱

げん あ ほんしゅ あ い
は現に在りといえども、つぶさに本種を騰ぐ」と云えり。

ほんしゅ い なんみようほうれんげきよう うんぬん
「本種」と云うは、南無妙法蓮華經これなり云々。

いち だいもく ごじ げしゅ しようもん こと
一、題目の五字をもつて下種の証文となすべき事

おほ い きよう い きようむりようぼさつ ひつきようじゅう
仰せに云わく、經に云わく「教無量菩薩 畢竟住

いちじよう むりよう ぼさつ ひつきよう いちじよう じゅう

一乗（無量の菩薩をして、畢竟して一乗に住せしめん）。

みようらくだいしい よきよう たね むりようぼさつ

妙楽大師云わく「余教をもつて種となさず」。「無量菩薩」

にほんこく いっさいしゅじよう ぼさつ かいえ だいもく おし

とは、日本国の一切衆生を菩薩と開会して題目を教えたり。

ひつきよう だいもく ごじ ひつきよう じゅういちじよう

「畢竟」とは、題目の五字に畢竟するなり。「住一乗」

じようしほうじよう じきしどうじよう ほうじよう じよう ただ

とは、「乗此宝乗 直至道場（この宝乗に乗じて、直ち

どうじよう いた げしゅ お

に道場に至る）、「これなり。下種とは、たねを下ろすなり。

しゅし じようぶつ たね かみ きようもん きようむりようぼさつ

種子とは、成仏の種のことなり。上の經文に「教無量菩薩」

きよう いちじ げしゅ しょうもん きよう だいもく

の「教」の一字は、下種の証文なり。「教」とは、題目を

さず とき ごんきよう とくどうな ほっけ とくどう

授くる時のことなり。「権教は得道無し、法華のみ得道す」

と教うるを、おし げしゆ下種とは云うなり。い末法に入つてこの経文をまつぼう い きようもん

出ださん人は有るべからざるなり。い にん あたしかに塔中相承のとうちゆうそうじよう

秘文なり。ひもん下種の証文、秘すべし、秘すべし云々。げしゆ しょうもん ひ ひ うんぬん

一、いち題目の五字、だいもく ごじ末法に限つて持つべきの事まつぼう かぎ たも こと

仰せに云わく、おお い きよう い経に云わく「悪世末法時あくせまつぼうじ 能持是経者のうじぜきようしゃ

（あくせまつぼう とき よ悪世末法の時、きよう たも能くこの経を持たば）。この「経」ときよう

は、だいもく ごじ のう いちじ こころ とど題目の五字なり。「能」の一字に心を留めてこれを案ずあん

べし云々。うんぬん まつだいあくせ にほんこく いっさいしゆじよう たも末代悪世の日本国の一切衆生に持てと云うい

経文なり云々。きようもん うんぬん

いち てんだいい
一、天台云わく「これ我が弟子、応に我が法を弘むべし」の

こと
事

おお い わ でし
仰せに云わく、「我が弟子」とは、上行菩薩なり。「我

ほう

が法」とは、南無妙法蓮華経なり。権教乃至始覚等は、随

たい

た ほう

だいもく

ごじ

ごひやく

他意なれば「他の法」なり。さて、この題目の五字は、五百

じんてん

このかた

しょうとく

ほつたい

ゆえ

わ

ほう

塵点より已来、証得したまえる法体なり。故に「我が法」

しゃく

てんだいい

みょうほうれんげきよう

ほんじじんじん

と釈せり。天台云わく「この妙法蓮華経は、本地甚深の

おうぞう

さんぜ

によらい

しょうとく

奥蔵なり。三世の如来の証得したもうところなり」とは、

これなり。

いち しきしん しんぼう い こと
一、色心を心法と云う事

おほ い げん じゆう い しょう う と とき
仰せに云わく、玄の十に云わく「請を受けて説く時は、

きようい と きようい ぶつ い ぶつ い すなわ
ただこれ教意を説くのみ。教意はこれ仏意なり。仏意は即

ぶつ ち ぶつ ち いた ふか ゆえ さん しし しょう
ちこれ仏智なり。仏智至つて深し。この故に三止四請す。

かんなん よきよう くら よきよう すなわ やす
かくのごとき艱難は、余経に比ぶるに、余経は則ち易し」

うんぬん しゃく こころ ふん みよう きようい ぶつ い ぶつ ち
云々。この釈の意分明なり。「教意」と「仏意」と「仏智」

おな きよう に じゆう は っ ぽん こころ
とは、いずれも同じことなり。「教」は二十八品なり、「意」

だいもく ご じ そ ぶつ い ほけきよう い み よう
は題目の五字なり。総じて、「仏意」とは法華経の異名なり。

ほけきよう い っ さい き しょう しん ぼう だいもく ご じ
法華経をもつて一切経の心法とせり。また、題目の五字を

いちだいせつきよう

ほんじやくにもん

たましい

きよう

い

もつて、一代説教・本迹二門の神とせり。経に云わく

みようほうれんげきようによらいじゆりようほん

だいもく

ごじ

「妙法蓮華経如来寿量品」、これなり。この題目の五字を

さんぜ

しよぶつ

みようこん

しよきよう

たましい

もつて三世の諸仏の命根とせり。さて、諸経の神も

ほけきよう

しようもん

みようほうれんげきようほうべんぼん

だい

法華経なりという証文は、「妙法蓮華経方便品」と題した

うんぬん

る、これなり云々。

いち

むさ

おうじん

われ

ぼんぷ

こと

一、無作の応身は我ら凡夫なりという事

おお

い

しやく

い

ぼんぷ

さんじん

ほん

え

仰せに云わく、釈に云わく「凡夫もまた三身の本を得

うんぬん

ほん

じ

おうじん

たり」云々。この「本」の字は、応身のことなり。されば、

ほんじむさ

ほんかく

たい

むさ

おうじん

ほん

本地無作の本覚の体は、無作の応身をもつて本とせり。よ

つて、我ら凡夫なり。応身は物に応う身なり。その上、
われ ほんぷ おうじん もの かな み うえ

寿命品の題目を唱え出だし 奉るは、真実に応身如来の
じゆりようほん だいまく とない い たてまつ しんじつ おうじんによらい

慈悲なり云々。
じひ うんぬん

一、「諸河に鹹無し」の事
いち しょうが しおな こと

仰せに云わく、この「鹹無し」のことをば、諸教の
おお お い しおな しょうきよう

無得道に譬えたり。大海のしおはやきをば、法華經の成仏
むとくどう たと たいかい 鹹 ほけきよう じようぶつ

得道に譬えたり。また、諸經に一念三千の法門無きは、諸河
とくどう たと しょうきよう いちねんさんぜん ほうもん な しょうが

にうしおの味無きがごとく、死人のごとし。法華經に一念
潮 あじな しびと ほけきよう いちねん

三千の法門有るは、うしおの大海に有るがごとく、生きた
さんぜん ほうもん あ たいかい あ い

にん

ほけきよう

あき

しん

泡

潮

る人のごとし。法華經を浅く信ずるは、あわのうしおのご

ふか しん

かいすい

き

かいすい

とし。深く信ずるは、海水のごとし。あわは消えやすし、海水

き

によせつしゆぎよう

もつと

たいせつ

は消えざるなり。如説修行、最ももつて大切なり。しか

しよきよう

たいが

ごくじん

たいかい

泡

鹹

りといえども、諸經の大河の極深なるも大海のあわのしお

あじ

ぐそく

ごんきよう

ほとけ

ほけきよう

りそく

ぼんぷ

の味をば具足せず。権經の仏は法華經の理即の凡夫には

ひやくせんまんばいおと

うんぬん

百千万倍劣るなり云々。

いち

みようらくだいし

しゃく

まつぼう

はじ

みようりな

一、妙樂大師の釈に「末法の初め、冥利無きにあらず」の

しゃく

こと

釈の事

おお

い

しゃく

まじろ

まつぼう

みよう

仰せに云わく、この釈の意は、末法において、冥の

りやく しやつけ しゆ

しやく やくおうほん

利益、迹化の衆あるべしということなり。この釈は、薬王品

しきようそくい えんぶだいにんびようしろうやく にやくにん うびよう とくもんぜきよう

の「此経即為閻浮提人病之良薬。若人有病、得聞是経、

びようそくしろうめつ ふろうふし きよう すなわ えんぶだいにん

病即消滅、不老不死（この経は即ちこれ閻浮提の人の

やまい ろうやく にんやまいあ きよう き

病の良薬なり。もし人病有らんに、この経を聞くことを

え やまい すなわ しろうめつ ふろうふし うんぬん

得ば、病は即ち消滅して、不老不死ならん」云々、こ

きようもん こころ そこ ふく しやく みようらくい

の経文の意を底に含めて釈せり。妙楽云わく「しかる

のち こひやく いちおう したが まつぼう はじ みようりな

に後の五百は、しばらく一往に従う。末法の初め、冥利無

だいきよう るぎよう ととき よ ゆえ

きにあらず。しばらく大教の流行すべき時に拠る。故に

こひやく い い ほんげ ぼさつ けん りやく しやつけ

五百と云う」と云えり。よって、本化の菩薩は頭の利益、迹化

みよう りやく
は冥の利益なるべし云々。
うんぬん

いち にぜんきよう がりやくこく こと
一、爾前経は瓦礫国の事

おほ い ほけきよう だいさん い によじゅうけ くら
仰せに云わく、法華経の第三に云わく「如従飢国来

こつぐだいおうぜん う くに きた だいおう ぜん
忽遇大王膳（飢えたる国より来つて、たちまちに大王の膳に

あ うんぬん ろく かん い がし どあんのん てんにん
遇うがごとし）」云々。六の巻に云わく「我此土安穩 天人

じようじゅうまん がじようどふ き わ ど あんのん てんにん つね
常充滿 我浄土不毀（我がこの土は安穩にして、天人は常

じゅうまん わ じようど やぶ うんぬん りようほん もん
に充滿せり。我が浄土は毀れず）」云々。この両品の文の

こころ こんきよう がりやく たび くに
意は、權教はことごとく瓦礫の旅の国なり。あやまりて

ほんこく おも みやこ おも まよ ゆえ いちおう しじゅうにねん
本国と思ひ都と思わんこと、迷いの故なり。一往、四十二年

じゅう

くに

しゅじょう

みな

ほんごく

おも

ほんごく

住したる国なれば、衆生は皆、本国と思えり。本国はこ

ほけきょう

しんげほん

い

ぐこうほんごく

ほんごく

の法華経なり。信解品に云わく「遇向本国（たまたま本国に

む

さん

ご

げしゅ

しよ

さ

ほんごく

じょうど

向かいぬ）。三・五の下種の所を指して、「本国」とも「浄土」

だいおうぜん

い

げしゅ

しんじ

すなわ

じゅじ

とも「大王膳」とも云うなり。下種の心地は、即ち受持・

しんげ

くに

うんぬん

信解の国なり云々。

いち

むみょう

あくしゅ

こと

一、無明の悪酒の事

おほ

い

むみょう

あくしゅ

よ

こうぼう

仰せに云わく、無明の悪酒に酔うということは、弘法・

じかく

ちしやうとう

ほうねんとう

ひとびと

むみょう

あくしゅ

しやうもん

慈覚・智証等、法然等の人々なり。無明の悪酒という証文

かんじほん

い

あつきにゆうごしん

あつき

み

い

は、勸持品に云わく「悪鬼入其身（悪鬼はその身に入る）」、

これなり。あつき 悪鬼あくしゆと悪酒おなとは同じことなり。あつき 「悪鬼」の「鬼」き

は第六天の魔王のことなり。だいろくてん まおう 悪酒あくしゆは無明むみようなり。あつき 無明即魔王、

魔王即無明なり。まおうそくむみよう 「其身」の「身」とは、ごしん しん 日本国の謗法にほんこく ほうぼうの一切いっさい

衆生しゆじようなり。い の 入ると吞むとは同じことなり。おな この悪鬼あつき入る人にん

は阿鼻あびに入る。い さて、ほけきよう 法華經ぎようじやの行者にゆうぶつちけんどうこは「入い 仏知見ぶつちけん道故どう

（ぶつちけん どう い ゆえ み 仏知見ぶつどうの道いに入るが故に）とくにゆう」と見えて、い 仏道ぶつどうに入る。「得入とくに入

無上道むじようどう（無上道むじようどうに入ることを得）う と」とも説あいかまけり。あい 相構あいかまえて相あい

構かまえて、むみよう 無明あくしゆの悪酒おそを恐るべきなり云々。うんぬん

いち にちれん こしよう こと

一、日蓮の己証の事

おお

い

じゆりようほん

なんみようほうれんげきよう

仰せに云わく、寿量品の南無妙法蓮華經これなり。

じゆせんがい しゆつげん

まつだいとうせい

べつふぞく

みようほうれんげきよう

地涌千界の出現にして、末代当世の別付嘱の妙法蓮華經

ごじ

いちえんぶだい

いつさいしゆじよう

と

つ

たも

ほとけ

の五字を一閻浮提の一切衆生に取り次ぎ給うべき、仏の

ちよくし

じようぎようぼさつ

うんぬん

と

つ

と

しゃくそん

勅使の上行菩薩なり云々。取り次ぎとは、取るとは釈尊

じようぎようぼさつ

て

と

じようぎようぼさつ

より上行菩薩の手へ取りたもう。さて、上行菩薩、ま

まつぼうとうこん

しゆじよう

と

つ

と

つ

た末法当今の衆生に取り次ぎたまえり。これを取り次ぐと

い

ひろ

まつぼうばんねん

と

つ

と

つ

は云うなり。広くは、末法万年までの取り次ぎ取り次ぎな

むりようだんぜつ

だんぜつ

と

り。これを「無令断絶（断絶せしむることなかれ）」とは説

けつちよう

ごじ

もう

うんぬん

じようぎようぼさつ

かれたり。また結要の五字とも申すなり云々。上行菩薩

と っ ひほう なんみようほうれんげきよう うんぬん
取り次ぎの秘法は、いわゆる南無妙法蓮華經これなり云々。

いち しやくそん じごん ひほう こと
一、釈尊の持言の秘法の事

おお い じごん ひほう きようもん い
仰せに云わく、持言の秘法の經文とは、寿量品に云わ

まい じさせねん みずか ねん な もん
く「每自作是念（つねに自らこの念を作す）」の文これな

まい じ さんぜじようじゅう ぜねん ねん
り。「每」の字は、三世常住なり。「是念」の「念」とは、

ないしよう ぐそく ゆえ じごん
わすれたまわずして内証に具足したまえり。故に持言なり。

ひほう なんみようほうれんげきよう ひ ひ
秘法とは、南無妙法蓮華經これなり。秘すべし、秘すべし

うんぬん
云々。

いち にちれんもんけ だいじ こと

一、日蓮門家の大事の事

仰せに云わく、この門家の大事は、涌出品の前三後三の

釈なり。この釈無くんば、本化・迹化の不同、像法付嘱・

末法付嘱、迹門・本門等の起尽、これ有るべからず。既に

「止。善男子（止みね。善男子よ）」の「止」の一字は、日蓮

門家の大事なり、秘すべし、秘すべし。総じて「止」の一字

は、正しく日蓮門家の明鏡の中の明鏡なり。口外も詮無

し。上行菩薩等を除いては、総じて余の菩薩をば、こと

ごとく「止」の一字をもつて成敗せり云々。

一、日蓮が弟子は臆病にては叶うべからざる事

おほ い ところ もんどうたいろん とき にぜん しゃくもん
仰せに云わく、この意は、問答対論の時は、爾前・迹門

しゃくそん もち

の釈尊をも用いるべからざるなり。これは、臆病にては、

しゃくそん もち

おも

ゆえ

しゃくそん

釈尊を用いまじきかなんと思ふべき故なり。釈尊をさえ

もち

いげ

とうがく

ぼさつ

用いるべからず。いかにいわんや、その以下の等覺の菩薩を

ほうぼう

ひとびと

や、まして謗法の人々においてをや。いわゆる

なんみようほうれんげきよう

だいおんじよう

い

しよきよう

しよしゆう

たいじ

南無妙法蓮華經の大音声を出だして諸經・諸宗を対治す

ぎよう おなんもんどう

ごしん むしよい

なんもんどう

たく

べし。「巧於難問答 其心無所畏（難問答に巧みにして、

ところ おそ

な

うんぬん

その心に畏るるところ無し」とは、これなり云々。

いち

みようほうれんげきよう

ごじ

まなこ

い

こと

一、妙法蓮華經の五字を眼と云う事

おほ い ほつけだいし い ぶつめつどご のうげごぎ
仰せに云わく、法華第四に云わく「仏滅度後 能解其義

ぜしよてんにん せけん しげん ほとけめつど のち よ ぎ げ
是諸天人 世間之眼（仏滅度して後に、能くその義を解せ

しよ てん にん せけん まなこ うんぬん きようもん
ば、これ諸の天・人の世間の眼なり）云々。この経文の

こころ ほけきよう にん てん にじよう ぼさつ ほとけ げんもく
意は、法華経は人・天・二乗・菩薩・仏の眼目なり。こ

げんもく ひろ にちれんいちにん まなこ ごげん
の眼目を弘むるは日蓮一人なり。この眼には五眼あり。い

にくげん てんげん えげん ほうげん ぶつげん まなこ 抉
わゆる肉眼・天眼・慧眼・法眼・仏眼なり。この眼をくじり

べつ まなこ い にん こうぼうだいし
て別の眼を入れたる人あり。いわゆる弘法大師これなり。

ほけきよう いちねん さんぜん そくしんじようぶつ しよぶつ かいげん とど
法華経の一念三千・即身成仏の諸仏の開眼を止めて

しんこんきよう い ほけきよう まなこ くじ にん
真言経にありと云えり。これあに法華経の眼を抽れる人

にあらずや。またこの眼をとじふさぐ人あり。いわゆる法ほう

ねんしようにん

しやへい

へい

もんじ

まなこ

と

然上人これなり。「捨閉」の「閉」の文字は、眼を閉ずる

ぎ

義にあらずや。

せん

のうぐ

にん

やく

にちれんとう

たぐ

詮ずるところ、能弘の人に約しては、日蓮等の類い、

せけん しげん

しよぐ

ほう

したが

だいじようきようてん

「世間之眼」なり。所弘の法に随えば、この大乘經典は

しよぶつ

まなこ

せん

げん

いちじ

いちねんさんぜん

これ諸仏の眼なり。詮ずるところ、「眼」の一字は一念三千

ほうもん

ろくまんくせんさんびやくはちじゆうしじ

げん

いちじ

おさ

の法門なり。六万九千三百八十四字をこの「眼」の一字に納

げん

じあらわ

み

ぼんのうそくぼだい

しろうじそく

めたり。この「眼」の字顕れて見れば、煩惱即菩提・生死即

ねはん

涅槃なり。

いま まつぼう い
今、末法に入つて、「眼」とは、いわゆる未曾有の

だいまんだら

ごほんぞん

ほか

げんもくな

うんぬん

大曼荼羅なり。この御本尊より外には眼目無きなり云々。

いち ほけきよう ぎようじや すいか ぎようじや こと

一、法華經の行者に水火の行者ある事

おお

い

そう

きよう

しん

たてまつ

にん

すいか

仰せに云わく、総じてこの經を信じ奉る人に、水火

ふどうあ

ゆえ

ひ

ぎようじや

おお

みず

の不同有り。その故は、火のごとき行者は多く、水のごと

ぎようじや まれ

ひ

きよう

き行者は希なり。火のごとしとは、この經のいわれをき

かえん

燃

た

たつと

しゆしよう

おも

しん

きて火炎のもえ立つがごとく貴く殊勝に思つて信ずれど

しょうしつ

とうぎ

だいしんじん

み

も、やがて消失す。これは、当座は大信心と見えたとれども、

しんじん

ともしびき

易

その信心の灯消ゆることやすし。

みず

ぎようじゃ

もう

みず

ちゆうやふたい

なが

さて、水のごとき行者と申すは、水は昼夜不退に流る

すこ

止

ほけきよう

しん

るなり。少しもやむことなし。そのごとく法華経を信ずるを

みず

ぎようじゃ

い

うんぬん

水の行者とは云うなり云々。

いち

によにん

みよう

しゃくそん

いったい

こと

一、女人と妙と釈尊と一体の事

おお

い

によにん

こ

しゅつしよう

しゅつしよう

こ

仰せに云わく、女人は子を出生す。この出生の子、

こ

しゅつしよう

てんでん

むしゅ

こ

また子を出生す。かくのごとく展転して無数の子を

しゅつしよう

しゅつしよう

こ

ぜんし

あくし

出生せり。この出生の子に、善子もあり悪子もあり、

たんげんみれい

こ

しゅうる

こ

たけ

低

こ

端嚴美麗の子もあり醜陋の子もあり、長のひくき子もあり

おお

こ

なんし

によし

うんぬん

大いなる子もあり、男子もあり女子もあり云々。

せん

みよう

いちじ

ばんぼう

しゅつしょう

じごく

詮ずるところ、妙の一字より万法は出生せり。地獄

がき

ないしぶつかい

ごんきよう

じつきよう

もあり餓鬼もあり乃至仏界もあり、権教もあり実教もあ

ぜん

あく

しよほう

しゅつしょう

うんぬん

り、善もあり悪もあり、諸法を出生せり云々。

しやかいちぶつ

おんみ

いっさい

ぶつぼさつとう

また、釈迦一仏の御身より一切の仏菩薩等ことごとく

しゅつしょう

あみだ

やくし

だいにちとう

しやくそん

出生せり。阿弥陀・薬師・大日等は、ことごとく釈尊の

いちげつ

ばんすい

う

ばんえい

によにん

一月より万水に浮かぶところの万影なり。しかれば、女人と

みよう

しやくそん

みつ

まった

ふどうな

みようらくだいしい

妙と釈尊との三つ全く不同無きなり。妙楽大師云わく

みよう

すなわ

さんぜん

さんぜん

すなわ

ほう

うんぬん

だいばほん

い

「妙は即ち三千、三千は即ち法なり」云々。提婆品に云

ういちほうしゅ

けじきさんぜんだいせんせかい

ひと

ほうしゅ

あたいさんぜん

わく「有一宝珠、価直三千大千世界（二つの宝珠の、価直三千

だいせんせかい

あ

うんぬん

大千世界なるもの有り」とは、これなり云々。

いち ち ふかしやく お かしやく もん こと

一、「置不呵責（置いて呵責せず）」の文の事

おお おお きようもん にちれんとう たぐ

仰せに云わく、この經文においては日蓮等の類いの

恐 もんじいちじ あ もんじ おそ

おそるべき文字一字これ有り。もしこの文字を恐れずんば、

とうざ じ みらいむけん ごう

たとい当座は事なしとも、未来無間の業たるべし。しかれ

むけんじごく ひ い ごくそつ

ば、無間地獄へ引き入る獄卒なるべし。それは「置」の一字

ち いちじ ごくそつ ほうぼうふしん

これなり。この「置」の一字は、獄卒なるべし。謗法不信の

とが み き い お かなら

失を、見ながら、聞きながら、云わずして置かんは、必ず

むけんじごく ださい ち いちじ ごくそつ あぼう

無間地獄へ墮在すべし。よって、「置」の一字、獄卒・阿防

らせつ

羅刹なるべし。もつとももつて恐るべきは、「置」の一字な

うんぬん

り云々。

せん

きようもん

うち

ごくそつ

いちじ

おそ

詮ずるところ、この經文の内に獄卒の一字を恐るべき

うんぬん

ごくそつ

いちじ

ふか

おも

にちれん

なり云々。この獄卒の一字、深くこれを思うべし。日蓮は、

じ

おそ

ゆえ

けんちようごねん

いまこうあんねんちゆう

この字を恐るるが故に、建長五年より今弘安年中まで、

ざいざい

在々

しよしよ

もう

張

所々にて申しはりしなり。ただひとえに、この獄卒を脱れ

ほけきよう

にやくにんふしん

にんしん

んがためなり。法華經には「若人不信（もし人信ぜずして）」

しやうぎふしんしや

うたが

しやう

しん

と

とも、「生疑不信者（疑いを生じて信ぜずんば）」とも説

ほけきよう もんもんくく

ねはんぎよう もんもんくく

きたまえり。法華經の文々句々をひらき、涅槃經の文々句々

お

かな

をひらきたりとも、置いていわずんば叶うべからざるなり。

ち

いちじ

ほか

ごくそつ

な

うんぬん

この「置」の一字より外に獄卒は無きなり云々。

いち

いねんな

りようぜんじようど

まい

こと

一、異念無く靈山浄土へ参るべき事

おお

い

いねん

ふしん

わ

こころ

仰せに云わく、異念とは、不信のことなり。もし我が心

ふしん

こころしゅつたい

しんじん

じゅう

なりとも不信の意出来せば、たちまちに信心に住すべし。

せん

ふしん

こころ

し

しんじん

こころ

詮ずるところ、不信の心をば師となすべからず。信心の心

ししよう

じようしんしんぎよう

ほけきよう

しゅぎよう

たてまつ

を師匠とすべし。浄心信敬に法華經を修行し奉るべき

のうじぜきよう

よ

きよう

たも

のうせつしきよう

なり。されば、「能持是經（能くこの經を持つ）」「能説此經

（能くこの経を説く）と説いて、「能」の字を説かせたま

りようぜん

えり。靈山ここにあり。「四土は一念にして、皆常寂光な

しど いちねん

みなじようじやつこう

り」とは、これなり云々。

うんぬん

一、不可失本心（本心を失うべからず）の事

こと

一、不可失本心（本心を失うべからず）の事

おおい い ほんしん

ほけきよう しんじん

仰せに云わく、この「本心」というは、法華經の信心の

しつ もう ほうぼう にん 賺

ほけきよう

ことなり。「失」と申すは、謗法の人にすかされて法華經を

捨つる心の出来するを云うなり。されば、天台大師云わ

てんだいだいしい

く「もし悪友に値わば則ち本心を失う」云々。この釈に、

あくゆう あ すなわ ほんしん うしな うんぬん しゃく

「悪友」とは謗法の人のことなり、「本心」とは法華經なり。

あくゆう ほうぼう ひと ほんしん ほけきよう

ほけきよう

ほんしん

い ころ

しよほうじつそう

おんきよう

法華経を「本心」と云う意は、諸法実相の御経なれ

じっかい

しゅじよう

しんぼう

ほけきよう

もう

ば、十界の衆生の心法を法華経とは申すなり。しかるに、

ほんしん

ひ

めいもう

ほう

じやく

ゆえ

ほんしん

この本心を引きかえて、迷妄の法に著するが故に、本心を

うしな

ほんしん

さん

ご

げしゆ

ほうもん

失うなり。この本心においては三・五の下種の法門なり。

ぜんゆう

あ

とき

うしな

ほんしん

もし善友に値う時んば、失うところの本心をたちまちに

けんとか

かしよう

しやりほつとう

ぜんゆう

見得するなり。いわゆる迦葉・舍利弗等これなり。善友と

しやかによらい

あくゆう

だいろくてん

まおう

げどう

ばらもん

は釈迦如来、悪友とは第六天の魔王・外道・婆羅門これな

り。

せん

まつぼう

い

ほんしん

にちれんぐつう

詮ずるところ、末法に入つて、「本心」とは、日蓮弘通

なんみようほうれんげきよう

あくゆう

ほうねん

こうぼう

じかく

の南無妙法蓮華經これなり。悪友とは、法然・弘法・慈覚・

ちしようとう

だいもく

ほんしん

うしな

智証等これなり。もしこの題目の本心を失わんにおいては、

さん

ご

じんてん

ふ

によぜてんでん

しむしゅこう

また三・五の塵点を経べきなり。ただ「如是展転 至無數劫

てんでん

むしゅこう

いた

しつ

（かくのごとく展転して、無數劫に至らん）」なるべし。「失」

むみよう

さけ

よ

ほんしん

うしな

とは、無明の酒に酔いたることなり。よつて、本心を失う

い

よ

醒

ごんきよう

す

と云うなり。この酔いをさますとは、権教を捨てしむるを

うんぬん

い
うなり云々。

いち

てんだいだいし

まおう

しょうげ

こと

一、天台大師を魔王の障礙せし事

おお

い

ずいぶん

ひぞう

ゆえ

仰せに云わく、このことは随分の秘蔵なり。その故は、

てんだいだいし いっしんさんがん いちねんさんぜん かんぼう と あらわ

天台大師、一心三觀・一念三千の觀法を説き顯さんとした

ふぼ そふ ひぎ じゆう なや たてまつ しょうげ

まいしかば、父母左右の膝に住して悩まし奉り、障礙し

すなわ だいろくてん まおう ふぼ ぎよう げん

たまいしなり。これ即ち、第六天の魔王が父母の形を現じ

しょうげ つい まおう しょうげ

て障礙せしなり。終に魔王に障礙せられたまわずして、

まかし かん ほうもん お

摩訶止觀の法門起これり。

いま にちれん ひろ なんみようほうれんげきよう

いかにいわんや、今、日蓮が弘むる南無妙法蓮華經は、

さんぜ しょうぶつ じようどう し じつぼうさった とくどう ししよう

三世の諸仏の成道の師、十方薩埵の得道の師匠たり。その

うえ しょうどうにせんねん ぶつぼう にぜん しゃくもん まおうじしんしょうげ

上、正像二千年の仏法は爾前・迹門なれば、魔王自身障礙

いま まっぼう とき しょうぐ ほう ほけきよう

をなさずともなるべし。今、末法の時は、所弘の法は法華經

ほんもん

じ

いちねんさんぜん

なんみようほうれんげきよう

のうぐ

どうし

本門の事の一念三千の南無妙法蓮華経なり。

能弘の導師は

ほんげじゆ

だいぼさつ

まおう

本化地涌の大菩薩にてましますべし。しかるあいだ、魔王

じしんくだ

しようげ

かな

じしん

自身下つて障礙せずんば叶うべからざるなり。よつて、自身

お

ふんみよう

どうりゆう

りようかん

さいみようじとう

下りたること分明なり。いわゆる道隆・良観・最明寺等

しよてんぜんじんとう

にちれん

ちから

あ

これなり。しかりといえども、諸天善神等は日蓮に力を合

ゆえ

たつ

くち

勝

ほか

だいなん

のが

わせたもう故に、竜の口までもかちぬ。その外の大難をも脱

いま

まおう

懲

そうろう

れたり。今は魔王もこりてや候らん。

にちれんしきよ

のち

ざんとう

いくさ

お

ゆえ

日蓮死去の後は、残党ども軍を起こすべきか。故に、

らっこ

かな

ゆえ

だいろうくてん

まおう

それも落居は叶うべからざるなり。その故は、第六天の魔王

けんぞく にほんこく しじゅうくおくまんしせんはつぴやくにじゅうはちにん

の眷属、日本国に四十九億九万四千八百二十八人なりしが、

いま にちれん こうさん たぶん きよう い あつきにゆう

今は日蓮に降参したること多分なり。経に云わく「悪鬼入

ごしん あつき み い かつせん

其身（悪鬼はその身に入る）」とは、これなり。この合戦の

お せん なんみようほうれんげきよう

起こりも、詮ずるところ、南無妙法蓮華経なり。

まおう たい まおう ゆう まおう たい まおう

魔王において、体の魔王、用の魔王あり。体の魔王と

ほっしょうどうぐ まおう みようほう ほう ゆう まおう

は、法性同共の魔王なり。妙法の法これなり。用の魔王と

しゅっしょう だいろくてん まおう ゆう まおう しょうげ

は、これより出生する第六天の魔王なり。用の魔王は障礙

たいゆうどうぐ しょうじつそう いちり ゆい

をなす。しかれども、体用同共の諸法実相の一理なり。「唯

ういちもん いちもん あ ちえ もん い むみよう ほっしょう

有一門（ただ一門のみ有り）」の智慧の門に入り、無明・法性

いったい

うんぬん

まかしかん

だいじ

ほうもん

は一体なるべきなり云々。いわゆる、摩訶止観の大事の法門

ほけきよう

いちだいせつきよう

すぐ

ゆえ

これなり。法華經の一代説教に勝れたるはこの故なり。

いちねんさんぜん

ほけきようだいさん

い

まぎゆうまみん

かい

一念三千とはこれなり。法華經第三に云わく「魔及魔民、皆

ごぶつぼう

ま

まみん

みなぶつぼう

まも

うんぬん

護仏法（魔および魔民、皆仏法を護らん）」云々。

いち

ほけきよう

ごくり

こと

一、法華經の極理の事

おお

い

しやくもん

にじようさぶつ

ほんもん

くおんじつじよう

仰せに云わく、迹門には二乗作仏、本門には久遠実成、

ごくり

い

ごくり

これをさして極理と云うなり。ただし、これもいまだ極理に

足

しやくもん

ごくり

もん

しよぶつち えじんじんむりよう

たらず。迹門にして「極理」の文は、「諸仏智慧甚深無量

しよぶつ

ちえ

じんじんむりよう

もん

ゆえ

（諸仏の智慧は甚深無量なり）」の文これなり。その故は、

この文を受けて文句の三に云わく「豎に如理の底に徹り、横
ほうかい へん きわ しゃく ほんもん ごくり
に法界の辺を窮む」と釈せり。さて、本門の極理というは、
によらい ひみつ じんずう しりき もん
「如来秘密・神通之力」の文これなり。

詮ずるところ、日蓮が意に云わく、法華經の極理とは、

なんみようほうれんげきよう いったい くどく ほうもん しゃくそん いんぎよう
南無妙法蓮華經これなり。一切の功德の法門、釈尊の因行
かどく にほう さんぜじつぼう しょうぶつ しゅいんかんか ほけきよう もんもんくく
果徳の二法、三世十方の諸仏の修因感果、法華經の文々句々
くどく と あつ なんみようほうれんげきよう な
の功德を取り聚めて、この南無妙法蓮華經と成したまえり。

ここをもつて、釈に云わく「総じて一經を結するに、た
よつ しゃく い そう いっきよう けつ
だ四つあるのみ。その枢柄を撮つて、これを授与す」云々。
すうへい と じゅよ うんぬん

じようぎようぼさつ

じゅよ

だいもく

ほか

ほけきよう

ごくりに

上行菩薩に授与したもう題目の外に、法華經の極理はこ

な

うんぬん

れ無きなり云々。

いち みようほうれんげきよう

ごじ

くら

こと

一、妙法蓮華經の五字の蔵の事

おお

い

こころ

みようほう

ごじ

なか

いちねん

仰せに云わく、この意は妙法の五字の中には一念

さんぜん

ほうしゅ

ごじ

くら

さだ

てんだいだいし

げんぎ

いち

はん

三千の宝珠あり。五字を蔵と定む。天台大師、玄義の一に判

みようほうれんげきよう

ほんじじんじん

おうぞう

ぜり。いわゆる「この妙法蓮華經は、本地甚深の奥蔵なり」

うんぬん

ほけきよう

だいし

い

ぜほけきようぞう

ほけきよう

くら

云々。法華經の第四に云わく「是法華經蔵（この法華經の蔵）」

うんぬん

みよう

けごん

ほう

あごん

れん

ほうどう

げ

はんにや

きよう

ねはん

云々。妙〈華嚴〉法〈阿含〉蓮〈方等〉華〈般若〉經〈涅槃〉、

い

みよう

ねはん

ほう

はんにや

れん

ほうどう

げ

あごん

また云わく、妙〈涅槃〉法〈般若〉蓮〈方等〉華〈阿含〉

きよう けこん いじよう みようほうれんげきよう ごじ じっかいさんぜん ほうしゅ

経《華嚴》、已上、妙法蓮華經の五字には、十界三千の宝珠

さんぜ しよぶつ ごじ くら なか

あり。三世の諸仏は、この五字の蔵の中より、あるいは華嚴

たから と い あこん ほうどう はんいや たから と

の宝を取り出だし、あるいは阿含・方等・般若の宝を取り

い しゅじゅせつぼう ろんじ にんし

出だし、種々説法したまえり。しかのみならず、論師・人師

とう しょしやく ごじ なか と い

等の疏釈も、ことごとくこの五字の中より取り出だして

いっさいしゅじよう あた

一切衆生に与えたまえり。

みな ごじ なか と い

これらは皆、五字の中より取り出だしたまえども、

みようほうれんげきよう ふくろ たも せん ごじ

妙法蓮華經の袋をば持ちたまわず。詮ずるところ、五字は

じようぎようぼさつ ふぞく しやつけ ごさつ しょうんじ 綺

上行菩薩の付嘱にして、さらに迹化の菩薩・諸論師いろわ

だいもく

じょうぎようじよでん

なんみようほうれんげきよう

くら

ざる題目なり。よつて、上行所伝の南無妙法蓮華経は蔵な

こんごうふえ

ふくろ

ふくろ

にほんこく

いっさい

り、金剛不壊の袋なり。この袋をそのまま日本国の一切

しゅじよう

あた

しんじん

ざいほう

う

と

衆生には与えたまえり。信心をもつてこの財宝を受け取る

いま

まつぽう

い

にちれんとう

たぐ

う

と

べきなり。今、末法に入つては、日蓮等の類い、受け取る

によいほうしゅ

うんぬん

ところの如意宝珠なり云々。

いち

われ

しゅじゅ

じようぶつ

う

じようぶつ

しやうもん

一、我ら衆生の成仏は打ちかためたる成仏という証文の

こと

事

おお

い

きよう

い

むじようほうしゅ

ふ

ぐじとく

むじよう

仰せに云わく、経に云わく「無上宝聚 不求自得（無上

ほうしゅ

もと

おの

え

もん

われ

の宝聚は、求めざるに自ずから得たり」の文これなり。我

ぼんぷそくごく

う 固

じようぶつ

ら凡夫即極と、はたと打ちかためたる成仏なり。いわゆる

ふぐじとく

なんみようほうれんげきよう

うんぬん

不求自得するところの南無妙法蓮華経なればなり云々。

いち にぜん ほつけ のう

こと

一、爾前・法華の能くらべの事

おお

い

にぜん

きよう

じゆうあく

ごぎやくとう

じようぶつ

仰せに云わく、爾前の経にして十悪・五逆等の成仏

のう

いま

ほけきよう

じっかいはいじよう

ふんみよう

にぜん

きよう

の能なし。今、法華経に、十界皆成、分明なり。爾前の経

むのう

しようもん

ほうべんぼん

い

たん い け みようじ

の無能という証文とは、方便品に云わく「但以仮名字

いんどう おしゅじよう

かり

みようじ

しゅじよう

いんどう

引導於衆生（ただ仮の名字をもつて、衆生を引導したも

もん

ほけきよう

のう

しようもん

うのみ」の文これなり。さて、法華経は能という証文は、

しよほうじつそう

もん

いま

まつぼう

い

だいいち

のう

「諸法実相」の文これなり。今、末法に入つて、第一の能た

なんみようほうれんげきよう
うんぬん
る南無妙法蓮華經これなり云々。

いち じゆしき ほつたい こと
一、授職の法体の事

おほ い もん ゆいぶつよぶつ ほとけ ほとけ
仰せに云わく、この文は「唯仏与仏（ただ仏と仏と

ひもん い
のみ」の秘文なり。たやすく云うべからざる法門なり。十界

さんぜん しょう いちごん じゆしき ひもん
三千の諸法を一言をもつて授職するところの秘文なり。そ

もん じんりきほん い かい おしきようせん じけんぜつ みな きよう
の文とは、神力品に云わく「皆於此經宣示顯説（皆この經

せん じけんぜつ もん ご じ すなわ じっかい
において宣示顯説す」の文これなり。この五字、即ち十界

どう じ じゆしき ひもん じっかい こ こ とうたい ほんぬ
同時に授職するところの秘文なり。十界己々の当体は、本有

みようほうれんげきよう じゆしき ひもん うんぬん
の妙法蓮華經なりと授職したる秘文なり云々。

いち まっだい ゆず じょう こと
一、末代の譲り状の事

おほ い まっだい
仰せに云わく、末代とは、末法五百年なり。譲り状と

てつ しようもん なんみようほうれんげきよう
は、手継ぎの証文たる南無妙法蓮華經これなり。これを譲

ふた ぎ あ いち あと に たから
るに、二つの義これ有り。一には跡をゆずり、二には宝を

いち あと ゆず しやかによらい あと ほけきよう
ゆずるなり。一に跡を譲るとは、釈迦如来の跡を法華經の

ぎようじや
行者にゆずりたまえり。その証文に云わく「如我等無異

わ ひと こと もん
(我がごとく等しくして異なることなからしめん)の文こ

つぎ ざいほう しやくそん ちえ かいとく
れなり。次に財宝をゆずるといは、釈尊の智慧・戒徳を

ほけきよう ぎようじや しようもん い むじよう
法華經の行者にゆずりたまえり。その証文に云わく「無上

ほうじゆ ふぐじとく むじよう ほうしゆ もと おの え

宝聚 不求自得（無上の宝聚は、求めざるに自ずから得た

もん うんぬん だいもく ごじ ゆず じよう

り）の文これなり云々。さて、この題目の五字は譲り状な

うんぬん

り云々。

いち ほんぬ しかん こと

一、本有の止観という事

おお い ほんぬ しかん だいっう なら

仰せに云わく、本有の止観というは、大通をもつて習う

くおんじつじようどう ほとけ だいっうちしよぶつ 止観 しゃくそん さんぶつ

なり。久遠実成道の仏と大通智勝仏と釈尊との三仏

つぎ ぶつぽうそう さんぽう なら ゆえ だいっう

を、次のごとく仏法僧の三宝と習うなり。この故に、大通は

ほんぬ しかん すなわ さんぜ しよぶつ しかん さだ

本有の止観なれば、即ち三世の諸仏の師範と定めたり。よ

だいっうぶつ ほう なら ほう みようほうれんげきよう

って、大通仏を法と習う。この法は妙法蓮華經これなり。

よつて、証文に云わく「大通智勝仏 十劫坐道場

だいづうちしようぶつ

じつこうどうじよう

ざ

もん

（大通智勝仏は、十劫道場に坐したもう）の文これなり。

じつこう

じつかい

うんぬん

十劫は即ち十界なり云々。

いち

まつぼう

い

しぐせいがん

こと

一、末法に入つての四弘誓願の事

おお

い

しぐせいがん

いちもん

くでん

仰せに云わく、四弘誓願をば、一文に口伝せり。その

いちもん

じんりきほん

い

おがめつどご

おうじゆじ

一文とは、いわゆる、神力品に云わく「於我滅度後 応受持

しきよう

ぜにん おぶつどう

けつじよう むうぎ

われめつど

のち

斯経 是人於仏道 決定無有疑（我滅度して後において、

まさ

きよう

じゆじ

ひと

ぶつどう

けつじよう

応にこの経を受持すべし。この人は仏道において、決定し

うたが

うんぬん

きようもん

ほけきよう

じよほん

て疑いあることなけん」云々。この経文は、法華経の序品

はじ しぐせいがん ほうもん と お

じようぎよう

より始めて四弘誓願の法門を説き終わって、さて、上行

ぼさつ みようほうれんげきよう ふぞく とき みようほう ごじ しぐ

菩薩に妙法蓮華經を付嘱したもう時、妙法の五字に四弘

せいがん むす けつく と めつご まっぼう

誓願を結んで結句に説かせたまえり。「滅後」とは、末法の

はじ ごひやくねん しゅじようむへんせいがんぞ ぜにん

始めの五百年なり。衆生無辺誓願度というは、「是人」の

にん じ せいがん じゆ ほんげ じようぎようぼさつ せいがん い

「人」の字なり。誓願は地涌の本化の上行菩薩の誓願に入

すなわ ぶつどう にじ どだつ ぼんのうむへん

らんと、これ即ち「仏道」の二字、度脱なり。煩惱無辺な

ぼんのうそくぼだい しょうじそくねはん たいだつ ぶつどう い

れども、煩惱即菩提・生死即涅槃と体達す。仏道に入つて

ぼんのう じゆじしきよう しょ ほうもんむじんせいがんち

は煩惱さらになし。「受持斯經」の所には、法門無尽誓願知、

ふんみよう むじようぼだいせいがんししよう ぜにん おぶつどう けつじよう

分明なり。無上菩提誓願証というは、「是人於仏道 決定

むうぎ

さだ

しぐせいがんふんみよう

きようしゆしやくそん

まつぼう

無有疑」と定めたる四弘誓願分明なり。教主釈尊の末法

い

しぐせいがん

もん

じようぎようぼさつ

しぐせいがん

に入つての四弘誓願もこの文なり。上行菩薩の四弘誓願

もん

ふか

しあん

うんぬん

もこの文なり。深くこれを思案すべし云々。

いち

しぐせいがん

おう

ほう

ち

り

こと

一、四弘誓願の応・報・智・理という事

おお

い

しゆじようむへんせいがんど

おうじん

ぼんのうむへん

仰せに云わく、衆生無辺誓願度は応身なり、煩惱無辺

せいがんだん

ほうしん

ほうもんむじんせいがんち

ちほつしん

むじようぼだい

誓願断は報身なり、法門無尽誓願知は智法身なり、無上菩提

せいがんしょう

りほつしん

誓願証は理法身なり。

せん

せいがん

だいもくぐつう

せいがん

しやく

詮ずるところ、誓願というは、題目弘通の誓願なり。釈

い

かれ

あく

のぞ

すなわ

かれ

おや

に云わく「彼がために悪を除くは、即ちこれ彼が親なり」

とは、これなり云々。
うんぬん

いち ほんらい しぐ こと

一、本来の四弘の事

おお い しょう とうたい ほんらい しぐ

ゆえ

仰せに云わく、諸法の当体、本来四弘なり。その故は、

しゅじよう

ほうかい

せん

ほうかい

り ち じひ

衆生というは法界なり。詮ずるところ、法界に理・智・慈悲

みつ

ぐそく

おう

ほう

ほう

さんじん

しょう

じたい

むさ

の三つを具足せり。応・報・法の三身、諸法の自体なり。無作

おうじん

しゅじよう むへん せいがん ど

むさ

ほうしん

の応身をもつて衆生無辺誓願度というなり。無作の報身に

ちとく

だんとく

にとく

そな

ぼんのう むへん せいがん だん

は智徳・断徳の二徳を備えたり。煩惱無辺誓願断をもつて

ほんぬ

だんとく

さだ

ほうもん むじん せいがん ち

ほんぬ

本有の断徳とは定めたり。法門無尽誓願知をもつて本有の

ちとく

むじよう ぼだい せいがん しょう

むさ

ほっしん

智徳とす。無上菩提誓願証をもつて無作の法身というなり。

詮せんずるところ、四弘誓願しぐせいがんの中には衆生無辺誓願度をもつて

肝要かんようとするなり。今、日蓮等の類いまいは、南無妙法蓮華經にちれんとうをもつて

もつて衆生を度する、これより外は所詮しゆじようなきなり。「速そく

成就じようじゆぶつしん仏身すみ（速やかに仏身を成就す）これなり云々。詮せんず

るところ、四弘誓願しぐせいがんは一念三千なり。

さて、四弘の弘とは何物ぞ。いわゆる、上行所伝じようぎようしよでんの

南無妙法蓮華經なり。釈しやくに云わく「四弘、能も所も泯しんぶ」

云々。この釈しやくは止観しかんに前の三教さきを釈しやくせり。「能」といふ

は如来なり、「所」とは衆生なり。能所各別のうしよかくべつするは権教ごんきやうの

ゆえ ほけきよう こころ のうしよいつたい ほろ

故なり。法華經の心は能所一体なり。「泯ぶ」というは、

ごんきよう こころ き ほうとも いちどう のう しよ ほろ い

権教の心は機・法共に一同なれば、「能も所も泯ぶ」と云

のうしよいちどう じようぶつ ほろ

うなり。あえて能所一同して成仏するところを「泯ぶ」と

い いま まつぼう い ほけきよう ぎようじや

云うにはあらざるなり。今、末法に入つて、法華經の行者

しぐ のうしよかんのう そくしんじようぶつ しぐ うんぬん

は四弘能所感応の即身成仏の四弘なり云々。

おんこうききがき しゅう

御講聞書 終